

平成 30 年度
(2018)

授業計画解説（シラバス）

弘前大学大学院教育学研究科
教職実践専攻

授業計画解説（シラバス）

目次

1.	教育課程編成をめぐる動向と課題	1
2.	教育課程の開発と実践	4
3.	学びの様式と授業づくり	7
4.	教科領域指導研究	10
5.	生徒指導の理論的視点と実践的視点	13
6.	教育相談の理論と方法	16
7.	学校安全と危機管理	19
8.	教育経営の課題と実践	22
9.	教育における社会的包摂	25
10.	現代の学校と教員をめぐる動向と課題	28
11.	あおもりの教育Ⅰ（環境）	31
12.	あおもりの教育Ⅱ（健康）	34
13.	教科領域指導研究（発展）	37
14.	養護実践課題解決研究	41
15.	特別支援教育の教育課程の実施と評価	44
16.	地域教育課題研究（教育課程編成・教材開発）	47
17.	協働的生徒指導のマネジメント	50
18.	学校の地域協働と危機管理	53
19.	教育法規の理論と実践	56
20.	学校教育と教育行政	59
21.	教職員の職能成長	62
22.	学校保健のマネジメント	65
23.	学校安全と事故防止	68
24.	養護実践課題解決研究（発展）	71
25.	地域教育課題研究（授業づくり）	74
26.	教科領域の理論と実践	77
27.	実践的教育相談の課題と展開	80
28.	教育実践課題解決研究	83

29. 教育における社会的包摂の課題研究	86
30. 幼児児童教育の理解	89
31. 教育実践研究法（教育実践研究Ⅰ）	92
32. 教育実践研究Ⅱ	95
33. 教育実践研究Ⅲ	97
34. 教育実践研究Ⅳ	99
35. 実習ⅠA-1（課題把握）	101
36. 実習ⅠA-2（課題把握）	103
37. 実習ⅡA（仮説形成）	105
38. 実習ⅢA（課題検証）	107
39. 実習ⅠB-1（課題把握）	109
40. 実習ⅠB-2（課題把握）	111
41. 実習ⅡB（仮説形成）	113
42. 実習ⅢB（課題解決研究）	115
43. 実習ⅣB（課題解決検証）	117

授業科目区分	基礎科目	開設コース	全コース
授業科目名 (英文名)	【1】教育課程編成をめぐる動向と課題 (Trends and Issues on Curriculum Organization)		
単位	2 単位	必修・選択区分	必修
授業方法	演習	開講年次・学期	1 年次・前期
担当教員	中妻雅彦、森本洋介、 成田頼昭	担当形態	共同
授業の到達目標	<p>【教育実践開発コースの到達目標】 教育課程の思想・構造・原理原則について理論的に理解するとともに、教育課程編成をめぐる実践的課題や現代的動向について、今後の教職経験を見据えながら考察することができる。</p> <p>【ミドルリーダー養成コースの到達目標】 教育課程の思想・構造・原理原則について理論的に理解するとともに、教育課程編成をめぐる実践的課題や現代的動向について、自らの教職経験を踏まえながら考察することができる。</p>		
授業の概要	<p>教育課程編成の思想・構造・原理原則についての理論的理解を実践や事例を交えながら深めるとともに、教育課程編成をめぐる諸課題について考察していく。</p> <p>テキストをもとにしながらも、現在に至るまでの様々な実践や事例についても適宜取り上げつつ、教育課程編成の今後の在り方について議論する。</p> <p>研究者教員による講義をもとに理論的理解を図りつつ、実践や事例の考察などの考察に関しては、実務家教員も関わり、演習を進めていくこととする。</p>		
授業計画	<p>第1回：オリエンテーション (担当：中妻雅彦・森本洋介・成田頼昭) 「教育課程」に関する基本的理解を図るとともに、講義全体の内容を通観し、受講生の課題意識を深める。また、授業の進め方についての共通理解を図る。</p> <p>第2回：教育課程の理論と思想 (担当：中妻雅彦・森本洋介・成田頼昭) 「教育課程」の理論とその歴史的展開についての基本的理解を図り、その今日的意義について考察する。</p> <p>第3回：教育課程の構造 (担当：中妻雅彦・森本洋介・成田頼昭) 「教育課程」の構造についての基本的理解を図り、実際の教育課程・学校における教育活動における様態について考察する。</p> <p>第4回：教育課程の歴史（1）～1950年代半ば：経験主義～ (担当：中妻雅彦・成田頼昭) 戦後初期教育改革下における学習指導要領（試案）の分析を通じて、経験主義的カリキュラムの特性と課題について考察する。</p> <p>第5回：教育課程の歴史（2）～1970年代半ば：系統主義～ (担当：中妻雅彦・成田頼昭) 1958・1968年学習指導要領の分析を通じて、系統主義的カリキュラムの特性と課題について考察する。</p>		

第6回：教育課程の歴史（3）～2000年代：学び主義～

(担当：中妻雅彦・森本洋介・成田頼昭)

1989年以降の学習指導要領改訂の分析を通じて、子どもの主体的学びを軸としたカリキュラムの特性と課題について考察する。

第7回：現代教育課程の分析（1）～政策動向～

(担当：中妻雅彦・森本洋介・成田頼昭)

現在検討中の次期学習指導要領改訂をめぐる政策的動向について、中央教育審議会における議論などの検討を通じて、その特性と課題について考察する。

第8回：現代教育課程の分析（2）～各学校段階～

(担当：中妻雅彦・森本洋介・成田頼昭)

幼・小・中・高・特別支援学校における次期学習指導要領の分析を通じて、今後の学校教育における課題について考察する。

第9回：教育課程をめぐる国際動向

(担当：中妻雅彦・森本洋介・成田頼昭)

PISAやInternational Baccalaureateなど「教育課程」をめぐる国際的状況の検討を通じて、今後の日本における教育課程の在り方について考察する。

第10回：教育課程をめぐる現代的課題（1）～新たな学び～

(担当：中妻雅彦・森本洋介・成田頼昭)

「新たな学び」を実現するための教育課程上の課題について、これまでの自らの経験などの実例を交えて考察する。

第11回：教育課程をめぐる現代的課題（2）～教科と教科外～

(担当：中妻雅彦・成田頼昭)

教科と教科外との固有性などについての理解を踏まえ、それぞれの今日的意義と課題などについて、実例を交えながら考察する。

第12回：教育課程をめぐる現代的課題（3）～教科横断型カリキュラム～

(担当：中妻雅彦・成田頼昭)

教科横断的な教育課程の原理と意義についての基本的理解を踏まえ、その今日的意義と課題などについて、実例を交えながら考察する。

第13回：教育課程をめぐる現代的課題（4）～校種間接続～

(担当：中妻雅彦・成田頼昭)

幼小・小中・中高・高大など校種間の教育課程の接続についての基本的理解を踏まえ、その今日的意義と課題について、実例を交えながら考察する。

第14回：教育課程の評価

(担当：中妻雅彦・森本洋介・成田頼昭)

教育課程の評価の目的・方法などについての基本的理解を踏まえ、その今日的意義と課題について考察する。

第15回：教育課程をめぐる課題と展望

(担当：中妻雅彦・森本洋介・成田頼昭)

授業全体を通じて、教育課程をめぐる今日的課題を理論と実践との往還の視点から考察し、今後の学校現場での教育実践の在り方について展望する。

テキスト

田中耕治 他 (2011) 『新しい時代の教育課程 第3版』有斐閣アルマ

参考書・参考資料等

- ・田中博之 (2013) 『カリキュラム編成論－子どもの総合学力を育てる学校づくり－』放送大学教育振興会
- ・田中統治, 根津朋実 (2009) 『カリキュラム評価入門』勁草書房
- ・ウィギンズ, マクタイ (2012) 『理解をもたらすカリキュラム設計－「逆向き設計」の理論と方法－』日本標準
- ・その他各授業の学習テーマに応じて提示する。

学生に対する評価

【評価の基準】

- ①教育課程について、理論・構造・歴史などの基本的視座から理解することができる。
- ②今日の学習指導要領や学校における教育課程について、理論的視座から考察することができる。
- ③今後の学校における教育課程の編成と実施をめぐる実践を展望することができる。

【評価の構成】

- ①最終レポート (60%)
- ②事前学習ワークシート (20%)
- ③討論への参加状況など (20%)

授業科目区分	基礎科目	開設コース	全コース
授業科目名 (英文名)	【2】教育課程の開発と実践 (development and practice of curriculum)		
単位	2 単位	必修・選択区分	必修
授業方法	演習	開講年次・学期	1 年次・前期
担当教員	上野秀人, 中妻雅彦, 成田頼昭	担当形態	共同
授業の到達目標	<p>【教育実践開発コースの到達目標】 教育課程という問題領域への理解を深め, 単元開発や授業デザインのビジョンをもつこと, また, ビジョンを再構成することができる。</p> <p>【ミドルリーダー養成コースの到達目標】 教育課程開発の現状と課題, また, その上に立つ新しい教育実践上の概念を踏まえて, 教育課程における課題を自分なりに表現することができる。</p>		
授業の概要	<p>現行の学習指導要領及び次期の学習指導要領の動向を踏まえ, 教育課程研究の現状とその課題, また, 教育課程という領域における新しい教育実践上の概念を文献講読等により学び, 単元開発や授業デザインのビジョンをもち, 再構成することをねらいとしている。</p> <p>協働的な演習の中で, 理論的な知見を実践と統合しながら検討し, 子どもの構成的, 活動的, 対話的な学習を支援する教育課程デザインについて学ぶ。</p>		
授業計画	<p>第1回：オリエンテーション (担当：上野秀人・中妻雅彦・成田頼昭) 教育課程に関する基本的事項をもとに, 講義全体の内容を通観し, 受講生の課題意識を深める。また, 授業の進め方についての共通理解を図る。</p> <p>第2回：教育課程開発の課題（1）～必要性の観点から～ (担当：上野秀人・中妻雅彦・成田頼昭) 現行の学習指導要領及び次期の学習指導要領の動向と教育課程の開発・編成の必要性について考察する。</p> <p>第3回：教育課程開発の課題（2）～教育目標に応えるために～ (担当：上野秀人・中妻雅彦・成田頼昭) 教育目標に応える教育課程の開発・編成について考察する。</p> <p>第4回：教育課程経験を問う 教えることと学ぶこと（1）～経験から学ぶこと～ (担当：上野秀人・中妻雅彦・成田頼昭) 特色ある教育課程の実施から学ぶことについて考察する。</p> <p>第5回：教育課程経験を問う 教えることと学ぶこと（2）～個に応じた指導の充実～ (担当：上野秀人・中妻雅彦・成田頼昭) 個に応じた指導の充実について考察する。</p> <p>第6回：授業実践に生起する教育課程 教室におけるジレンマ（1）～教科指導と学校行事～ (担当：上野秀人・中妻雅彦・成田頼昭) 教科指導と学校行事の配置・実施について考察する。</p>		

第7回：授業実践に生起する教育課程 教室におけるジレンマ（2）～指導と評価の一本化～
(担当：上野秀人・中妻雅彦・成田頼昭)
指導と評価の一体化について考察する。

第8回：教育課程のデザインという問題領域 反省的実践家としての専門家像（1）～学習の構想と限界～
(担当：上野秀人・中妻雅彦・成田頼昭)
教科横断的な学習の構想と限界について考察する。

第9回：教育課程のデザインという問題領域 反省的実践家としての専門家像（2）～校種別及び校種接続の観点から～
(担当：上野秀人・中妻雅彦・成田頼昭)
幼保小中高の校種別及び校種接続の教育課程開発について考察する。

第10回：学びという経験を考える（1）～活動理論に学ぶ～
(担当：上野秀人・中妻雅彦・成田頼昭)
教育課程の立案・実施について、これまでの自らの経験などの実例を交えて考察する。

第11回：学びという経験を考える（2）～社会構成主義の学習論～
(担当：上野秀人・中妻雅彦・成田頼昭)
教育課程の立案・実施（学校規模、都市部へき地等の特色）について考察する。

第12回：学びという経験を考える（3）～協調学習とは～
(担当：上野秀人・中妻雅彦・成田頼昭)
学校内外のスタッフの協働による総合的な学習の時間の編成・実施・評価について考察する。

第13回：協調学習体験
(担当：上野秀人・中妻雅彦・成田頼昭)
教育課程活動と教育課程以外の活動（部活動やその他の活動）とを体系的に組み合わせて組織する。

第14回：レポートを読み合う（1）それぞれの教育課程上の課題を考える～複数プランでの考察～
(担当：上野秀人・中妻雅彦・成田頼昭)
複数プランの比較検討・効果予測・実地検証について考察する。

第15回：レポートを読み合う（2）それぞれの教育課程上の課題を考える～重点化プランでの考察～
(担当：上野秀人・中妻雅彦・成田頼昭)
重点化プランの比較検討・効果予測・実地検証について展望する。

テキスト
各授業の学習テーマに応じて提示する。

参考書・参考資料等
各授業の学習テーマに応じて提示する。

学生に対する評価

【評価の基準】

- ①児童生徒・地域の実態に応じてカリキュラムを構成する知識を有している。
- ②総合的な学習の時間、教科の再編成について、知識と技能を有している。
- ③学校における教育課程の編成と実施をめぐる実践を展望することができる。

【評価の構成】

- ①最終レポート（60%）
- ②事前学習ワークシート（20%）

③討論への参加状況など (20%)

授業科目区分	基礎科目	開設コース	全コース
授業科目名 (英文名)	【3】学びの様式と授業づくり (Analysis of Learning and Strategy of Lesson Planning)		
単位	2 単位	必修・選択区分	必修
授業方法	演習	開講年次・学期	1 年次・前期
担当教員	中野博之, 森本洋介, 三上雅生	担当形態	共同
授業の到達目標	<p>【教育実践開発コースの到達目標】 現職教員との対話等を通して、実践的な指導法について理解を深めるとともに、実際の場面で活用できる指導力を身につける。</p> <p>【ミドルリーダー養成コースの到達目標】 自らの経験則による対応を、相対化・理論化することで、応用性のある実践的指導力を身につける。</p>		
授業の概要	<p>21世紀型能力を育てるために必要とされる、授業方法や授業を支える機器（ICT機器等）について、そうした方法や機器を必要とする理念とともにその活用方法について考えていく。また、現場で直面する指導の諸問題について、特に授業での場面に焦点をあて、現状への理解を深めるとともに、対応する力を身につける。現場教員の経験や教育実習での経験を踏まえつつ、経験則による対応を理論的にとらえ直す場面を通じて理解と対応力を深めていく。</p>		
授業計画	<p>第1回：オリエンテーション (担当：中野博之・三上雅生) 講義の目的の確認と15回の授業内容の確認、授業の形式について確認をする。</p> <p>第2回：授業の現状と課題（アクティブラーニングの捉え方、様々な授業方法の比較検討） (担当：中野博之・三上雅生) アクティブラーニングを含む、様々な授業方法について調べ、どのような授業がどのような時に適しているのかを考えるとともに、これからの中野博之の教育がなぜアクティブラーニングを重視するのかの背景を探る。</p> <p>第3回：授業の組織化（1）～授業をデザインする（学習指導案の役割）～ (担当：中野博之・三上雅生) 学習指導案を書いた経験を基に、なぜ学習指導案を書くことが重要なのか、目標設定の視点から考える。</p> <p>第4回：授業の組織化（2）～学習意欲向上のための方策～ (担当：中野博之・三上雅生) 学習心理学の研究成果から学習意欲向上をもたらす授業とはどのようなものであるのか考える。</p> <p>第5回：授業の組織化（3）～授業を評価・分析する（ビデオ分析）～ (担当：中野博之・三上雅生) 授業を評価するとはどのようなことであるのか、評価するためにどこに焦点を当てて観察をするのかを議論することを通して、子供の活動を評価する視点をもつことの重要性を考える。</p> <p>第6回：授業の組織化（4）～板書、示範、学習の規範づくり～</p>		

(担当：中野博之・三上雅生)

板書，示範，授業での規範の重要性について議論し，各校種でどのような考え方の違いがあるのかを実感できるようにするとともに，その有るべき姿を考えていく。

第7回：授業の組織化（5）～一斉授業とペア・グループ学習～

(担当：中野博之・三上雅生)

一斉授業，ペア・グループ学習がそれぞれどのような目的をもった授業の時に適切であるのか考え，それぞれの授業の様式の留意点を明らかにする。

第8回：授業の組織化（6）～少人数指導，習熟度指導，TT学習～

(担当：中野博之・三上雅生)

それぞれの学習がそれぞれどのような目的をもった授業の時に適切であるのか考え，それぞれの授業の様式の留意点を明らかにする。

第9回：授業の組織化（7）～討論を取り入れた授業～

(担当：中野博之・三上雅生)

授業の中で子供同士の議論をどのように構成していくのか，言語活動の充実とともに考え，授業づくりに活かせるようにしていく。

第10回：授業の組織化（8）～ディベートを取り入れた授業～

(担当：中野博之・三上雅生)

ディベートを取り入れた授業について考え，実際に院生同士でディベートを行い，その教育的効果を検証する。

第11回：ICT活用と授業づくり（1）～実践事例の検討，課題と展望～

(担当：中野博之・森本洋介・三上雅生)

ICT教育の先進的な取り組み事例を検討し，どのような教育効果があるのか，また，どのような課題を持っているのか，今後どのように取り入れていくのかを考えていく。

第12回：ICT活用と授業づくり（2）～ICTを活用した模擬授業～

(担当：中野博之・森本洋介・三上雅生)

それぞれの教科ごとにICTを活用した授業づくりを行い，模擬授業を行いその効果を検証する。

第13回：「学習困難」を考える（1）～「学習困難」の理解～

(担当：中野博之・三上雅生)

学習困難について，これまでの研究成果を確認し，学習困難についての理解を深める。

第14回：「学習困難」を考える（2）～実際の事例と対応～

(担当：中野博之・三上雅生)

事例を検討し，その対応策について議論する。

第15回：総括討論～21世紀型能力の育成をめざした授業の在り方～

(担当：中野博之・三上雅生)

本授業での学びを総括し，21世紀型の能力をめざした授業の在り方について議論をする。

テキスト

各授業の学習テーマに応じて提示する。

参考書・参考資料等

各授業の学習テーマに応じて提示する。

学生に対する評価

【評価の基準】

①授業づくりという視点から日頃の授業を振り返ることができる。

②授業に関する理論的理解をもとに，今日の授業をめぐる問題を考察することができる。

【評価の構成】

- ①最終レポート (60%)
- ②事前学習ワークシート (20%)
- ③討論への参加状況など (20%)

授業科目区分	基礎科目	開設コース	全コース
授業科目名 (英文名)	【4】教科領域指導研究 (Research on Subjects Teaching)		
単位	2 単位	必修・選択区分	必修
授業方法	演習	開講年次・学期	1 年次・前期
担当教員	中野博之, 上野秀人, 瀧本壽史	担当形態	共同
授業の到達目標			
【教育実践開発コースの到達目標】 各学校(幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校)の各教科領域の特質の分析, 教材開発, 教材の分析等の教材研究等の在り方を知り, よりよい教科領域指導のための教材研究の仕方を身に付ける。			
【ミドルリーダー養成コースの到達目標】 各学校(幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校)の各教科領域の特質の分析, 教材開発, 教材の分析等の教材研究等の在り方を自分の経験を通して見直し, よりよい教科領域指導のための教材研究の仕方を身に付ける。			
授業の概要			
各学校(幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校)の各教科領域の実情と各教科領域の横断的な課題を各授業で明らかにしつつ, 教科領域指導充実のために必要な資料収集の仕方を考えていく。各教科領域ごとに助言者を招いてグループに分かれて授業を行う(10回~14回)場合も, 中教審答申, 幼稚園教育要領, 学習指導要領等に記述されている内容を把握するとともに, 各院生が担当している教科領域でどのような能力を育成するべきなのかを考える。			
また, 各教科領域ごとの学びを最終的には校内研修会としてどのように教科領域の枠を超えて学校教育全体としてとらえていくのかについても考えしていく。			
授業計画			
第1回：オリエンテーション (担当：中野博之・上野秀人・瀧本壽史) 本講義の目的の確認と15回の授業内容の確認, 授業の形式について確認をする。			
第2回：中教審答申, 学習指導要領からみた教科領域研究の動向 (担当：中野博之・上野秀人・瀧本壽史) 中教審答申, 幼稚園教育要領, 学習指導要領等に記述されている内容を把握するとともに, 各院生が担当している教科領域でどのような能力を育成するべきなのかを考える。			
第3回：各教科領域の独自性と共通性の検討 (担当：中野博之・上野秀人・瀧本壽史) 各院生が担当している教科領域の独自性を明らかにするとともに, それぞれの教科領域に共通点を考え, 学校教育として総合して子供を育てることの大切さを理解する。			
第4回：様々な調査等から見る各教科領域の課題 (担当：中野博之・上野秀人・瀧本壽史) これまでの研究による成果, 大規模な学力テストの結果等を洗い出し, どのようなことが真の課題であるのかを考える。			
第5回：思考力・表現力・判断力と各教科領域の関連 (担当：中野博之・上野秀人・瀧本壽史) 各教科領域が考える思考力・表現力・判断力について比較検討を行い, 各教科領域の独自性と共通点を明らかにする。			

第6回：アクティブラーニングと各教科領域の関連

(担当：中野博之・上野秀人・瀧本壽史)

院生が担当している各教科領域について、どのようにアクティブラーニングが設定できるのかについて考える。

第7回：汎用的スキルと各教科領域の関連

(担当：中野博之・上野秀人・瀧本壽史)

21世紀型能力で言うところの「汎用的スキル」の基本的な捉え方と、そのスキルが各院生の担当教科領域でどのように育てることができるのかを考える。

第8回：教科の専門的内容(学問研究)と授業づくりとの関連

(担当：中野博之・上野秀人・瀧本壽史)

各院生の学びをどのように子供に翻訳をして子供の学びとして価値あるものにしていくのかについて事例を基に考えていく。

第9回：教材の分析・開発の方法

(担当：中野博之・上野秀人・瀧本壽史)

21世紀型能力を育てるために、各院生が担当している教科領域について、どのような教材や授業形式が考えられるのか、検討を行う。

第10回：各教科領域の特性について（1）～教科領域ごとの特性～

(担当：中野博之・上野秀人・瀧本壽史)

教科領域ごとに助言者（弘前大学教育学部の幼児教育学及び教科教育学の専門家）を招いて、グループに分かれグループごとに教科の特性について考える。担当者はグループごとの議論に適宜加わり、議論の方向性をコーディネイトする。

第11回：各教科領域の特性について（2）～教科領域ごとの育てるべき能力～

(担当：中野博之・上野秀人・瀧本壽史)

教科領域ごとに助言者（弘前大学教育学部の幼児教育学及び教科教育学の専門家）を招いて、グループごとに育てるべき能力について考えていく。担当者はグループごとの議論に適宜加わり、議論の方向性をコーディネイトする。

第12回：各教科領域の特性について（3）～教科領域ごとの教材研究の在り方～

(担当：中野博之・上野秀人・瀧本壽史)

教科領域ごとに助言者（弘前大学教育学部の幼児教育学及び教科教育学の専門家）を招いて、グループごとに教材研究の在り方について考えていく。担当者はグループごとの議論に適宜加わり、議論の方向性をコーディネイトする。

第13回：各教科領域の特性について（4）～教科領域ごとの授業研究の在り方～

(担当：中野博之・上野秀人・瀧本壽史)

教科領域ごとに助言者（弘前大学教育学部の幼児教育学及び教科教育学の専門家）を招いて、グループごとに授業研究の在り方について考えていく。担当者はグループごとの議論に適宜加わり、議論の方向性をコーディネイトする。

第14回：各教科領域の特性について（5）～教科領域ごとに模擬授業を行う～

(担当：中野博之・上野秀人・瀧本壽史)

教科領域ごとに助言者（弘前大学教育学部の幼児教育学及び教科教育学の専門家）を招いて、グループごとに模擬授業を行う。どの教科においても、それぞれの教科の目標の捉え方、教材についての本質的な理解、21世紀型能力との関連での教材研究について考察が深まるようにする。担当者はグループごとの議論に適宜加わり、議論の方向性をコーディネイトする。

第15回：討論（教科領域の違いを越えた校内研修の在り方）

(担当：中野博之・上野秀人・瀧本壽史)

各院生が研修主任になったと仮定をして、教科領域の枠越えた校内研修の在り方について議論を行う。

テキスト

各授業の学習テーマに応じて提示する。

参考書・参考資料等

各授業の学習テーマに応じて提示する。

学生に対する評価

【評価の基準】

- ①教科教育という視点から各院生の担当教科についての本質を理解することができる。
- ②各教科領域に関する理論的理解をもとに、今日の授業をめぐる問題を考察することができる。

【評価の構成】

- ①最終レポート (60%)
- ②事前学習ワークシート (20%)
- ③授業時の協議等の参加状況など (20%)

授業科目区分	基礎科目	開設コース	全コース
授業科目名 (英文名)	【5】生徒指導の理論的視点と実践的視点 (student guidance: theories and practice)		
単位	2 単位	必修・選択区分	必修
授業方法	演習	開講年次・学期	1 年次・前期
担当教員	吉原寛, 古川郁生, 吉中淳	担当形態	共同
授業の到達目標	<p>【教育実践開発コースの到達目標】 生徒指導の理論を学ぶとともに、学校現場における実践例を通じて自らの課題を考察することができる。</p> <p>【ミドルリーダー養成コースの到達目標】 生徒指導の理論について再確認するとともに、実践の場を離れた視点で学校現場の課題を整理・再発見することができる。</p>		
授業の概要	<p>生徒指導を取り巻く諸問題について考えることを通じて、これからの中学校現場における生徒指導の在り方について考察する。</p> <p>テキストをもとにしながら、生徒指導について理論的に考察する視点を形成するとともに、それにもとづく生徒指導の今日的課題とその在り方について議論する。</p> <p>理論的視点と学校現場における実践的視点とがつながりあう展開を目指し、研究者教員と実務家教員とのチーム・ティーチングにより、学校の実情に合わせた理解深化を促すこととする。</p>		
授業計画	<p>第1回：オリエンテーション (担当：吉原寛・古川郁生・吉中淳) 講義全体の内容を通して、受講生の課題意識を深める。授業目標の共有と事例提供に関する倫理、及び特に学部卒院生に対する事例情報守秘の徹底等の基本的理解を図る。</p> <p>第2回：現職教員による事例提供とディスカッション（1）～今日の学校・教員が抱える問題～ (担当：吉原寛・古川郁生・吉中淳) 生徒指導に関する基本的理解を踏まえ、今日の学校・教員が抱える問題について考察する。</p> <p>第3回：現職教員による事例提供とディスカッション（2）～学校現場における生徒指導事例の実践①～ (担当：吉原寛・古川郁生・吉中淳) 学校現場における生徒指導事例提供に基づき、その実践について議論・評価を試みる。</p> <p>第4回：現職教員による事例提供とディスカッション（3）～学校現場における生徒指導事例の実践②～ (担当：吉原寛・古川郁生・吉中淳) 学校現場における生徒指導事例提供に基づき、その実践について議論・評価を試みる。</p> <p>第5回：現職教員による事例提供とディスカッション（4）～学校現場における生徒指導事例の実践③～ (担当：吉原寛・古川郁生・吉中淳) 学校現場における生徒指導事例提供に基づき、その実践について議論・評価を試みる。</p> <p>第6回：生徒指導の基本理念及び理論に関する講義（1）～生徒指導活動の沿革～ (担当：吉原寛・古川郁生・吉中淳)</p>		

第2回～第5回で提起された今日の学校における生徒指導の実情を踏まえた上で、あらためて生徒指導の基本理念と理論について生徒指導活動の沿革に基づいて論じる。理論を踏まえて事例を再検討する。

第7回：生徒指導の基本理念及び理論に関する講義（2）～生徒指導の定義と学校現場の実状～
(担当：吉原寛・古川郁生・吉中淳)

第2回～第5回で提起された今日の学校における生徒指導の実情を踏まえた上で、あらためて生徒指導の基本理念と理論について生徒指導の定義と学校現場の実情に基づいて論じる。理論を踏まえて事例を再検討する。

第8回：生徒指導の基本理念及び理論に関する講義（3）～学校現場における実践と評価～
(担当：吉原寛・古川郁生・吉中淳)

第2回～第5回で提起された今日の学校における生徒指導の実情を踏まえた上で、あらためて生徒指導の基本理念と理論について学校現場における実践と評価に基づいて論じる。理論を踏まえて事例を再検討する。

第9回：本講において学ぶべき内容の洗い出しと共有
(担当：吉原寛・古川郁生・吉中淳)

各コース院生の理解の到達点について整理するとともに、提起された事例と理論をめぐる講義を通じて、生徒指導活動を行うまでの現時点での課題の明確化を図る。

第10回：学部卒院生と現職院生による協同的調べ学習に基づく話題提供とディスカッション（1）～生徒指導と発達理論～
(担当：吉原寛・古川郁生・吉中淳)

第5回までに提起された事例と、第6回～第9回で展開された理論に基づく理解深化を基盤として、生徒指導事例について両コース院生がペアとなって事例の発掘・話題提供を行い、生徒指導事例と発達理論に基づいた議論を展開する。

第11回：学部卒院生と現職院生による協同的調べ学習に基づく話題提供とディスカッション（2）～生徒指導と人間関係の理論～
(担当：吉原寛・古川郁生・吉中淳)

第5回までに提起された事例と、第6回～第9回で展開された理論に基づく理解深化を基盤として、生徒指導事例について両コース院生がペアとなって事例の発掘・話題提供を行い、生徒指導事例と人間関係の理論に基づいた議論を展開する。

第12回：学部卒院生と現職院生による協同的調べ学習に基づく話題提供とディスカッション（3）～生徒指導と予防的かかわり～
(担当：吉原寛・古川郁生・吉中淳)

第5回までに提起された事例と、第6回～第9回で展開された理論に基づく理解深化を基盤として、生徒指導事例について両コース院生がペアとなって事例の発掘・話題提供を行い、生徒指導事例と予防的かかわりの理論に基づいた議論を展開する。

第13回：学部卒院生と現職院生による協同的調べ学習に基づく話題提供とディスカッション（4）～生徒指導と法制度～
(担当：吉原寛・古川郁生・吉中淳)

第5回までに提起された事例と、第6回～第9回で展開された理論に基づく理解深化を基盤として、生徒指導事例について両コース院生がペアとなって事例の発掘・話題提供を行い、生徒指導事例と法制度に基づいた議論を展開する。

第14回：学部卒院生と現職院生による協同的調べ学習に基づく話題提供とディスカッション（5）～生徒指導における危機管理～
(担当：吉原寛・古川郁生・吉中淳)

第5回までに提起された事例と、第6回～第9回で展開された理論に基づく理解深化を基盤とし

て、生徒指導事例について両コース院生がペアとなって事例の発掘・話題提供を行い、生徒指導事例と危機管理をめぐる議論を展開する。

第15回：生徒指導の今日的課題と展望

(担当：吉原寛・古川郁生・吉中淳)

生徒指導活動において教員が直面している今日的課題を総括し、今後の生徒指導の在り方、自身の関与の在り方について考察する。

テキスト

各授業の学習テーマに応じて提示する。

参考書・参考資料等

各授業の学習テーマに応じて提示する。

学生に対する評価

【評価の基準】

- ①生徒指導に果たす教員の役割について理解することができる。
- ②生徒指導に関する理論的理解をもとに、今日の生徒指導をめぐる問題を考察することができる。
- ③生徒指導をめぐる今日的課題に対して今後の自らの教員としての在り方を展望することができる。

【評価の構成】

- ①最終レポート (60%)
- ②事前学習ワークシート (20%)
- ③討論への参加状況など (20%)

授業科目区分	基礎科目	開設コース	全コース
授業科目名 (英文名)	【6】教育相談の理論と方法 (educational counseling: theories and practice)		
単位	2 単位	必修・選択区分	必修
授業方法	演習	開講年次・学期	1 年次・前期
担当教員	吉原寛, 敦川真樹	担当形態	共同
授業の到達目標			
【教育実践開発コースの到達目標】 教育相談の理論を学ぶとともに、学校現場における実践例を通じて自らの課題を考察することができる。			
【ミドルリーダー養成コースの到達目標】 教育相談の理論について再確認するとともに、実践の場を離れた視点で学校現場の課題を整理・再発見することができる。			
授業の概要			
教育相談を取り巻く諸問題について考えることを通じて、これからの中学校現場における教育相談の在り方について考察する。 テキストをもとにしながら、教育相談について理論的に考察する視点を形成するとともに、それにもとづく教育相談の今日的課題とその在り方について議論する。 理論的視点と学校現場における実践的視点とがつながりあう展開を目指し、研究者教員と実務家教員とのチーム・ティーチングにより、学校の実情に合わせた理解深化を促すこととする。 なお、内容に応じて校種別あるいは学部新卒学生、現職教員学生別に演習等を行うこととする。			
授業計画			
第1回：オリエンテーション (担当：吉原寛・敦川真樹) 講義全体の内容を通して、受講生の課題意識を深める。授業目標の共有と事例提供に関する倫理、及び特に学部卒院生に対する事例情報守秘の徹底等の基本的理解を図る。			
第2回：現職教員による事例提供とディスカッション（1）～今日の学校・教員が抱える問題について～ (担当：吉原寛・敦川真樹) 教育相談に関する基本的理解を踏まえ、今日学校・教員が抱える問題について考察する。			
第3回：現職教員による事例提供とディスカッション（2）～相談の枠組を中心とした議論・評価～ (担当：吉原寛・敦川真樹) 相談の枠組を中心とした議論・評価について、学校現場における教育相談事例提供に基づき、その実践について議論・評価を試みる。			
第4回：現職教員による事例提供とディスカッション（3）～児童生徒理解の枠組を中心とした議論・評価～ (担当：吉原寛・敦川真樹) 児童生徒理解の枠組を中心とした議論・評価について、学校現場における教育相談事例提供に基づき、その実践について議論・評価を試みる。			
第5回：現職教員による事例提供とディスカッション（4）～人的リソース・人間関係の査定を中心とした議論・評価～ (担当：吉原寛・敦川真樹)			

人的リソース・人間関係の査定を中心とした議論・評価について、学校現場における教育相談事例提供に基づき、その実践について議論・評価を試みる。

第6回：教育相談の基本理念及び理論に関する講義（1）～生徒指導における教育相談の位置付け～

(担当：吉原寛・敦川真樹)

第2回～第5回で提起された今日の学校における教育相談の実状を踏まえた上で、あらためて教育相談の基本理念と理論について生徒指導における教育相談の位置付けに基づいて論じる。理論を踏まえて事例を再検討する。

第7回：教育相談の基本理念及び理論に関する講義（2）～教育相談体制と研修の在り方～

(担当：吉原寛・敦川真樹)

第2回～第5回で提起された今日の学校における教育相談の実状を踏まえた上で、あらためて教育相談の基本理念と理論について教育相談体制と研修の在り方にに基づいて論じる。理論を踏まえて事例を再検討する。

第8回：本講において学ぶべき内容の洗い出しと共有

(担当：吉原寛・敦川真樹)

各コース院生の理解の到達点について整理するとともに、提起された事例と理論をめぐる講義を通じて、教育相談活動を行うまでの現時点での課題の明確化を図る。

第9回：学部卒院生と現職院生による協同的調べ学習に基づく話題提供とディスカッション（1）～学校風土と教育相談～

(担当：吉原寛・敦川真樹)

第5回までに提起された事例と、第6回～第8回で展開された理論に基づく理解深化を基盤として、教育相談事例について両コース院生がペアとなって発掘・話題提供を行い、学校風土と教育相談に基づいた議論を展開する。なお、ペアの組み方は同校種を基本とする。

第10回：学部卒院生と現職院生による協同的調べ学習に基づく話題提供とディスカッション（2）～かかわりの相互性に注目した事例検討～

(担当：吉原寛・敦川真樹)

第5回までに提起された事例と、第6回～第8回で展開された理論にもとづく理解深化を基盤として、教育相談事例について両コース院生がペアとなって発掘・話題提供を行い、かかわりの相互性に注目した事例検討に基づいた議論を展開する。なお、ペアの組み方は同校種を基本とする。

第11回：学部卒院生と現職院生による協同的調べ学習に基づく話題提供とディスカッション（3）～保護者を支える教育相談～

(担当：吉原寛・敦川真樹)

第5回までに提起された事例と、第6回～第9回で展開された理論にもとづく理解深化を基盤として、教育相談事例について両コース院生がペアとなって発掘・話題提供を行い、保護者を支える教育相談に基づいた議論を展開する。なお、ペアの組み方は同校種を基本とする。

第12回：実践的教育相談技法の試演（1）～課題を活用した自己理解の促進～

(担当：吉原寛・敦川真樹)

学校現場における教育相談実践に資する相談技法について、課題を活用した自己理解の促進に基づいた試演を通じてその効果的活用の方策を検討する。必要に応じて、学部新卒学生別または現職教員学生別に実施する。

第13回：実践的教育相談技法の試演（2）～積極的傾聴の実践～

(担当：吉原寛・敦川真樹)

学校現場における教育相談実践に資する相談技法について、積極的傾聴の実践に基づいた試演を通じてその効果的活用の方策を検討する。必要に応じて、学部新卒学生別または現職教員学生

別に実施する。

第14回：実践的教育相談技法の試演（3）～効果的なグループ活動のファシリテーション～
(担当：吉原寛・敦川真樹)

学校現場における教育相談実践に資する相談技法について、効果的なグループ活動のファシリテーションに基づいた試演を通じてその効果的活用の方策を検討する。

第15回：教育相談の今日的課題と展望

(担当：吉原寛・敦川真樹)

教育相談活動において教員が直面している今日的課題を総括し、今後の教育相談の在り方、自身の関与の在り方について考察する。

テキスト

各授業の学習テーマに応じて提示する。

参考書・参考資料等

各授業の学習テーマに応じて提示する。

学生に対する評価

【評価の基準】

- ①教育相談における教員の役割について理解することができる。
- ②教育相談に関する理論的理解をもとに、今日の教育相談をめぐる問題を考察することができる。
- ③教育相談をめぐる今日的課題に対して今後の自らの教員としての在り方を展望することができる。

【評価の構成】

- ①最終レポート（60%）
- ②事前学習ワークシート（20%）
- ③討論への参加状況など（20%）

授業科目区分	基礎科目	開設コース	全コース
授業科目名 (英文名)	【7】学校安全と危機管理 (School Safety and Risk Management)		
単位	2 単位	必修・選択区分	必修
授業方法	演習	開講年次・学期	1 年次・前期
担当教員	小林央美、三戸延聖	担当形態	共同
授業の到達目標			
【教育実践開発コースの到達目標】 学校における安全教育や学校安全・危機管理の基本的事項と学校事故防止・危機管理の原理原則を理解するとともに、その実践の在り方や課題について、今後の教職活動を見据えて考察することができる。			
【ミドルリーダー養成コースの到達目標】 学校における安全教育や学校安全・危機管理の基本的事項と学校事故防止・危機管理の原理原則を理解するとともに、その実践の在り方や課題について、自らの教職経験を踏まえて考察することができる。			
授業の概要			
学校安全と危機管理について、学校安全の成立について物理的・人的環境整備等の基本的視点や危機管理についてのリスクマネージメント・クライシスマネージメントの基本的事項を理解する。その上で、学校事故の対応事例や判例、災害時の対応事例をもとに、学校安全の在り方や危機管理について、チーム学校としての教職員の役割や協働的機能について討議や事例検討を通して考察する。			
授業計画			
第1回：オリエンテーション (担当：小林央美・三戸延聖) 「学校安全と危機管理」に関する基本的理解を図るとともに、講義全体の内容を通観し、受講生の課題意識を深める。また授業の進め方についての共通理解を図る。			
第2回：学校における安全教育の理論と歴史的変遷 (担当：小林央美・三戸延聖) 学校における安全教育の意義、目標、構造などの理論と歴史的変遷の背景について基本的理解を図り、それらを通して安全教育と危機管理の今日的意義について考察する。			
第3回：学校事故・災害の発生とその防止の考え方 (担当：小林央美・三戸延聖) 学校事故の発生機序・児童生徒の発育発達の特性から見た事故防止等についての基本的理解をもとに、実際の学校事故事例の防止の在り方について考察する。			
第4回：学校事故の現状分析から見る学校安全・危機管理の課題 (担当：小林央美・三戸延聖) 日本スポーツ振興センターによる学校事故の現状や犯罪被害の現状の理解とその分析を通して、学校安全と危機管理の課題と在り方について考察する。			
第5回：学校教員の役割からみた学校安全と危機管理 (担当：小林央美・三戸延聖) 学校安全計画の立案・安全点検と教職員の役割についての現状を理解し、その課題と在り方について考察する。			

第6回：学校安全・危機管理の実際と安全教育（1）～自己報告書や研究分析をもとに～
(担当：小林央美・三戸延聖)

大阪教育大学附属池田小の事故報告書や研究分析をもとに、不審者対応を取り上げながら、学校事故防止とその方策と課題について考察する。

第7回：学校安全・危機管理の実際と安全教育（2）～死亡事故報告書の分析をもとに～
(担当：小林央美・三戸延聖)

調布市の小学校の食物アレルギーによるアナフィラキシーによる死亡事故報告書の分析をもとに、食物アレルギー事故や突然死を取り上げながら、学校事故防止とその方策と課題について考察する。

第8回：学校安全・危機管理の実際と安全教育（3）～判例や事故報告書をもとに～
(担当：小林央美・三戸延聖)

学校事故における様々な判例や事故報告書をもとに、学校事故防止とその方策と課題について、保護者との関わりや連携を含めて考察する。

第9回：災害発生時の対応とクライスマネージメント（1）～児童生徒の心のケアの在り方～
(担当：小林央美・三戸延聖)

災発生時や学校内での死亡事故事例における対応の事例を取り上げながら、災害発生時の対応や緊急時の児童生徒の心のケアの在り方について考察する。

第10回：災害発生時の対応とクライスマネージメント（2）～マスコミ対応の在り方～
(担当：小林央美・三戸延聖)

東日本大震災発生時の対応の事例を取り上げながら、災害発生時や緊急支援について、校内連携・外部機関やCRT、地域との連携、マスコミ対応を踏まえた在り方や課題について考察する。

第11回：災害発生時の対応とクライスマネージメント（3）～特別な支援を必要とする児童生徒の対応～
(担当：小林央美・三戸延聖)

学校における事故発生時や災害発生時対応について、特別支援学校や通常学級における特別な支援を必要とする児童生徒の対応とその課題について、実例を交えながら考察する。

第12回：災害発生時の対応とクライスマネージメント（4）～二次的被害防止の現状と課題～
(担当：小林央美・三戸延聖)

学校における事故発生時や災害発生時対応について、支援者である教職員の惨事ストレス対策や心的疲弊による二次被害防止の現状と課題について、実例を交えながら考察する。

第13回：学校における安全指導計画と安全教育（1）～安全教育や安全指導計画に必要な内容について～
(担当：小林央美・三戸延聖)

第12回までの学習を踏まえ、学校における安全教育や安全指導計画に必要な内容とその実践について、根拠を明確にしながら討議し考察する。

第14回：学校における安全指導計画と安全教育（2）～校種別・地域別・学校規模別の視点で～
(担当：小林央美・三戸延聖)

第13回授業での討議した安全計画と安全教育について、校種別・地域別・学校規模別の視点で評価し、考察する。

第15回：学校安全と危機管理をめぐる課題と展望
(担当：小林央美・三戸延聖)

授業全体を通じて、学校安全と危機管理についての今日的課題を、理論と実践との往還の視点から考察し、今後の学校現場での実践の在り方について展望する。

テキスト

- ・教育養成系大学保健協議会（2014）『学校保健ハンドブック 第6次改訂』ぎょうせい
- ・児玉悦子、鈴木世津子（2006）『学校事故から子どもを守る～判例に学ぶ教師の実践マニュアル』農山漁村文化協会

参考書・参考資料等

- ・日本スポーツ振興センター（2016）『学校管理下の災害（平成26年度）』
- ・文部科学省（2009）『生きる力をはぐくむ学校での安全教育』
- ・日本スポーツ振興センター（2012）『学校における固定遊具による事故防止対策』
- ・横矢真理（2004）『身近な危険から子どもを守る本』大和書房
- ・その他各授業の学習テーマに応じて提示する。

学生に対する評価

【評価の基準】

- ①学校安全と危機管理について、理論や実践の原理・実態や実践の分析をもとにした基本的事項を理解することができる。
- ②学校安全と危機管理について、予防・対策・安全教育・クライシスマネージメントの視点から考察することができる。
- ③今後の学校における学校安全と危機管理に関する実践について、展望することができる。

【評価の構成】

- ①最終レポート（60%）
- ②事前学習ワークシート（20%）
- ③討論への参加状況など（20%）

授業科目区分	基礎科目	開設コース	全コース
授業科目名 (英文名)	【8】教育経営の課題と実践 (Issues and practice of education management)		
単位	2 単位	必修・選択区分	必修
授業方法	演習	開講年次・学期	1 年次・前期
担当教員	三浦智子、小寺弘幸、 古川郁生	担当形態	共同
授業の到達目標			
【教育実践開発コースの到達目標】 教育改革の動向を踏まえ、学校の組織管理の実務の基本を理解するとともに、学校経営に参画する意識、知見を高める。また、学級経営の基礎的事項について発展的かつ関連的に学校経営を捉えることができる。			
【ミドルリーダー養成コースの到達目標】 学校の組織管理についての実際を理解するとともに、教職員の協働性を活かしながら、課題解決に向けた具体的方策について学ぶ。 授業では、特に課題別に少人数のグループを構成し、「班討議→発表→質疑→まとめ」を行い、議論を深めながら共通理解を図り、実践的視点の獲得をめざす。			
授業の概要			
教育の今日的課題や教育政策と学校経営との関連性を見い出し、学校経営への問題意識を明確にしていく。そして、変化する学校形態を踏まえつつ、学校運営を効率的かつ円滑に行うための協働体制づくり等、学校経営の在り方を現場における実務演習を通して事例的に学修する。さらに、ケーススタディー、ワークショップ、意見発表、討論等の双方向の学び合いを重視した授業方法を通して、学校における質の高い組織管理のための具体的方策を探る。その上で、個々の学校課題解決力の深化を図ろうとするものである。			
授業計画			
第1回：オリエンテーション (担当：三浦智子・小寺弘幸・古川郁生) 学級・学年・学校に関する講義全体の内容を通観し、受講生の課題意識を深める。また、授業の進め方についての共通理解を図る。			
第2回：学級経営・学校経営の基礎理論 (担当：三浦智子・小寺弘幸・古川郁生) 学校における組織管理や学校制度、学級経営と教師論について考察する。			
第3回：学校経営に関わる今日的課題（国・地方・県の課題） (担当：三浦智子・小寺弘幸・古川郁生) 学力格差、健康教育の充実、キャリア教育の充実、いじめと体罰、グローバル化について考察する。			
第4回：学校経営と教職員の協働性 (担当：三浦智子・小寺弘幸・古川郁生) 職場の雰囲気づくりと教職員の協働（学年経営との連動、図書司書・事務職員等との連携）について考察する。			
第5回：学校運営ケーススタディー (担当：三浦智子・小寺弘幸・古川郁生) 学校経営案、教育計画、校務分掌組織、職員会議、PTA 総会及び活動、保護者会及び面談、学校			

発信（広報・通信、学校掲示）について考察する。

第6回：学校における校務分掌と委員会役割

(担当：三浦智子・小寺弘幸・古川郁生)

学校における校務分掌・委員会の在り方とその課題及びその改善の方向性について考察する。

第7回：地域との連携

(担当：三浦智子・小寺弘幸・古川郁生)

地域人材の活用（授業・部活動における活用の意義と留意点）や地域施設、学習材の活用などについて考察する。

第8回：議会視察（1）（教育政策・視察レポート）～議会で議論されている事案の考察～

(担当：三浦智子・小寺弘幸・古川郁生)

議会を視察する中で、教育再生、教育振興基本計画、教育委員会制度改革について考察する。

第9回：議会視察（2）（教育政策・視察レポート）～学校経営上の問題の考察～

(担当：三浦智子・小寺弘幸・古川郁生)

議会を視察する中で、地域課題に関連した学校経営上の問題について考察する。

第10回：教育行政、意見、発表

(担当：三浦智子・小寺弘幸・古川郁生)

視察レポートをもとに意見交換する。

第11回：学校経営方針を具現化する学年経営及び学級経営

(担当：三浦智子・小寺弘幸・古川郁生)

学力向上、体力向上、健康教育、人権教育、国際理解教育について考察する。

第12回：ケーススタディー（同僚性の発揮・職場の人間関係、討議、発表）

(担当：三浦智子・小寺弘幸・古川郁生)

同僚性の発揮や職場の人間関係についての具体的な事例について分析し、その背後にある原理や法則性などを考察する。

第13回：変化する学校形態とその経営方法

(担当：三浦智子・小寺弘幸・古川郁生)

変化する学校形態として、一貫校、学校統廃合、学校選択、コミュニティースクール、国際バカロア、在外教育施設、帰国子女・外国人受け入れ校、官民一体型学校について考察する。

第14回：学校評価と学校改善

(担当：三浦智子・小寺弘幸・古川郁生)

学校評価の内容と方法（アンケート等）や学校評価の分析、学校評価の活用についてについて考察する。

第15回：魅力ある学校づくりと学校経営の展望

(担当：三浦智子・小寺弘幸・古川郁生)

地域と共に生きる学校、特色ある学校づくり、理想の学校の経営方法について展望する。

テキスト

各授業の学習テーマに応じて提示する。

参考書・参考資料等

各授業の学習テーマに応じて提示する。

学生に対する評価

【評価の基準】

①教育改革の動向を踏まえ、学校の組織管理の実務の基本を理解することができる。

- ②学級・学年・学校経営上の課題解決に向けた具体的方策について考察することができる。
- ③地域と共に生きる学校、特色ある学校づくり等、魅力ある学校の経営方法について展望することができる。

【評価の構成】

- ①最終レポート (60%)
- ②事前学習ワークシート (20%)
- ③討論への参加状況など (20%)

授業科目区分	基礎科目	開設コース	全コース
授業科目名 (英文名)	【9】教育における社会的包摂 (Social Inclusion in Education)		
単位	2 単位	必修・選択区分	必修
授業方法	演習	開講年次・学期	1 年次・前期
担当教員	福島裕敏, 吉田美穂, 敦川真樹	担当形態	共同
授業の到達目標			
【教育実践開発コースの到達目標】 通常学級における特別支援教育をめぐる理論と実践について、今後の教職経験を見据えて理解し、今後の実践の在り方について考えることができる。さらに〈教育一福祉〉を視点として、現代の子ども・若者の現状とかれらに対する学校内外での支援の在り方について、今後の教職経験を見据えて理解し、今後の子ども・若者支援における学校教育・教員の役割について考えることができる。			
【ミドルリーダー養成コースの到達目標】 通常学級における特別支援教育をめぐる理論と実践について、自らの教職経験を踏まえながら理解し、今後の実践の在り方について考えることができる。さらに〈教育一福祉〉を視点として、現代の子ども・若者の現状とかれらに対する学校内外での支援の在り方について、自ら教職経験を踏まえながら理解し、今後の子ども・若者支援における学校教育・教員の役割と学校外機関との連携の在り方について考えることができる。			
授業の概要			
通常学級における特別支援教育に関する理論と実践について、実践や事例をもとにしながら学ぶ。テキストにもとづく理論に関する基本的理解を図るとともに、具体的実践の紹介や事例分析を行っていく。実務家教員を主として講義・演習を進めるが、適宜、研究者教員が理論的意味づけなどをを行うこととする。 また、貧困や虐待など様々なリスクのもとにある子ども・若者の現状とかれらに対する支援の在り方について、〈教育一福祉〉を視点として学ぶ。さらに、社会的包摂についての基本的理論的理解とともに、子ども・若者の現状と支援の在り方についての講話・議論にもとづき進めていく。 研究者教員及び実務家教員による講義・演習を基本とし、適宜、特別支援教育・福祉・司法・労働などの分野のゲストスピーカーを招聘し、話題提供とそれにもとづくディスカッションを行う。			
授業計画			
第1回：オリエンテーション (担当：福島裕敏・吉田美穂・敦川真樹) 「教育における社会的包摂」に関する基本的理解を図るとともに、講義全体の内容を通観し、受講生の課題意識を深める。また授業の進め方についての共通理解を図る。			
第2回：特別支援教育における包摂の理念とその動向 (担当：吉田美穂・敦川真樹) 特別支援教育における包摂（インクルーシブ教育）の理念とその国際・国内的動向についての基本的理解を図り、現在の教育・学校状況を踏まえて、その課題を考察する。			
第3回：特別な教育的ニーズの理解と支援 (担当：吉田美穂・敦川真樹) 特別な教育的ニーズをもつ子どもの理解と支援の在り方について、「合理的配慮」を中心としたながら、法的・実践的側面についての基本的理解を図り、その課題を考察する。			
第4回：学習指導をめぐる諸課題 (担当：吉田美穂・敦川真樹)			

通常学級における特別支援教育における学習指導の在り方について、とりわけ授業のユニバーサルデザインを中心に基本的理解を図り、今後の学習指導の在り方を考察する。

第5回：生徒指導をめぐる諸課題

(担当：吉田美穂・敦川真樹)

通常学級における特別支援教育における生徒指導の在り方について、人的・物的環境整備を中心しながら基本的理解を図り、今後の生徒指導の在り方を考察する。

第6回：連携・協働をめぐる諸課題

(担当：吉田美穂・敦川真樹)

通常学級における特別支援教育をめぐる保護者・教員相互・外部機関との連携・協働の在り方について基本的理解を図り、今後の連携・協働の在り方について考察する。

第7回：通常学級における特別支援教育の実際（1）～今後の教室における実践の在り方～

(担当：敦川真樹)

学校関係者をゲストスピーカーに招き、通常学級における特別支援教育の実際について、学習指導・生徒指導等教室における取り組みについて具体的に学び、今後の教室における実践の在り方を考察する。

第8回：通常学級における特別支援教育の実際（2）～今後の学級経営の在り方～

(担当：敦川真樹)

学校関係者をゲストスピーカーに招き、通常学級における特別支援教育の実際について、外部との連携・協働を含む校内体制整備の取り組みについて具体的に学び、今後の学校経営の在り方を考察する。

第9回：「社会的包摂」の理念とその実現に向けた教育内外における動向

(担当：福島裕敏・吉田美穂・敦川真樹)

「社会的包摂」の理念とその実現に向けた教育内外における国際・国内的動向についての基本的理解を図り、現在の教育・学校状況を踏まえて、その課題を考察する。

第10回：「社会的包摂」をめぐる子ども・若者の現状と教育における課題

(担当：福島裕敏・吉田美穂・敦川真樹)

「社会的包摂」という視点から日本の子ども・若者の現状と、その実現に向けた教育・学校の取り組みについての基本的理解を図り、教育・学校の課題について考察する。

第11回：スクールソーシャルワーク

(担当：吉田美穂・敦川真樹)

スクールソーシャルワークについての基本的理解を図り、実践例をもとにしながら、学校・教員の在り方を考える。

第12回：学外機関との連携・協働

(担当：吉田美穂・敦川真樹)

教育における「社会的包摂」に向けた学外機関の在り方についての基本的理解を踏まえて、学校・教員の在り方を考える。

第13回：社会的包摂に向けた取り組みの実際

(担当：吉田美穂・敦川真樹)

福祉関係者をゲストスピーカーに招き、学校外における「社会的包摂」に向けた教育外（福祉分野）の取り組みについて理解し、学校・教員の在り方を考える。

第14回：社会的包摂の実際

(担当：吉田美穂・敦川真樹)

司法等関係者をゲストスピーカーに招き、学校外における「社会的包摂」に向けた教育外（司

法・労働・NPO 分野) の取り組みについて理解し、学校・教員の在り方を考える。

第15回：社会的包摶に向けた教育の課題と展望

(担当：福島裕敏・吉田美穂・敦川真樹)

授業全体を通じて、教育における社会的包摶をめぐる今日的課題を、理論と実践との往還の視点から考察し、今後の学校現場での教育実践の在り方について展望する。

テキスト

- ・荒川智、越野和之 (2013)『インクルーシブ教育の本質を探る』全国障害者問題研究会
- ・山下英三郎、内田宏明、牧野晶哲 (2012)『新スクールソーシャルワーク論』学苑社

参考書・参考資料等

- ・国立特別支援教育総合研究所 (2015)『特別支援教育の基礎・基本 新訂版』ジアース教育新社
- ・国立特別支援教育総合研究所 (2014)『ともに学び合うインクルーシブ教育システム構築に向けた児童生徒への配慮・指導事例』ジアース教育新社
- ・山野則子 (2015)『エビデンスに基づく効果的なスクールソーシャルワーク』明石書店
- ・伊藤良高 (2014)『教育と福祉の課題』晃洋書房
- ・その他各授業の学習テーマに応じて提示する。

学生に対する評価

【評価の基準】

- ①「教育の社会的包摶」の基本的性格について、理論的に理解することができる。
- ②「教育の社会的包摶」という視点から、今日の学校・教育をめぐる問題を考察することができる。
- ③「教育の社会的包摶」の実現に向けた自らの教員としての在り方を展望することができる。

【評価の構成】

- ①最終レポート (60%)
- ②事前学習ワークシート (20%)
- ③討論への参加状況など (20%)

授業科目区分	基礎科目	開設コース	全コース
授業科目名 (英文名)	【10】現代の学校と教員をめぐる動向と課題 (Trends and Issues around Contemporary Schools and Teachers)		
単位	2 単位	必修・選択区分	必修
授業方法	演習	開講年次・学期	1 年次・前期
担当教員	福島裕敏, 吉田美穂, 三戸延聖	担当形態	共同
授業の到達目標	<p>【教育実践開発コースの到達目標】 学校教育と教員の在り方について、将来の教職経験を見据えて、教育の社会性という視点からその課題と意義について考えることができる。</p> <p>【ミドルリーダー養成コースの到達目標】 学校教育と教員の在り方について、自らの教職経験を踏まえながら、教育の社会性という視点からその課題と意義について考えることができる。</p>		
授業の概要	<p>教育を取り巻く諸問題を教育の社会性（社会としての教育、教育から社会へ、社会から教育へ）という視点から考えることを通じて、これからの中学校教育と教員の在り方について考察する。</p> <p>テキストをもとにしながら、教育問題を理論的に考察する視点を形成するとともに、それにもとづく中学校教育と教育の今日的課題とその在り方について議論する。</p> <p>研究者教員が主となり演習を進めることとし、適宜、実務家教員が中学校教育と教員の実情に合わせた理解深化を促すこととする。</p>		
授業計画	<p>第1回：オリエンテーション (担当：福島裕敏・吉田美穂・三戸延聖) 「教育の社会性」という視点の基本的理解を図るとともに、講義全体の内容を通観するとともに、受講生の課題意識を深める。また、授業の進め方について共通理解を図る。</p> <p>第2回：〈教育〉と近代学校 (担当：福島裕敏・吉田美穂・三戸延聖) 近代社会における〈教育〉とその社会的制度である近代学校制度についての理解を踏まえ、今日の教育・学校・教員が抱える問題について考察する。</p> <p>第3回：学校という制度と文化 (担当：福島裕敏・吉田美穂・三戸延聖) 近代学校制度がもつ独自の文化（ヒト・モノ・コト、時間・空間・教授・生活・道徳に関する秩序など）についての理解を踏まえ、その今日的課題について考察する。</p> <p>第4回：学校知識 (担当：福島裕敏・吉田美穂・三戸延聖) 学校知識についての社会学的理解を踏まえ、その今日的課題をレリバンス（意義）、目標－評価などの視点から考察する。</p> <p>第5回：教師－生徒関係 (担当：福島裕敏・吉田美穂・三戸延聖) 近代学校における教師－生徒関係が有する潜在的困難性とその乗り越えについて、今日の学校状況を踏まえて考察する。</p>		

第6回：学校教員

(担当：福島裕敏・吉田美穂・三戸延聖)

学校教員が抱える根源的なアポリア（難問），その乗り越えとしての教員文化についての理解を踏まえて，今日の教員が抱える専門性・専門職性をめぐる問題について考察する。

第7回：生徒文化

(担当：福島裕敏・吉田美穂・三戸延聖)

学校内部における児童・生徒間関係について，学校文化・学校外文化との関連から理解し，その今日的課題について考察する。

第8回：学校から労働への移行

(担当：福島裕敏・吉田美穂・三戸延聖)

近代学校における学校から労働への移行をめぐる難問，「日本型循環社会」の成立とその崩壊という歴史的変遷を踏まえて，その今日的課題について考察する。

第9回：子育てエージェントとしての近代家族

(担当：福島裕敏・吉田美穂・三戸延聖)

近代家族の成立と変遷についての理解を踏まえ，＜家族－学校＞関係の今日的課題について考察する。

第10回：学校の階級・階層性

(担当：福島裕敏・吉田美穂・三戸延聖)

学校がもつ階級・階層性とそれにもとづく格差・不平等の性格と今日的様態について理解し，その是正に向けた今日的課題について考察する。

第11回：ジェンダーと教育・学校

(担当：福島裕敏・吉田美穂・三戸延聖)

ジェンダーをめぐる教育・学校が抱える問題について理論的に理解し，その今日的課題について考察する。

第12回：マイノリティと教育・学校

(担当：福島裕敏・吉田美穂・三戸延聖)

社会的マイノリティをめぐる教育・学校が抱える問題について理論的に理解し，その今日的課題について考察する。

第13回：国家と教育・学校

(担当：福島裕敏・吉田美穂・三戸延聖)

国家と教育・学校との関わりについて理論的に理解し，その今日的課題について考察する。

第14回：教育改革と教員・学校

(担当：福島裕敏・吉田美穂・三戸延聖)

近年の教育改革における教員・学校の位置と役割について考察し，その今日的課題について考察する。

第15回：学校・教員の今日的課題と展望

(担当：福島裕敏・吉田美穂・三戸延聖)

学校・教員が直面している今日的課題を総括し，今後の教員・学校の在り方，自身の関与の在り方について考察する。

テキスト

・久富善之・長谷川裕編（2008）『教育社会学』学文社

参考書・参考資料等

・若槻健・西田芳正（2010）『教育社会学への招待』大阪大学出版会

- ・酒井朗, 多賀太, 中村高康 (2012) 『よくわかる教育社会学』ミネルヴァ書房
- ・近藤弘之, 岩井八郎 (2015) 『教育の社会学』放送大学教育振興会
- ・ローダー, ヒュー 他 (2012) 『グローバル化・社会変動と教育 〈1〉〈2〉』東京大学出合
- ・その他各授業の学習テーマに応じて提示する。

学生に対する評価

【評価の基準】

- ①教育の社会性という視点から, 学校・教員の基本的性格について理解することができる。
- ②学校・教員に関する理論的理解をもとに, 今日の学校・教育をめぐる問題を考察することができる。
- ③学校・教員をめぐる今日的課題に対して, 今後の自らの教員としての在り方を展望することができる。

【評価の構成】

- ①最終レポート (60%)
- ②事前学習ワークシート (20%)
- ③討論への参加状況など (20%)

授業科目区分	独自テーマ科目	開設コース	全コース
授業科目名 (英文名)	【11】あおもりの教育 I (環境) (Educational issues in Aomori I (for environment))		
単位	2 単位	必修・選択区分	必修
授業方法	演習	開講年次・学期	1 年次・前期
担当教員	瀧本壽史, 石川幸雄, 李永俊, 小岩直人, 東信行, 井岡聖一郎, 久保田健 篠塚明彦, 中村剛之, 佐々木実	担当形態	共同
授業の到達目標 【教育実践開発コースの到達目標】 青森県及び北東北の環境に関連した各分野の最新研究成果を学び、授業開発や学校教育の様々な場面で活かすことのできる基礎的な素養を身につける。			
【ミドルリーダー養成コースの到達目標】 青森県及び北東北の環境に関連した各分野の最新研究成果を学び、教材開発や学校教育の様々な場面で活かすことができる基礎的な素養を身につける。			
授業の概要 次世代の青森県を支える人材を育成するという観点から、教員自身が青森県の抱える環境面での地域課題について様々な側面から考察し、学校教育の場面で活かす方向性について検討する。 青森県は様々な自然環境を持ち、これらと共に生し、また活用することで文化・産業が支えられてきたことに着目し、今後の青森県の環境を活かした地域産業活性化の方向性を探ろうとしていることを理解する。各回の授業は、各分野からの専門的知見を学んだ上で、学校現場での教科指導・総合的な学習の時間・特別活動等の多様な場面を想定し、次世代の青森県を担う人材の育成のために各テーマをどのように深めるか受講者の討議を中心に進める。 具体的には、青森県の自然環境や農林水産業、そして自然エネルギー資源に関する研究を行っている人文社会科学部、理工学研究科、農学生命科学部、北日本新エネルギー研究所及び白神自然環境研究所の教員を兼任教員として配置し、「環境教育」というテーマのもとに地域研究のトップランナーと専任教員、大学院生とでチームを結成（オール弘前大学体制）し、新たな視点から地域に根ざした環境教育の教育方法や教材開発に取り組む。			
授業計画 第1回：オリエンテーション (担当：全担当教員) 青森県が豊かな自然環境を地域資源として活用しようとしていること及びそのための人材育成を行っていることを踏まえて、本授業の概要を理解し、授業の進め方の共通理解をはかる。			
第2回：青森の自然環境（1）～地学的アプローチ～ (担当：瀧本壽史・篠塚明彦・佐々木実) 人々の生活の舞台となっている地形について、主に火山活動などに着目しながら考察し、自然環境が資源ともなれば、災害に結びつくものであることを認識し、理解を深める。			
第3回：青森の自然環境（2）～自然地理学的アプローチ～ (担当：瀧本壽史・小岩直人・篠塚明彦) 岩木川などが形成した津軽平野を題材に地形と人々の生活の関わりについて考察し、自然環境が資源ともなれば、災害に結びつくものであることを認識し、理解を深める。			
第4回：白神山地の自然（1）～白神の植物たち～			

(担当：瀧本壽史・石川幸雄・篠塚明彦)

世界自然遺産白神山地に関して、様々な植物の植生という側面からその豊かな自然の持つ力についての認識と理解を深める。

第5回：白神山地の自然（2）～白神の動物たち～

(担当：瀧本壽史・篠塚明彦・中村剛之)

世界自然遺産白神山地に関して、様々な動物の活動という側面からその豊かな自然の持つ力についての認識と理解を深める。

第6回：青森の環境を活かした産業（1）～農業～

(担当：瀧本壽史・東信行・篠塚明彦)

青森の豊かな自然環境によって支えられてきた農業の在り方を理解し、これからの環境と調和した農業について検討を行う。

第7回：青森の環境を活かした産業（2）～水産業～

(担当：瀧本壽史・東信行・篠塚明彦)

日本海・太平洋・津軽海峡・むつ湾と性質の異なる海で営まれる漁業、さらには日本トップクラスの汽水漁業を生み出す青森の豊かな自然環境によって支えられてきた水産業を理解し、これからの水産業を取り巻く状況について検討を行う。

第8回：環境を守る取り組み（1：生態系保全の考え方）

(担当：瀧本壽史・東信行・篠塚明彦)

青森の自然を保全することの意味と、それに努力する人々の姿を通して、豊かな自然を守り育てるために必要な人材について考察する。

第9回：環境を守る取り組み（2：制度と技術）

(担当：瀧本壽史・東信行・篠塚明彦)

人によって改変され作られてきた生態系にも貴重な野生生物や環境が存在する。その環境を守る仕組みや技術について、青森県などの具体的な例をもとに理解を深める。

第10回：青森の社会経済環境に対応した地域活性策

(担当：瀧本壽史・李永俊・篠塚明彦)

人口減少と少子高齢化が進む青森県において、どのように地域の活性化を導くか、経済学の視点から考える。

第11回：持続可能な開発 再生可能エネルギー（1）～青森県の資源について～

(担当：瀧本壽史・井岡聖一郎・篠塚明彦)

地熱発電・風力発電・バイオマス発電など青森県が持つ資源に着目した再生可能エネルギーについて理解を深め、豊富な資源を持つ青森県の姿を考察する。

第12回：持続可能な開発 再生可能エネルギー（2）～新しい再生可能エネルギーについて～

(担当：瀧本壽史・久保田健・篠塚明彦)

青森の自然環境を活かして、これまでに取り組まれてこなかった新しい再生可能エネルギーの可能性について考察する。

第13回：青森の自然環境と人材育成

(担当：瀧本壽史・篠塚明彦)

青森の豊かな自然環境を活用した地域活性化という課題をどのように学校教育の場に活かしていくのかその在り方について考察し、教材化を試みる。

第14回：まとめ～教材化に向けて（1）～学生発表と相互批評（青森の自然環境について）～

(担当：全担当教員)

これまでの授業内容を踏まえて、次世代の人材育成という観点から、教育現場でどのように活

かしていくのか検討を行う。授業では2回にわけて学生全員の発表と相互批評により進める。1回目は主に青森の自然環境について検討を行う。

第15回：まとめ～教材化に向けて（2）～学生発表と相互批評(地域活性化策と人材育成について)

～

(担当：全担当教員)

ここまで授業内容を踏まえて、次世代の人材育成という観点から、教育現場でどのように活かしていくのか検討を行う。授業では2回にわけて学生全員の発表と相互批評により進める。2回目は主に地域活性化策と人材育成について検討を行う。

テキスト

各授業の学習テーマに応じて提示する。

参考書・参考資料等

各授業の学習テーマに応じて提示する。

学生に対する評価

【評価の基準】

- ①地域課題解決という視点から、環境教育の重要性について理解することができる。
- ②青森県の持つ豊かな自然環境との共生及び自然の活用について、基本的な視点を獲得することができる。
- ③次世代の人材育成という視点から、教育現場における活用の在り方について、自ら展望を切り開くことができる。

【評価の構成】

- ①最終レポート (60%)
- ②各テーマについての小レポート (2～13回) (20%)
- ③討論への参加状況など (20%)

授業科目区分	独自テーマ科目	開設コース	全コース
授業科目名 (英文名)	【12】あおもりの教育Ⅱ（健康） (Educational issues in Aomori Ⅱ (for health))		
単位	2 単位	必修・選択区分	必修
授業方法	演習	開講年次・学期	1 年次・前期
担当教員	上野秀人, 小林央美, 小寺弘幸, 伊藤大雄, 高橋一平, 栗林理人, 前多隼人	担当形態	共同
授業の到達目標			
【教育実践開発コースの到達目標】 青森県における健康問題とその要因や対応・こころの発育発達に関連した各分野の最新研究成果や医教連携による地域における健康教育実践の実際とその成果を学び、授業開発や学校教育の様々な場面で活かすことのできる基礎的な素養を身につける。			
【ミドルリーダー養成コースの到達目標】 青森県における健康問題とその要因や対応、こころの発育発達に関連した各分野の最新研究成果や医教連携による地域における健康教育実践の実際とその成果を学び、これまでの教職経験を踏まえて考察し、その上で授業開発や学校教育の様々な場面で活かすことのできる実践力を身に着ける。			
授業の概要			
次世代の人材育成の観点から、青森県の地域課題である健康問題やこころの発育発達について様々な視点から考察し、学校教育や地域への貢献を目指す方向性について検討する。 青森県の抱える「短命県」という健康課題の多様な要因とその解決について、最新の研究成果、課題解決に向けた学校と地域がチームで行う取り組みの実践、健康生活成立の要因、臨床医学と教育学の双方からこころの発達課題への対応などについて多角的に学び、その上で、学校現場での様々な場面を想定した健康教育の教材開発や授業づくりの基礎的事項について深めていく。 具体的には、青森県の健康問題を社会医学、精神医学、健康科学、食料科学そして食育の視点から研究を行っている医学研究科、農学生命科学部、医学研究科附属子どものこころの心の発達センターの教員を兼任教員として配置し、「健康教育」というテーマのもとに地域研究のトップランナーと専任教員、大学院生とでチームを結成（オール弘前大学体制）し、新たな視点から地域に根ざした健康教育の教育方法や教材開発に取り組む。			
授業計画			
第1回：オリエンテーション (担当：上野秀人・小林央美・小寺弘幸) 青森県の健康問題とその健康教育の在り方について学ぶことの意義について、自己のこれまでの生活経験を踏まえて振り返るとともに、授業の進め方の共通理解を図る。			
第2回：青森の健康課題の現状（1）～短命県の現状と要因の概観～ (担当：小林央美・小寺弘幸・高橋一平) 青森県の健康問題「短命県」の現状とその要因について、統計結果や研究結果をもとに多面的・全体的に理解を図る。			
第3回：青森の健康課題の現状（2）～喫煙と飲酒～ (担当：小林央美・小寺弘幸・高橋一平) 青森県における喫煙と飲酒の現状について、統計結果や医学的知見とを総合的に捉え、生活習慣病との関連について理解する。その上で、地域における対策や学校における健康教育との関連で考察する。			

第4回：青森の健康課題の現状（3）～県民の肥満・児童生徒期の肥満～

(担当：小林央美・小寺弘幸・高橋一平)

青森県及び児童生徒期における肥満の現状について、統計結果や医学的知見・学校教育における健康教育の現状と課題を総合的に捉え、生活習慣病との関連について理解する。その上で、地域における対策や児童生徒期の肥満予防について考察する。

第5回：青森の健康課題の現状（4）～こころの発達と健康～

(担当：小林央美・小寺弘幸・栗林理人)

青森県の子どものこころの発達と健康について、子どものこころの発達研究センターの研究調査結果をもとに臨床や医学的知見について理解する。

第6回：青森の食生活の現状と健康課題

(担当：小林央美・小寺弘幸・伊藤大雄・前多隼人)

「生活習慣病」との関連で、塩分摂取や脂質の取り過ぎなど青森の食生活の現状について、食文化や統計結果や医学的知見から理解する。

第7回：青森の運動・生活の現状と健康課題

(担当：小林央美・小寺弘幸・高橋一平)

「生活習慣病」との関連で、青森の運動や生活の現状について、統計結果や医学的知見から理解する。

第8回：青森の子どものこころの発達とインクルーシブ教育（1）～臨床医学・教育学的視点から～

(担当：小林央美・小寺弘幸・栗林理人)

子どものこころの発達とインクルーシブ教育について、臨床医学的・教育学的両面から考察し、学校現場における個別・集団の成長につながるインクルーシブ教育の在り方について考察する。

第9回：青森の子どものこころの発達とインクルーシブ教育（2）～インクルーシブ教育の在り方の実際～

(担当：小林央美・小寺弘幸・栗林理人)

個別に対する臨床医学的側面を考慮した個別指導計画と、集団に対する教育学的側面を考慮した教育計画の統合を視野に入れたインクルーシブ教育の在り方の実際について、「子どものこころの発達研究センターの取り組み」事例を分析しながら考察する。

第10回：児童生徒期の運動の実態と対策

(担当：上野秀人・小林央美・小寺弘幸・高橋一平)

児童生徒期の運動の現状と、心身の発育発達期の特徴を踏まえた運動と生活習慣の効用について、教育学的・医学的知見から、総合的に考察し理解する。

第11回：運動の効果と運動プログラム

(担当：上野秀人・小林央美・小寺弘幸・高橋一平)

健康と運動習慣の関連について、医学的な知見からの理解を深めるとともに、教育学的知見を活かした「運動プログラム作成」の基本的事項について理解する。

第12回：食生活の改善

(担当：小林央美・小寺弘幸・伊藤大雄・前多隼人)

食生活の改善に向けた食物栄養学の文献の中に描かれてきた青森の自然景観の様子を取り上げながら、児童生徒が情緒豊かに青森県の自然と接する態度を身につける方策について考察する。

第13回：健康行動理論とヘルスプロモーション

(担当：上野秀人・小林央美・小寺弘幸)

人間の社会活動のみならず、震災のような自然災害による環境の変化にも着目し、自然環境の変化と人間生活の関わりについて考察する。

第14回：短命県返上を目指す青森県の取り組み

(担当：上野秀人・小林央美・小寺弘幸・高橋一平・前多隼人)

短命県返上を目指す青森県の取り組みを概観し、特に人材育成や学校との連携を密にした「岩木プロジェクト」の実践事例を分析を通して健康教育や生活習慣病予防の在り方について理解する。

第15回：まとめ～教材化に向けて～

(担当：上野秀人・小林央美・小寺弘幸・伊藤大雄・高橋一平・栗林理人)

ここまで授業内容を踏まえて、次世代の人材育成という観点から、教育現場でどのように活かしていくのか、校種・教科・特別活動を軸にして、教科横断的健康教育の展開及びインクルーシブ教育に配慮した教育の検討を行う。

テキスト

各授業の学習テーマに応じて提示する。

参考書・参考資料等

各授業の学習テーマに応じて提示する。

学生に対する評価

【評価の基準】

- ①地域課題解決という視点から、健康教育や子どものこころの発達の重要性について理解することができる。
- ②青森県健康課題現状と要因や子どものこころの発達についての基本事項を理解し、医学的・教育学知見から総合的に考察できる。
- ③次世代の人材育成という視点から、教育現場における活用の在り方について、自ら展望を切り開くことができる。

【評価の構成】

- ①最終レポート（60%）
- ②各テーマについての小レポート（2～15回）（20%）
- ③討論への参加状況など（20%）

授業科目区分	発展科目	開設コース	全コース
授業科目名 (英文名)	【13】教科領域指導研究（発展） (Research on Subjects Teaching (advanced))		
単位	2 単位	必修・選択区分	選択
授業方法	演習	開講年次・学期	1 年次・後期
担当教員	中野博之, 上野秀人, 瀧本壽史, 三上雅生, 東徹, 今田匡彦, 蝦名敦子, 杉原かおり, 野呂徳治, 日景弥生, 本間正行, 山田史生, Rausch Anthony Scott, 上之園哲也, 小瑠史朗, 櫻田安志, 佐藤崇之, 篠塚明彦, 富田晃, 小野恭子, 鈴木愛理, 田中義久	担当形態	共同
授業の到達目標 【教育実践開発コースの到達目標】	<p>基礎科目的「教科領域指導研究」での学びを発展させ、各学生のこれまでの教育実習での授業経験を踏まえた研究課題の探究のために教科領域についての知識を発展させるとともに、各学生が学んだ各教科領域についての知識を子供へどのように翻訳をするのか考えることができる。</p> <p>【ミドルリーダー養成コースの到達目標】</p> <p>基礎科目の「教科領域指導研究」での学びを発展させ、各学生のこれまでの教職経験を踏まえた研究課題の探究のために教科領域についての知識を発展させるとともに、各学生が学んだ各教科領域についての知識を子供へどのように翻訳をするのか考えることができる。</p>		
授業の概要	<p>基礎科目で身に付けた教科領域指導充実のために必要な資料収集の仕方、教材研究等の在り方を発展させ、各自が抱えた課題や地域や学校が抱えている課題の解決のために、各自の専門教科についての知識、課題、授業への基本的な考え方について学習をする。なお、各専門教科への特化した内容だけを扱うのではなく、学校教育についての広い視点を持って各専門教科領域の学習指導にあたることの重要さについての理解も深める。</p>		
授業計画 第1回：オリエンテーション (担当：中野博之・上野秀人・瀧本壽史・三上雅生)	<p>教科領域指導充実のために必要な資料収集の仕方、教材研究等の在り方を発展させ、各自が抱えた課題や地域や学校が抱えている課題の解決のために、各自の専門教科についての知識、課題、授業への基本的な考え方について 15 回の授業内容の概略と進め方、準備物等の確認と 15 回の授業内容の確認を行う。</p>		
第2回：各教科領域の特性について（教科教育学から）（1）～各教科の学習目的について～ (担当：東徹・今田匡彦・蝦名敦子・杉原かおり・野呂徳治・日景弥生・本間正行・山田史生・Rausch Anthony Scott・上之園哲也・小瑠史朗・櫻田安志・佐藤崇之・篠塚明彦・富田晃・小野恭子・鈴木愛理・田中義久) ・各院生が担当している各教科領域について、各教科教育学の教員ごと分かれて、授業を行う。 どの教科においても、基礎科目での学びを踏まえた上で教材についての本質的な理解について考察が深まるようにする。なお、授業方法は全て演習で行う。			

- ・各自が担当する教科領域を児童生徒が学習する目的について考察する。

第3回：各教科領域の特性について（教科教育学から）（2）～知識の捉え方について～
(担当：東徹・今田匡彦・蝦名敦子・杉原かおり・野呂徳治・日景弥生・本間正行・山田史生・Rausch Anthony Scott・上之園哲也・小瑠史朗・櫻田安志・佐藤崇之・篠塚明彦・富田晃・小野恭子・鈴木愛理・田中義久)

各自の専門教科についての知識の捉え方について考察する。

第4回：各教科領域の特性について（教科教育学から）（3）～課題の考え方の考察～
(担当：東徹・今田匡彦・蝦名敦子・杉原かおり・野呂徳治・日景弥生・本間正行・山田史生・Rausch Anthony Scott・上之園哲也・小瑠史朗・櫻田安志・佐藤崇之・篠塚明彦・富田晃・小野恭子・鈴木愛理・田中義久)

各自の専門教科についての課題の捉え方について考察する。

第5回：各教科領域の特性について（教科教育学から）（4）～学習指導の考え方の考察～
(担当：東徹・今田匡彦・蝦名敦子・杉原かおり・野呂徳治・日景弥生・本間正行・山田史生・Rausch Anthony Scott・上之園哲也・小瑠史朗・櫻田安志・佐藤崇之・篠塚明彦・富田晃・小野恭子・鈴木愛理・田中義久)

各自の専門教科についての学習指導への考え方について考察する。

第6回：各教科領域の特性について（教科教育学から）（5）～授業の考え方～
(担当：東徹・今田匡彦・蝦名敦子・杉原かおり・野呂徳治・日景弥生・本間正行・山田史生・Rausch Anthony Scott・上之園哲也・小瑠史朗・櫻田安志・佐藤崇之・篠塚明彦・富田晃・小野恭子・鈴木愛理・田中義久)

各自の専門教科についての授業の考え方について考察する。

第7回：各教科領域の特性について（教科教育学から）（6）～自分の専門教科と他教科との関連について～
(担当：東徹・今田匡彦・蝦名敦子・杉原かおり・野呂徳治・日景弥生・本間正行・山田史生・Rausch Anthony Scott・上之園哲也・小瑠史朗・櫻田安志・佐藤崇之・篠塚明彦・富田晃・小野恭子・鈴木愛理・田中義久)

各門教科と他教科との関連について考察する。

第8回：各教科領域の特性について（教科専門学から）（1）～自分の専門教科に分かれて教科の最新情報を理解する～

(担当：東徹・今田匡彦・蝦名敦子・杉原かおり・野呂徳治・日景弥生・本間正行・山田史生・Rausch Anthony Scott・上之園哲也・小瑠史朗・櫻田安志・佐藤崇之・篠塚明彦・富田晃・小野恭子・鈴木愛理・田中義久)

各院生が担当している各教科領域についての教科について、教科専門の教員ごと分かれて、授業を行う。どの教科においても、基礎科目での学びを踏まえた上で、教材についての本質的な理解について考察が深まるようにする。この回は各教科の学問としての最新情報について考察する。

第9回：各教科領域の特性について（教科専門学から）（2）～自分の専門教科に分かれて教科の思考方法を理解する～

(担当：東徹・今田匡彦・蝦名敦子・杉原かおり・野呂徳治・日景弥生・本間正行・山田史生・Rausch Anthony Scott・上之園哲也・小瑠史朗・櫻田安志・佐藤崇之・篠塚明彦・富田晃・小野恭子・鈴木愛理・田中義久)

各院生が担当している各教科領域について、教科専門の教員ごと分かれ、各教科の特性として考えられる思考方法について考察する。

第10回：各教科領域の特性について（教科専門学から）（3）～自分の専門教科に分かれて教科の歴史的背景を理解する～

(担当：東徹・今田匡彦・蝦名敦子・杉原かおり・野呂徳治・日景弥生・本間正行・山田史生・Rausch

Anthony Scott・上之園哲也・小瑠史朗・櫻田安志・佐藤崇之・篠塚明彦・富田晃・小野恭子・鈴木愛理・田中義久)

各院生が担当している各教科領域について、教科専門の教員ごと分かれ、各教科の歴史的背景について考察する。

第 11 回：各教科領域の特性について（教科専門学から）（4）～自分の専門教科に分かれて特徴的な問題を解決する～

(担当：東徹・今田匡彦・蝦名敦子・杉原かおり・野呂徳治・日景弥生・本間正行・山田史生・Rausch Anthony Scott・上之園哲也・小瑠史朗・櫻田安志・佐藤崇之・篠塚明彦・富田晃・小野恭子・鈴木愛理・田中義久)

各院生が担当している各教科領域について、教科専門の教員ごと分かれ、各教科の特徴的な問題について考察する。

第 12 回：各教科領域の特性について（教科専門学から）（5）～自分の専門教科に分かれて教科内容の生活への活用を考える～

(担当：東徹・今田匡彦・蝦名敦子・杉原かおり・野呂徳治・日景弥生・本間正行・山田史生・Rausch Anthony Scott・上之園哲也・小瑠史朗・櫻田安志・佐藤崇之・篠塚明彦・富田晃・小野恭子・鈴木愛理・田中義久)

各院生が担当している各教科領域について、教科専門の教員ごと分かれ、各教科内容の生活への活用について考察する。

第 13 回：各教科領域の特性について（教科専門学から）（6）～自分の専門教科に分かれて今後の発展の方向について考える～

(担当：東徹・今田匡彦・蝦名敦子・杉原かおり・野呂徳治・日景弥生・本間正行・山田史生・Rausch Anthony Scott・上之園哲也・小瑠史朗・櫻田安志・佐藤崇之・篠塚明彦・富田晃・小野恭子・鈴木愛理・田中義久)

各院生が担当している各教科領域について、教科専門の教員ごと分かれ、各教科の今後の発展の方向について考察する。

第 14 回：各教科領域の特性について（教科専門学から）（7）～専門的内容の児童生徒への伝え方～

(担当：東徹・今田匡彦・蝦名敦子・杉原かおり・野呂徳治・日景弥生・本間正行・山田史生・Rausch Anthony Scott・上之園哲也・小瑠史朗・櫻田安志・佐藤崇之・篠塚明彦・富田晃・小野恭子・鈴木愛理・田中義久)

各院生が担当している各教科領域について専門的内容を学び、その専門的な内容とどのように子供に翻訳をするのかを考える。

第 15 回：討論会（教科領域の違いをこえた教材研究の在り方とは「各自の学びから子供への翻訳」）
(担当：中野博之・上野秀人・三上雅生・瀧本壽史)

各院生が専門教科領域の教科教育や専門的な内容での学びを、どのように子供へ翻訳し教科教育の授業づくりに活かしていくのかについて、それぞれの学びを共有しながら議論を行う。

テキスト

各授業の学習テーマに応じて提示する。

参考書・参考資料等

各授業の学習テーマに応じて提示する。

学生に対する評価

【評価の基準】

- ①教科教育という視点から各院生の担当教科の専門的な内容の学び方を理解し、それをどのように子供へ翻訳していくのかを理解することができる。
- ②各教科の専門的な内容の今日的な課題を知る。

【評価の構成】

- ①最終レポート (60%)
- ②事前学習ワークシート (20%)
- ③授業時の協議への参加状況など (20%)

授業科目区分	発展科目	開設コース	全コース
授業科目名 (英文名)	【14】養護実践課題解決研究 (Research on Yogo Practice)		
単位	2 単位	必修・選択区分	選択
授業方法	演習	開講年次・学期	1 年次・後期
担当教員	小林央美, 古川郁生, 小寺弘幸, 太田誠耕, 葛西敦子, 小玉正志, 田中完	担当形態	共同
授業の到達目標			
【教育実践開発コースの到達目標】 学校における健康課題の解決について、養護教諭と教諭との協働を通じた取り組みの在り方や養護の概念や基礎的理論について理解し、健康課題解決の実践について「チーム学校」の一員としての取り組みの在り方について考察できる。			
【ミドルリーダー養成コースの到達目標】 学校における健康課題の解決について、養護教諭と教諭との協働を通じた取り組みの在り方や地域との協働の在り方等について実務的側面から広く理解することに加え、養護実践の内容・方法についても理解を深めることにより、健康課題解決の実践について「チーム学校」の一員としてのミドルリーダーの役割について考察できる。			
授業の概要			
「あおもりの教育Ⅱ（健康）」での学習を踏まえ、学校における健康課題の解決について、養護教諭と教諭との協働を通じた取り組みの意義、組織体制、校内研修等の在り方、そして地域との協働の在り方等について実務的側面から広く考察する。また、養護の概念や機能の理解を基盤として、養護実践の内容・方法に関する基礎的理論について理解を深める。さらに、キャリアステージに応じた健康課題解決の実践について「チーム学校」の一員としての取り組みの在り方や、ミドルリーダーの役割についても考察する。			
授業計画			
第1回：オリエンテーション (担当：小林央美・小寺弘幸) 学校における健康課題の課題解決に向けた「チーム学校」の一員としての、養護教諭と健康教育に関わる教諭（学級担任、保健体育教諭、栄養教諭等）との協働的取り組みとミドルリーダーの重要性、健康課題解決に向けて養護実践の視点から追究・学ぶことの意義について、自己これまでの教職経験を、これから教職生活を見据えて振り返るとともに、授業の進め方の共通理解を図る。			
第2回：健康課題解決と学校全体での取り組みの意義 (担当：小林央美・古川郁生・小寺弘幸) 学校における健康課題の解決に向けた困難性について、教育実践・養護実践・教育実習での実践を踏まえてグループ討議を通して確認し、その上で、課題解決に向けて養護教諭と健康教育に関わる教諭との協働で取り組むことの意義とミドルリーダーの在り方について考察する。			
第3回：健康課題解決に関わる多様な人材の理解とミドルリーダーの役割 (担当：小林央美・古川郁生・小寺弘幸) 学校における健康課題の解決の先駆的実践事例の分析をもとに、養護教諭と健康教育に関わる教諭の役割、教員以外の地域の専門家の役割についてグループ討議と全体発表を通して考察し、その上で、課題解決に関わる多様な人材との協働においてミドルリーダーに求められる役割について考察する。			

第4回：健康課題解決に関わる学校全体での協働とミドルリーダーの役割

(担当：小林央美・古川郁生・小寺弘幸)

健康課題解決にあたったいくつかの実践事例の分析をもとに、協働的解決における教育効果とうまくいかない要因についてグループ討議と全体発表を通して考察し、その上で、学校全体での課題解決におけるミドルリーダーに求められる役割と能力について考察する。

第5回：健康課題解決に向けた地域との協働の在り方・協働体制の整備（1）～先駆的な実践事例の分析～

(担当：小林央美・古川郁生・小寺弘幸)

学校と地域が協働で健康課題の解決にあたった先駆的実践事例の分析を通して、地域との協働の在り方や、その協働体制についてグループ討議と全体発表を通して考察し、その上で、地域との協働においてミドルリーダーに求められる役割と能力について考察する。

第6回：健康課題解決に向けた地域との協働の在り方・協働体制の整備（2）～困難性とその克服～

(担当：小林央美・古川郁生・小寺弘幸)

実践事例の分析をもとに、健康課題の解決を学校と地域が協働で行っていくにあたり、その困難点を明らかにする。その上で地域との協働におけるトラブルの要因とその対応の在り方や解決策についてグループ討議と全体発表を通して考察し、その上で、地域との協働においてミドルリーダーに求められる役割と能力について考察する。

第7回：健康課題解決に向けた校内研修におけるミドルリーダー

(担当：小林央美・小寺弘幸)

健康教育のミドルリーダーとして、健康課題解決に向けた校内研修の企画・運営・評価の在り方について考察する。

第8回：健康課題解決に向けた教育実践・養護実践とは何か

(担当：小林央美)

これまでの教育実践・養護実践・教育実習での実践について、自己の教育観や子ども観、教職員や地域との協働的視点を踏まえてまとめ、発表と討議を通してふり返り考察する。また、教育効果が見られた実践とうまくいかなかった実践の分析比較や先駆的な優れた教育・養護実践の事例の分析を通して、協働的養護実践の在り方について討議し、考察する。

第9回：教育問題・健康問題の発見と問題構造の明確化～衛生学的・医学的・解剖学的・看護学的視点から～

(担当：小林央美・太田誠耕・葛西敦子・小玉正志・田中完)

勤務校における教育問題や健康問題、実習校や一般的な児童生徒の教育問題について発見、整理し、発表を通して共有する。その上で、衛生学的・医学的・解剖学的・看護学的視点を踏まえてその問題構造の明確化を図るために考察する。

第10回：教育問題・健康問題の問題構造の明確化から見える指導目標

(担当：小林央美)

教育問題・健康問題の問題構造の明確化から見える背景要因と養護教諭の専門的ニーズと児童生徒の主観的ニーズの共通化を目指す教育目標や学校全体、地域との連携を視野に入れた教育目標の在り方について考察する。

第11回：養護実践の構築と実際（1）～個別的・集団的アプローチの視点から～

(担当：小林央美)

健康課題解決や養護実践における個別的・集団的アプローチの視点から、問題構造や根拠を明確にした実践計画を立案し、発表とその評価を通して考察する。

第12回：養護実践の構築と実際（2）～インクルーシブの考え方・社会問題の視点から～

(担当：小林央美)

児童生徒の発達段階の考慮・発達に課題を有する児童生徒へのインクルーシブの考え方の視点や、児童生徒の貧困問題等、社会問題を背景とした視点から問題構造や根拠を明確にし、協働的視点での実践計画立案について、発表とその評価を通して考察する。

第13回：チーム学校として取り組む養護実践・健康教育の在り方

(担当：小林央美・古川郁生・小寺弘幸)

自己の捉える健康課題を取りあげながら、学校におけるミドルリーダーとして協働での課題解決に取り組む「チーム学校」の一員としての視点で、問題構造や根拠を明確にした実践計画を立案し、発表とその評価を通して考察する。

第14回：キャリアステージに応じた養護実践の在り方と研修

(担当：小林央美・古川郁生)

キャリアステージに応じた養護実践の向上を目指した実践研究と研修の在り方について、これまでの教職経験やこれから教職生活を見据えて考察する。また、養護教諭の立場での研修の企画・実施・評価についても考察する。

第15回：健康課題解決に向けたミドルリーダー・養護実践のこれからの展望

(担当：小林央美・古川郁生・小寺弘幸・太田誠耕・葛西敦子・小玉正志・田中完)

これからの学校教育や健康課題を見据えて、チームとしての学校を踏まえ、今後の養護実践の展望や、ミドルリーダーとしての展望を考察する。

テキスト

- ・ドナルド・A・ショーン(2007)『省察的実践とは何か—プロフェッショナルの行為と思考』鳳書房
- ・ロバート・B・ケアンズ 他 (2006)『発達科学—「発達」への学際的アプローチ』ブレーン書房
- ・金井壽宏, 楠見孝編 (2012)『実践知ーエキスパートの知性』有斐閣
- ・兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科 (2006)『教育実践学の構築』東京書籍
- ・大谷尚子 (2009)『新 養護学概論』東山書房
- ・淵上克義, 佐藤博志 (2007)『スクールリーダーの原点』金子書房

参考書・参考資料等

- ・藤田和也 (1999)『養護教諭の教育実践の地平』東山書房
- ・大谷尚子 (2008)『養護教諭のための養護学・序説』東山書房
- ・数見隆生 (1994)『教育保健学の構図—「教育としての学校保健」の進展のために』大修館書房
- ・北神正行, 高橋香代 (2007)『学校組織マネジメントとスクールリーダー』学文社
- ・その他各授業の学習テーマに応じて提示する。

学生に対する評価

【評価の基準】

- ①養護教諭と教諭の協働を通じた取り組みの在り方や養護の概念に関する基礎的理論について理解することができる。
- ②健康課題解決の実践について「チーム学校」の一員としての取り組みの在り方について考察することができる。

【評価の構成】

- ①最終レポート (60%)
- ②各テーマについての小レポート (2~15回) (20%)
- ③討論への参加状況など (20%)

授業科目区分	発展科目	開設コース	全コース
授業科目名 (英文名)	【15】特別支援教育の教育課程の実施と評価 (special needs education in school: curriculum development, practice, and evaluation)		
単位	2 単位	必修・選択区分	選択
授業方法	演習	開講年次・学期	1 年次・後期
担当教員	敦川真樹, 中山忠政	担当形態	共同
授業の到達目標			
【教育実践開発コースの到達目標】 特別な配慮・支援を要する児童生徒の実態に関わる多角的な情報と教育、及び発達科学専門領域の知見に基づく教育課程の編成が、児童生徒の困難の改善や育ちの支援にとって有効性をもつことを理解できる。			
【ミドルリーダー養成コースの到達目標】 特別な教育ニーズを有する児童生徒に関して、自らの構成した指導内容・方法の実践と省察を繰り返し、その成果を踏まえて効率的に配置構成した教育課程編成を行うことができる。			
授業の概要 基礎科目「教育における社会的包摶」での学びを発展させ、特別な配慮・支援を必要とする児童生徒の困難の改善を目指した具体的な指導内容・方法に関しての実践と省察を行い、それに基づく効果的な教育課程の編成について学ぶ。児童生徒の実態に関わる多角的な情報と専門領域の知見を踏まえた教育課程の編成が、児童生徒の困難の改善に有効であるとの認識を指導者間で共有する仕組みづくりのための資質を養成する。			
授業計画			
第1回：オリエンテーション (担当：敦川真樹・中山忠政) 特別支援教育における国の動向、各種政策、関係法令等を概観し、議論の前提となる基本的事項について確認する。			
第2回：実態改善や促進のための指導支援内容・方法の検討及び内容方法等を配置構成する教育課程に関する演習①～指導支援内容の検討～ (担当：敦川真樹・中山忠政) 児童生徒個々の特別なニーズに応じた指導支援について、その内容的側面に注目して議論を進める。			
第3回：実態改善や促進のための指導支援内容・方法の検討及び内容方法等を配置構成する教育課程に関する演習②～指導支援方法の検討～ (担当：敦川真樹・中山忠政) 児童生徒個々の特別なニーズに応じた指導支援について、その方法的側面に注目して議論を進める。			
第4回：実態改善や促進のための指導支援内容・方法の検討及び内容方法等を配置構成する教育課程に関する演習③～教育課程の把握～ (担当：敦川真樹・中山忠政) 児童生徒個々の特別なニーズに応じた教育課程について、その編成の意図と経緯に注目して議論を進める。			
第5回：実態改善や促進のための指導支援内容・方法の検討及び内容方法等を配置構成する教育課程			

程に関する演習④～教育課程の考察～

(担当：敦川真樹・中山忠政)

児童生徒個々の特別なニーズに応じた教育課程について、経過と成果の評価に基づいて考察を深める。

第6回：指導支援方法の成果発表と総括

(担当：敦川真樹・中山忠政)

指導支援方法と教育課程の開発・編成に向けて、第5回までに議論と分析、考察の成果の整理・確認を行う。

第7回：開発した指導支援方法と編成した教育課程に基づく実践と検証による教育課程の再検討・修正1－①～教育課程に基づく実践～

(担当：敦川真樹・中山忠政)

開発した指導支援方法を教育課程に基づいて実践し、その成果と問題点について検討する。

第8回：開発した指導支援方法と編成した教育課程に基づく実践と検証による教育課程の再検討・修正1－②～教育課程に基づく検証～

(担当：敦川真樹・中山忠政)

開発した指導支援方法を教育課程に基づいて検討し、修正を行う。

第9回：開発した指導支援方法と編成した教育課程に基づく実践と検証による教育課程の再検討・修正1－③～教育課程の再検討～

(担当：敦川真樹・中山忠政)

修正された指導支援方法の実践について、教育課程に基づきながら再検討を加える。

第10回：教育課程編成の成果発表と総括

(担当：敦川真樹・中山忠政)

指導支援方法と教育課程の開発・編成の洗練に向けて、第7回～第9回の議論と分析、考察の成果の整理・確認を行う。

第11回：開発した指導支援方法と編成した教育課程に基づく実践と検証による教育課程の再検討・修正2－①～教育課程の問題点の把握～

(担当：敦川真樹・中山忠政)

開発した指導支援方法と編成した教育課程の実践に基づいて、教育課程の問題点と修正の方向性について議論する。

第12回：開発した指導支援方法と編成した教育課程に基づく実践と検証による教育課程の再検討・修正2－②～教育課程の修正案作成～

(担当：敦川真樹・中山忠政)

把握された教育課程の問題点と修正の方向性についての議論を踏まえ、具体的な修正案の作成を行う。

第13回：開発した指導支援方法と編成した教育課程に基づく実践と検証による教育課程の再検討・修正2－③～教育課程の修正案の討議～

(担当：敦川真樹・中山忠政)

作成された教育課程の修正案に基づく実践について、その成果と問題点を検討する。

第14回：開発した指導支援方法と編成した教育課程に基づく実践と検証による教育課程の総括的検討

(担当：敦川真樹・中山忠政)

指導支援方法と教育課程の開発・編成、及びその評価を通じて、あらためて教育課程とその編成の在り方について考察する。

第15回：指導支援方法と教育課程編成の成果発表と総括

(担当：敦川真樹・中山忠政)

本講を通じての学びを共有するとともに、指導支援方法と教育課程編成についての理解の統合を図る。

テキスト

各授業の学習テーマに応じて提示する。

参考書・参考資料等

各授業の学習テーマに応じて提示する。

学生に対する評価

【評価の基準】

- ①児童生徒の特別なニーズに即した具体的な指導方法・内容を実践・省察することができる。
- ②特別なニーズに即した教育課程編成の重要性を、指導者間で共通に認識できる仕組みづくりに取り組むことができる。

【評価の構成】

- ①最終レポート (60%)
- ②事前学習ワークシート (20%)
- ③討論への参加状況など (20%)

授業科目区分	発展科目	開設コース	ミドルリーダー養成コース
授業科目名 (英文名)	【16】地域教育課題研究（教育課程編成・教材開発） (Research on Regional Tasks of Education (Curriculum organization · Development of teaching materials))		
単位	2 単位	必修・選択区分	選択
授業方法	演習	開講年次・学期	1 年次・後期
担当教員	上野秀人、小林央美、 中妻雅彦、瀧本壽史、 成田頼昭	担当形態	共同
授業の到達目標 地域教育課題である「健康」「環境」「社会的な包摂」に関わる内容を、児童・生徒の実態や地域性を考慮しながら、その解決に向けた教育課程を編成したり具体的な単元及び一単位授業での教材開発ができる。			
授業の概要 基礎科目「教育課程編成をめぐる動向と課題」、「教育課程の開発と実践」での学びと、独自テーマ科目「あおもりの教育 I (環境)」、「あおもりの教育 II (健康)」での学びを基に展開する。また、青森県の課題であるインクルーシブ教育を含めた教育における社会的な包摂についても扱っていくものとする。 この科目は、青森県の課題について、その解決にむけて勤務校での教育課程に位置付けていく力や他の同僚教師とともに活用することを可能とするような教材開発へと展開させていく力を培う。			
授業計画 第1回：オリエンテーション (担当：上野秀人・小林央美・中妻雅彦・瀧本壽史・成田頼昭) 「教育課程」の編成に関する留意点を再考し、講義全体の内容を通して観察し、受講生の課題意識を深める。また、授業の進め方についての共通理解を図る。			
第2回：地域教育課題の把握 (担当：上野秀人・小林央美・中妻雅彦・瀧本壽史・成田頼昭) 勤務校の位置する地域の現状を把握し、そこでの教育課題を認識する。			
第3回：教育課程分析 (担当：上野秀人・小林央美・中妻雅彦・瀧本壽史・成田頼昭) 勤務校における現行の「教育課程」を分析し、その意図や特徴について分析する。			
第4回：全体計画の作成 (担当：上野秀人・小林央美・中妻雅彦・瀧本壽史・成田頼昭) 地域教育課題を解決するための全体計画を作成し、その工夫点について提案する。			
第5回：地域教育課題解決に向けた年間計画の作成（1）～学年の年間計画～ (担当：上野秀人・小林央美・中妻雅彦・瀧本壽史・成田頼昭) ターゲットの学年を決め、地域教育課題の解決に向けた取組みを示す年間計画を作成する。			
第6回：地域教育課題解決に向けた年間計画の作成（2）～他学年の年間計画～ (担当：上野秀人・小林央美・中妻雅彦・瀧本壽史・成田頼昭) 前回の年間計画を他学年にひろげる。			
第7回：地域教育課題解決に向けた年間計画の作成（3）～より効果的な年間計画～			

(担当：上野秀人・小林央美・中妻雅彦・瀧本壽史・成田頼昭)

前回までに作成した年間計画を全学年または他領域との関連化を強化・深化し、より効果的計画的な案を作成する。

第8回：地域課題別にグループでの討論

(担当：上野秀人・小林央美・中妻雅彦・瀧本壽史・成田頼昭)

地域課題別にグループを組み、全体計画と年間計画の関係や年間計画の内容について検討する。

第9回：全体での討論

(担当：上野秀人・小林央美・中妻雅彦・瀧本壽史・成田頼昭)

地域課題ごとにまとめた年間計画を全体で紹介し合い、その特徴や工夫点について意見交換する。

第10回：協働による単元計画作成

(担当：上野秀人・小林央美・中妻雅彦・瀧本壽史・成田頼昭)

年間計画をもとに、具体的な単元計画を作成し、その工夫点を検討する。

第11回：教材開発

(担当：上野秀人・小林央美・中妻雅彦・瀧本壽史・成田頼昭)

単元実施上で大きな手立てとなる教材・教具を開発する。

第12回：単元計画及び教材開発に関わる討論

(担当：上野秀人・小林央美・中妻雅彦・瀧本壽史・成田頼昭)

単元計画及び教材開発に関わる具体的な工夫点について討論し、協働的に修正を加える。

第13回：教育課程、年間指導計画、教材開発に関する修正

(担当：上野秀人・小林央美・中妻雅彦・瀧本壽史・成田頼昭)

幼・小・中・高・特別支援学校における各校種の特徴的視点をもとに教育課程、年間指導計画、教材開発に関する修正を考える。

第14回：修正案についての討論

(担当：上野秀人・小林央美・中妻雅彦・瀧本壽史・成田頼昭)

修正案について、汎用性を考慮し検討する。

第15回：教育課程・教材開発をめぐる課題と展望

(担当：上野秀人・小林央美・中妻雅彦・瀧本壽史・成田頼昭)

授業全体を通じて、教材開発をめぐる課題と展望についてまとめる。

テキスト

各授業の学習テーマに応じて提示する。

参考書・参考資料等

- ・ ウィギンズ、マクタイ (2012)『理解をもたらすカリキュラム設計－「逆向き設計」の理論と方法－』日本標準
- ・ その他各授業の学習テーマに応じて提示する。

学生に対する評価

【評価の基準】

- ①地域教育課題の解決に向けた教育課程を設計することができる。
- ②地域教育課題の解決に向けた授業設計に関わる教材開発ができる。
- ③教育課程と教材開発の作成及び討論において、協働で取り組むことができる。

【評価の構成】

- ①最終レポート (60%)
- ②事前学習ワークシート (20%)

③討論への参加状況など (20%)

授業科目区分	発展科目	開設コース	ミドルリーダー養成コース
授業科目名 (英文名)	【17】協働的生徒指導のマネジメント (student guidance advanced: collaborative practice and management)		
単位	2 単位	必修・選択区分	選択
授業方法	演習	開講年次・学期	1 年次・後期
担当教員	吉原寛, 古川郁生, 吉中淳	担当形態	共同
授業の到達目標	同じ学校の同僚教師や保護者及び校外機関など地域の力を動員かつコーディネートする視点で、生徒指導活動を展開していく具体的なマネジメント方法について考察することができる。		
授業の概要	<p>基礎科目「生徒指導の理論的視点と実践的視点」での学びを発展させ、校内・校外の各種資源との連携をコーディネートしながら生徒指導活動を展開していく方法について考える。</p> <p>今日的な教育問題の解決と、児童生徒の自己指導力の伸展に向けた具体的方法について議論し、そのマネジメントについて理解を深める。学校全体の生徒指導活動の底上げにつながる実践的方法についても考察する。</p> <p>なお、全回とも研究者教員と実務家教員のチーム・ティーチングで運営する。</p>		
授業計画	<p>第1回：オリエンテーション (担当：吉原寛・古川郁生・吉中淳)</p> <p>講義全体の内容を通観するとともに、受講生の課題意識を深める。授業目標の共有と事例提供に関する倫理、事例情報守秘の徹底等の基本的理解を再確認する。</p> <p>第2回：教師の児童生徒理解（1）～動的の理解と静的の理解～ (担当：吉原寛・古川郁生・吉中淳)</p> <p>教師の児童生徒理解が生徒指導活動に及ぼす影響・効果について、受講生の自験例もしくは国内外の実践例をもとに、ディスカッションを通じて検討する。</p> <p>第3回：教師の児童生徒理解（2）～留意すべき評価バイアス～ (担当：吉原寛・古川郁生・吉中淳)</p> <p>教師の児童生徒理解が生徒指導活動に及ぼす影響・効果について、受講生の自験例もしくは国内外の実践例をもとに、ディスカッションを通じて検討する。</p> <p>第4回：教師の自己理解 (担当：吉原寛・古川郁生・吉中淳)</p> <p>教師の自己理解の伸展が児童生徒理解に対して促進的に働くことについて、受講生の自験例もしくは国内外の実践例をもとに、ディスカッションを通じて検討する。</p> <p>第5回：教師集団の理解とその組織開発 (担当：吉原寛・古川郁生・吉中淳)</p> <p>校内での生徒指導を円滑に行う上での教員組織づくり及び関係づくりについて、演習を通じて体験的に学ぶ。</p> <p>第6回：校外機関との連携（1）～相談機関～ (担当：吉原寛・古川郁生・吉中淳)</p> <p>校外の相談機関との協働、児童生徒の紹介等を含む連携事例について、ディスカッションを通じて検討する。</p>		

第7回：校外機関との連携（2）～医療機関～

(担当：吉原寛・古川郁生・吉中淳)

校外の医療機関との協力的関係の構築、連携が奏功した事例及び連携がうまくいかなかった事例を通して、教師の役割について再考する。

第8回：校外機関との連携（3）～法執行機関～

(担当：吉原寛・古川郁生・吉中淳)

虞犯・触法等に関する対応と、警察等との連携について、事例をもとにディスカッションを通じて検討する。

第9回：校外機関との連携（4）～養護施設等～

(担当：吉原寛・古川郁生・吉中淳)

児童養護施設等、児童生徒の生活を支える校外機関の役割を学ぶとともに、連携の在り方についてディスカッションを通じて検討する。

第10回：保護者との連携・協働

(担当：吉原寛・古川郁生・吉中淳)

生徒指導にあたっての保護者との連携について、連携が奏功した事例と困難事例を通じて考える。

第11回：進路指導・キャリア教育（1）～進路指導の在り方～

(担当：吉原寛・古川郁生・吉中淳)

学校卒業後を見据えた進路指導・キャリア教育の在り方について、受講生の自験例もしくは国内外の実践例をもとに、ディスカッションを通じて検討する。

第12回：進路指導・キャリア教育（2）～キャリア教育の在り方～

(担当：吉原寛・古川郁生・吉中淳)

学校卒業後を見据えた進路指導・キャリア教育の在り方について、受講生の自験例もしくは国内外の実践例をもとに、ディスカッションを通じて検討する。

第13回：児童生徒の自己理解（1）～実践例の考察～

(担当：吉原寛・古川郁生・吉中淳)

児童生徒の自己指導力の伸展に向けて、児童生徒の自己理解を促進する方法について、受講生の自験例もしくは国内外の実践例をもとに、ディスカッションを通じて検討する。

第14回：児童生徒の自己理解（2）～児童生徒の自己理解を促進する～

(担当：吉原寛・古川郁生・吉中淳)

児童生徒の自己指導力の伸展に向けて、児童生徒の自己理解を促進する方法について、演習を通じて体験的に学ぶ。

第15回：生徒指導の今日的課題と展望

(担当：吉原寛・古川郁生・吉中淳)

学校・教員が直面している今日的課題を総括し、今後の生徒指導の在り方、自身の関与の在り方について考察する。

テキスト

各授業の学習テーマに応じて提示する。

参考書・参考資料等

各授業の学習テーマに応じて提示する。

学生に対する評価

【評価の基準】

- ①連携・協働という視点から、生徒指導の基本的性格について理解することができる。
- ②生徒指導に関する理論的理解をもとに、連携・協働という視点で今日の生徒指導をめぐる問題を

考察することができる。

③協働的生徒指導に対して、今後の自らの教員としての在り方を展望することができる。

【評価の構成】

- ①最終レポート (60%)
- ②事前学習ワークシート (20%)
- ③討論への参加状況など (20%)

授業科目区分	発展科目	開設コース	ミドルリーダー養成コース
授業科目名 (英文名)	【18】学校の地域協働と危機管理 (Regional Collaboration and Risk Management)		
単位	2 単位	必修・選択区分	選択
授業方法	演習	開講年次・学期	1 年次・後期
担当教員	小林央美、三浦智子、 三戸延聖	担当形態	共同
授業の到達目標	<p>学校における学校安全・危機管理のうち、特に自然災害の発災時やその後の生活の復興に向けての児童生徒の安全確保の初動対応・地域協働での避難所の運営・ライフラインの復興までの対応・支援者支援・防災教育等について、学校や教職員の果たす役割と地域協働の在り方の視点で考察し、卓上訓練ができる。</p>		
授業の概要	<p>学校安全が対象とする生活安全、交通安全、防災(災害安全)の3領域のうち、特に地震などの自然災害における防災と危機管理に焦点を当てて学校の地域協働と危機管理について学ぶ。基礎科目の「学校安全と危機管理」で学んだ知識や考え方を活用し、発災時を想定しながら、学校や教員の果たす役割と地域協働の在り方について、これまでの教職経験での課題やヒヤリハットの分析、先進的事例の分析、危機管理体制の策定などを通して学ぶ。</p>		
授業計画	<p>第1回：オリエンテーション (担当：小林央美・三浦智子・三戸延聖) 「自然災害と危機管理」に関する基本的理解を図るとともに、講義全体の内容を概観し、受講生の課題意識を深める。また、授業の進め方についての共通理解を図る。</p> <p>第2回：自然災害発生時の学校や教職員の果たす役割とその課題 (担当：小林央美・三浦智子・三戸延聖) これまでの教職経験を通して捉えている自然災害発生時や学校事故におけるヒヤリハットとともに、学校や教職員の果たす役割についての課題整理を行い、その背景について考察する。(K・J法)</p> <p>第3回：自然災害発生時の学校と地域協働と危機管理とその課題 (担当：小林央美・三浦智子・三戸延聖) これまでの教職経験を通して捉えている学校事故や自然災害発生時の学校と地域協働の事例を整理し、その背景について考察する。(K・J法)</p> <p>第4回：自然災害発生時の対応事例や先駆的取り組み事例の分析（1）～岩手県・宮城県の取り組み～ (担当：小林央美・三浦智子・三戸延聖) 東日本大震災発生時の岩手県・宮城県の児童生徒の安全確保の初動対応・地域協働での避難所の運営・ライフラインの復興までの対応・支援者支援について分析し、学校や教職員の果たす役割や地域協働について考察する。</p> <p>第5回：自然災害発生時の対応事例や先駆的取り組み事例の分析（2）～福島県の取り組み～ (担当：小林央美・三浦智子・三戸延聖) 東日本大震災発生時の福島県の児童生徒の安全確保の初動対応・放射能への対処・地域協働での避難所の運営・ライフラインの復興までの対応・支援者支援について分析し、学校や教職員の</p>		

果たす役割や地域協働について考察する。

第6回：災害発生時における学校や教職員の役割と地域協働について
(担当：小林央美・三浦智子・三戸延聖)

第2～3回のこれまでの教職経験からの考察と第4～5回の事例分析を通して捉えた自然災害発生時の学校の役割や地域協働をもとに整理し、自校に当てはめた学校と地域協働での防災と発災時対応の課題について、討議を通して考察する。

第7回：地域防災計画の事例とその背景にある防災論
(担当：小林央美・三浦智子・三戸延聖)

地域防災計画の事例とその背景にある防災論、自然災害の素因となる地域の土地条件や社会的条件の理解をもとに、勤務校の地域条件について考察する。

第8回：勤務校における防災計画（1）～地域（沿岸部）の防災計画の実際と地域リソース～
(担当：小林央美・三浦智子・三戸延聖)

勤務校や特に沿岸部地域における防災計画の実際について調査し、分析評価の結果を発表や討議を通して考察する。

第9回：勤務校における防災計画（2）～地域（山間部）の防災計画の実際と地域リソース～
(担当：小林央美・三浦智子・三戸延聖)

勤務校や特に山間部における防災計画の実際について調査し、分析評価の結果を発表や討議を通して考察する。

第10回：勤務校における防災計画（3）～児童生徒の安全確保～
(担当：小林央美・三浦智子・三戸延聖)

勤務校の地域特性や学校の特性の実際を考慮した、自然災害発生時の児童生徒の安全確保の初動対応・地域協働での避難所の運営に焦点を当てた防災計画の策定を行い、討議を通して考察する。

第11回：勤務校における防災計画（4）～ライフライン～
(担当：小林央美・三浦智子・三戸延聖)

勤務校の地域特性や学校の特性の実際を考慮した、自然災害発生時からライフラインの復興時までの対応や支援者支援について運営に焦点を当てた防災計画の策定を行い、討議を通して考察する。

第12回：勤務校（特別支援学校の想定）における防災計画（5）～防災計画策定～
(担当：小林央美・三浦智子・三戸延聖)

勤務校（又は特別支援学校を想定）における児童生徒の特性を考慮した防災計画の在り方について討議し、その上で防災計画策定の留意点について、具体的に討議を通して考察する。

第13回：勤務校における防災計画（6）～勤務校（小学校）の課題について～
(担当：小林央美・三浦智子・三戸延聖)

第12回までの学習を踏まえ、勤務校（小学校）の課題や、発災時における学校や教職員の役割と地域協働を考慮した防災計画を策定し、理論や背景の根拠を示した発表と全体討議を通して考察する。

第14回：勤務校における防災計画（7）～勤務校（中学校）の課題について～
(担当：小林央美・三浦智子・三戸延聖)

第13回までの学習を踏まえ、勤務校（中学校）の課題や、発災時における学校や教職員の役割と地域協働を考慮した防災計画を策定し、理論や背景の根拠を示した発表と全体討議を通して考察する。

第15回：学校の地域協働と危機管理をめぐる課題と展望

(担当：小林央美・三浦智子・三戸延聖)

授業全体を概観し、学校の地域協働と危機管理についての実践とその課題について考察し、今後の学校現場での実践の在り方について展望する。

テキスト

- ・教育養成系大学保健協議会編(2014)『学校保健ハンドブック』ぎょうせい
- ・宮城県学校保健会(2013)『東日本大震災直後の保健室』
- ・岩手県学校保健会(2013)『2011.3.11 明日へつなぐ とき いのち こころ』
- ・福島県学校保健会(2013)『東日本大震災記録 絆 ふくしまの子らとともに』
- ・数見隆生(2011)『子どもの命は守られたか』かもがわ出版

参考書・参考資料など

各授業の学習テーマに応じて提示する。

学生に対する評価

【評価の基準】

- ①学校の地域協働と危機管理について、発災時の初動対応・地域協働での避難所の運営・ライフラインの復興までの対応・支援者支援について、課題分析や事例分析を通して考察することができる。
- ②学校の地域協働と危機管理について、上記①の考察を活用して、勤務校の課題解決に向けた防災計画の立案(想定)と根拠を示しながら評価できる。
- ③今後の学校の地域協働と危機管理に関する実践について、展望することができる。

【評価の構成】

- ①最終レポート(60%)
- ②事前学習ワークシート(20%)
- ③討論への参加状況など(20%)

授業科目区分	発展科目	開設コース	ミドルリーダー養成コース
授業科目名 (英文名)	【19】教育法規の理論と実践 (theoty and practice of educational law)		
単位	2 単位	必修・選択区分	選択
授業方法	演習	開講年次・学期	1 年次・後期
担当教員	三浦智子, 三上雅生, 古川郁生, 宮崎秀一	担当形態	共同
授業の到達目標	教員, 学校管理職, 教育行政職等に必要となる学校教育に関わる教育法規を知り, 解釈し, 学校教育活動等の場面で必要な物の見方を検討する。		
授業の概要	<p>スクール・コンプライアンス（学校の法令遵守）の担い手として必要な, 以下の3つの力を高める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ①教育現場で生じうる問題について, 法的に考え, 判断し, 行動することができる（法的思考力 リーガル・マインド） ②法令, 判例等の法的情報を探し出し, 正しく読み解くことができる（法的調査力 リーガル・リサーチ） ③スクール・コンプライアンスについて, わかりやすく周知・徹底できる（法的表現力 リーガル・プレゼンテーション） 		
授業計画	<p>第1回：オリエンテーション (担当：三浦智子・古川郁生)</p> <p>「教育法規」に関する基本的な理解を図るとともに, 授業全体の内容を通観し, 受講生の課題意識を深める。また, 授業の進め方についての共通理解を図る。</p> <p>第2回：教育法規の全体構造 (担当：三上雅生・宮崎秀一)</p> <p>憲法や教育基本法等の基本原則を踏まえ, 教員の身分・職務に関する法規, 児童生徒の保健と安全や出席停止・懲戒等に関する法規, 食育や教科書等に関する法規, 教育委員会の組織と仕事等に関する法規等を含めた全体構造について理解する。</p> <p>第3回：教育法規の最新動向 (担当：三浦智子・古川郁生)</p> <p>教職員による非違行為や, 児童生徒の事故非行・虐待・いじめ・自殺等, さらには未履修問題等についてどのように法規が適用されてきたかを考察する。</p> <p>第4回：法令及び判例の読み方・調べ方・活かし方 (担当：三上雅生・宮崎秀一)</p> <p>テキストをもとに, リーガル・マインド, リーガル・リサーチ, リーガル・プレゼンテーションについて考察する。</p> <p>第5回：ケーススタディ（1）～生徒指導～ (担当：三浦智子・三上雅生)</p> <p>生徒指導に関する法規を体系的に学び, 事故非行の未然防止の在り方とともに, 法的処理の進め方について学ぶ。</p> <p>第6回：ケーススタディ（2）～教育内容～ (担当：三浦智子・古川郁生)</p>		

教育内容に関連する法規を体系的に学び、学校教育法に規定されている各学校の目的・目標を踏まえ、学校マネジメントについて考察するとともに、特別支援教育についての規定を理解する。

第7回：ケーススタディ（3）～教員の服務～

(担当：三上雅生・宮崎秀一)

教員の身分・服務に関する法規を体系的に学び、身分上・服務上の義務について考察する。

第8回：ケーススタディ（4）～教員の研修～

(担当：三浦智子・古川郁生)

教職員の研修規定に関連する法規を体系的に学び、研修が法的に義務づけられている背景について考察し、「学び続ける教員」の在り方を探る。

第9回：ケーススタディ（5）～教員の職務・免許・任免・処分～

(担当：三浦智子・三上雅生)

教職員の職務規程や任用、分限・懲戒、免許について学び、具体的な事例に基づいて考察する。

第10回：ケーススタディ（6）～児童生徒の事故～

(担当：三浦智子・古川郁生)

児童生徒の年齢規定・虐待防止・少年法等に関連する法規を体系的に学び、併せて出席停止や懲戒、保健と安全についての理解を深め、児童生徒の健全育成について考察する。

第11回：ケーススタディ（7）～個人情報保護、著作権等～

(担当：三上雅生・宮崎秀一)

個人情報保護や著作権、学校の自己評価と情報提供、備付表簿規定等について学び、スクール・コンプライアンスの担い手としての力を高める。

第12回：講演（1）～法曹関係者～

(担当：三浦智子・古川郁生)

法曹関係者をゲストスピーカーに招いて講演会を開催し、司法の判断に委ねられた教育関係の事例を聞き、講演後に質疑応答を行う。

第13回：講演（2）～報道関係者～

(担当：三上雅生・宮崎秀一)

報道関係者をゲストスピーカーに招いて講演会を開催し、大きく報道された教育関係の事例を聞き、講演後に質疑応答を行う。

第14回：講演（3）～児童相談所職員～

(担当：三浦智子・古川郁生)

児童相談所職員をゲストスピーカーに招いて講演会を開催し、これまでに担当した事例についての紹介を聞き、児童生徒の健全育成と教育法規との係わりについて考察する。講演後に質疑応答を行う。

第15回：成果発表会

(担当：三浦智子・三上雅生・古川郁生・宮崎秀一)

授業全体を通じて、教育法規をめぐる今日的課題を、理論と実践との往還の視点から考察し、今後の学校現場での教育実践の在り方について発表し、展望する。

テキスト

- ・窪田眞二、小川友次（2015）『教育法規便覧 平成28年版』学陽書房
- ・新聞記事も「活きた教材」として積極的に活用する。

参考書・参考資料等

- ・菱村幸彦（1993）『やさしい教育法規の読み方』教育開発研究所
- ・坂田仰（2012）『ケーススタディ教育法規：学校管理職として、学校現場での事件・事故・トラブル

- ル等に働く対応するか』 教育開発研究所
・福本みちよ (2003)『図解でつかむ! 実践教育法規』 小学館
・その他各授業の学習テーマに応じて提示する。

学生に対する評価

【評価の基準】

- ①教育法規について、その全体像・構造・用途などの基本的視座から理解することができる。
- ②今日の学習指導要領や学校における教育法規について、理論的視座から考察することができる。
- ③今後の学校における事件・事故・トラブル等にリーガル・マインドをもって、冷静に対処することができる。

【評価の構成】

- ①最終レポート (60%)
- ②事前学習ワークシート (20%)
- ③討論への参加状況など (20%)

授業科目区分	発展科目	開設コース	ミドルリーダー養成コース
授業科目名 (英文名)	【20】学校教育と教育行政 (School Education and Educational Administration)		
単位	2 単位	必修・選択区分	選択
授業方法	演習	開講年次・学期	1 年次・後期
担当教員	三浦智子, 古川郁生, 三戸延聖	担当形態	共同
授業の到達目標	今後の学校経営や教育改革を支える教育行政の役割と課題について、教育行財政改革の歴史的変遷や今日的状況を踏まえて考えることができる。		
授業の概要	<p>今日に至る教育改革の変遷を時代背景とともに踏まえ、教育行財政がどのように教育改革を推進してきたのかを理解する。その上で、学校経営の改革にとって必要な教育行政の視座とは何であるのか、さまざまな事例分析を通して考察し、今後の学校経営や教育改革を支える教育行政のあるべき姿を探る。</p> <p>研究者と実務家とのチーム・ティーチングにより行うが、理論的な考察については研究者教員が、学校現場や教育行政の実情などの考察については実務家教員が行う。</p>		
授業計画	<p>第1回：オリエンテーション (担当：三浦智子・古川郁生・三戸延聖)</p> <p>教育行財政に関する基本的視座について理解し、講義全体の内容を通観するとともに、受講生の課題意識を深める。また、授業の進め方についても共通理解を図る。</p> <p>第2回：教育行財政の原理と歴史的展開 (担当：三浦智子・古川郁生・三戸延聖)</p> <p>教育行財政の原理についての基本的理解をもとに、日本における教育行財政改革の歴史的変遷について考察する。</p> <p>第3回：今日の教育改革下における教育行財政の課題（1）～国レベル～ (担当：三浦智子・古川郁生・三戸延聖)</p> <p>今日の教育改革の動向を踏まえ、国レベルの教育行財政をめぐる問題を、教育振興基本計画をもとに考察する。</p> <p>第4回：今日の教育改革下における教育行財政の課題（2）～地方レベル～ (担当：三浦智子・古川郁生・三戸延聖)</p> <p>今日の教育改革の動向を踏まえ、県レベルの教育行財政をめぐる問題を中心としながらも、市町村レベルの動向も含めて、考察する。</p> <p>第5回：青森県における教育行財政の実際（1）～教育基本計画の実情と課題～ (担当：三浦智子・古川郁生・三戸延聖)</p> <p>青森県基本計画・青森県教育振興基本計画をもとに、教育基本計画の実情と課題について考察する。</p> <p>第6回：青森県における教育行財政の実際（2）～教育財政の実情と課題～ (担当：三浦智子・古川郁生・三戸延聖)</p> <p>教育予算の概要などをもとに、青森県の教育財政の実情と課題について考察する。</p> <p>第7回：青森県における教育行財政の実際（3）～教育委員会制度の実情と課題～</p>		

(担当：三浦智子・古川郁生・三戸延聖)

教育委員会の組織と業務概要などをもとに、青森県の教育委員会制度の実情と課題について考察する。

第8回：青森県における教育行財政の実際（4）～教育条件整備の実情と課題～

(担当：三浦智子・古川郁生・三戸延聖)

教育委員会事務の点検・評価などをもとに、青森県における教育条件整備の実情と課題について考察する。

第9回：青森県における教育行財政の実際（5）～教育課程行政の実情と課題～

(担当：三浦智子・古川郁生・三戸延聖)

教育振興基本計画などをもとに、青森県の教育課程行政の実情と課題について考察する。

第10回：青森県における教育行財政の実際（6）～指導行政の実情と課題～

(担当：三浦智子・古川郁生・三戸延聖)

県総合学校教育センターや地方教育事務所の指導行政の実際をもとに、青森県の指導行政の実情と課題について考察する。

第11回：青森県における教育行財政の実際（7）～学校の管理と経営の実情と課題～

(担当：三浦智子・古川郁生・三戸延聖)

実際の公立学校における学校経営案、学校評価などをもとに、青森県の学校管理・経営の実情と課題について考察する。

第12回：青森県における教育行財政の実際（8）～教員の採用・研修の実情と課題～

(担当：三浦智子・古川郁生・三戸延聖)

県総合学校教育センターや青森市における教員研修の実態などをもとに、教員の採用・研修の実情と課題について考察する。

第13回：教育行財政の仕組みと実務（1）～事務組織と手続き～

(担当：三浦智子・古川郁生・三戸延聖)

教育委員会における事務組織や文書の作成・保管などの手続きについて基本的理解を行う。

第14回：教育行財政の仕組みと実務（2）～説明責任～

(担当：三浦智子・古川郁生・三戸延聖)

教育委員会の事務の点検・評価や議会答弁などの実際について基本的理解を行う。

第15回：教育行政の課題と展望

(担当：三浦智子・古川郁生・三戸延聖)

教育行政の現状と課題について総括し、今後の教員としての資質能力の到達点と課題について確認する。

テキスト

- ・小川正人、勝野正章（2012）『教育行政と学校経営』放送大学教育振興会

参考書・参考資料等

- ・小川正人（2010）『教育改革のゆくえ』ちくま新書
- ・勝野正章、藤本典裕（2015）『教育行政学 改訂新版』学文社
- ・村上祐介、高橋寛人（2015）『地方教育行政法の改定と教育ガバナンス』三学出版
- ・文部科学省（2014）『諸外国の教育行財政（教育調査）』ジアース教育新社

学生に対する評価

【評価の基準】

- ①教育行財政に関する基本的視座について理解することができる。
- ②教育行財政の基本的視座をもとに、青森県の教育行政の実情と課題について考察することができる。

③教育行財政をめぐる今日的課題との関わりで、今後の教員としての資質能力の到達点と課題を明確にすることができます。

【評価の構成】

- ①最終レポート (60%)
- ②事前学習ワークシート (20%)
- ③討論への参加状況など (20%)

授業科目区分	発展科目	開設コース	ミドルリーダー養成コース
授業科目名 (英文名)	【21】教職員の職能成長 (Professional Development of Teachers)		
単位	2 単位	必修・選択区分	選択
授業方法	演習	開講年次・学期	1 年次・後期
担当教員	中妻雅彦、福島裕敏、吉田美穂、三戸延聖	担当形態	共同
授業の到達目標	教員の職能成長を取り巻く状況とその在り方を踏まえて、「学び続ける教師」を支える体制づくりの意義と課題について考察することができる。		
授業の概要	<p>今日における教員の職能成長を取り巻く状況とその在り方について、様々なレベル（個人・学校・教育行政）、あるいは多様な視点（教育社会学、教師教育、教育行政、ライフコース研究など）から、「学び続ける教師」を支える体制づくりについて考察する。テキストや参考文献をもとにしながら、教員の職能成長についての理論的考察を踏まえ、教員の職能成長をめぐる今日的課題とそれを支える校内研修や行政研修などの体制づくりについて議論する。</p> <p>研究者教員と実務家教員とのチーム・ティーチングにより行うが、理論的な考察については研究者教員が、学校現場や教育行政の現状などの考察については実務家教員が、それぞれ主導する。</p>		
授業計画	<p>第1回：オリエンテーション (担当：中妻雅彦・福島裕敏・吉田美穂・三戸延聖)</p> <p>「教員の職能成長」についての基本的理解をもとに、講義全体の内容を通観するとともに、受講生の課題意識を深める。また、授業の進め方について共通理解を図る。</p> <p>第2回：教員の職能成長の原理的考察（1）～教員の専門性／専門職性～ (担当：中妻雅彦・福島裕敏・吉田美穂・三戸延聖)</p> <p>教員の専門性と専門職性という個人・社会的視点から教員の職能成長をめぐる今日的課題について考察する。</p> <p>第3回：教員の職能成長の原理的考察（2）～ライフコース論～ (担当：中妻雅彦・福島裕敏・吉田美穂・三戸延聖)</p> <p>教員のライフコースという視点から、教員の職能成長をめぐる今日的課題について考察する。</p> <p>第4回：教員の職能成長の原理的考察（3）～教師教育～ (担当：中妻雅彦・福島裕敏・吉田美穂・三戸延聖)</p> <p>教師教育という視点から、教員の職能成長をめぐる今日的課題について考察する。</p> <p>第5回：教員の職能成長の原理的考察（4）～教員研修～ (担当：中妻雅彦・福島裕敏・吉田美穂・三戸延聖)</p> <p>教員研修という視点から、教員の職能成長をめぐる今日的課題について考察する。</p> <p>第6回：教員の職能成長をめぐる政策動向（1）～国レベル～ (担当：中妻雅彦・福島裕敏・吉田美穂・三戸延聖)</p> <p>中央教育審議会答申をもとに、国レベルでの教員の職能成長をめぐる政策動向とその課題について考察する。</p> <p>第7回：教員の職能成長をめぐる政策動向（2）～地方レベル～ (担当：中妻雅彦・福島裕敏・吉田美穂・三戸延聖)</p>		

青森県教育振興計画、青森県総合学校教育センターの事業などをもとに、地方レベルにおける教員の職能成長をめぐる政策動向と課題について考察する。

第8回：教員の職能成長を支える仕組み（1）～研修制度～

(担当：中妻雅彦・福島裕敏・吉田美穂・三戸延聖)

青森県総合学校教育センターにおける研修事業をもとにしながら、研修制度の企画・実施などについて実践的に学ぶ。

第9回：教員の職能成長を支える仕組み（2）～学校経営～

(担当：中妻雅彦・福島裕敏・吉田美穂・三戸延聖)

学校経営案などをもとに、学校全体として教員の職能成長を支える仕組みについて、実践的に学ぶ。

第10回：教員の職能成長を支える仕組み（3）～校内研修～

(担当：中妻雅彦・福島裕敏・吉田美穂・三戸延聖)

校内研修の実例をもとに、校内研修を通じた教員の職能成長を支える仕組みについて、実践的に学ぶ。

第11回：教員の職能成長を支える仕組み（4）～同僚関係～

(担当：中妻雅彦・福島裕敏・吉田美穂・三戸延聖)

学校における同僚性向上の取り組みの実例を通じて、同僚関係を通じた教員の職能成長を支える仕組みについて実践的に学ぶ。

第12回：教員の職能成長を支える仕組み（5）～学外機関との連携～

(担当：中妻雅彦・福島裕敏・吉田美穂・三戸延聖)

学外機関との連携に関する事例をもとに、学外機関との連携を通じた教員の職能成長を支える仕組みについて実践的に学ぶ。

第13回：教員の職能成長を拓く（1）～省察～

(担当：中妻雅彦・福島裕敏・吉田美穂・三戸延聖)

教員の職能成長を支える省察の具体的な在り方について、受講生の課題に即して実践的に学ぶ。

第14回：教員の職能成長を拓く（2）～組織体制づくり～

(担当：中妻雅彦・福島裕敏・吉田美穂・三戸延聖)

教員の職能成長を支える組織体制づくりの具体的な在り方について、受講生の課題に即して実践的に学ぶ。

第15回：教員の職能成長の課題と展望

(担当：中妻雅彦・福島裕敏・吉田美穂・三戸延聖)

教員の職能成長をめぐる現状と課題について総括し、今後の教員としての資質能力の到達点と課題について確認する。

テキスト

- ・山崎準二、榎原禎宏、辻野けんま（2012）『講座 現代学校教育の高度化5 「考える教師」』学文社

参考書・参考資料等

- ・市川昭午（2015）『教職研修の理論と構造』教育開発研究所
- ・上条晴夫（2015）『教師教育』さくら社
- ・北神正行、木原俊行、佐野享子（2010）『講座 現代学校教育の高度化24 学校改善と校内研修の設計』学文社
- ・佐藤学（2015）『専門家として教師を育てる』岩波書店
- ・佐藤学（2015）『学び合う教師・育て合う学校』小学館
- ・立田慶裕（2014）『キー・コンピテンシーの実践』明石書店

学生に対する評価

【評価の基準】

- ①教員の職能成長に関する基本的原理について、理解できる。
- ②教員の職制成長についての基本的原理をもとに、その具体的仕組みの在り方について考察することができる。
- ③教員の職能成長に関する自らの到達点と課題について、考察することができる。

【評価の構成】

- ①最終レポート (60%)
- ②事前学習ワークシート (20%)
- ③討論への参加状況など (20%)

授業科目区分	発展科目	開設コース	ミドルリーダー養成コース
授業科目名 (英文名)	【22】学校保健のマネジメント (Management of School Health)		
単位	2 単位	必修・選択区分	選択
授業方法	演習	開講年次・学期	1 年次・後期
担当教員	小林央美, 三浦智子, 古川郁生, 小寺弘幸	担当形態	共同
授業の到達目標	<p>学校保健の推進のための学校保健計画の立案と実践に向けた方策及び学校保健活動を円滑に行うための課題解決の手立ての検討を通して、学校経営的側面及び実務的側面から学校保健のマネジメント機能を高めるためのミドルリーダーの在り方について考察できる。</p>		
授業の概要	<p>学校保健計画を立案するとともに、その実施の推進を行う上で必要な制度・関係法規等について理解を深め、その上で、実践に向けた具体的な方策を学ぶ。また、学校保健活動を円滑に行うため、教諭、養護教諭、栄養教諭のみならず地域の専門家等との協働など、学校全体を見据えた体制や条件整備、校内研修を含めた課題解決の在り方について考察をする。これらを通じて、学校保健のマネジメント機能を高めるための管理職と若手教員を繋ぐミドルリーダーの在り方について学校経営的側面及び実務的側面から考察する。</p>		
授業計画	<p>第1回：オリエンテーション (担当：小林央美・三浦智子・古川郁生・小寺弘幸) 「学校保健のマネジメント」に関する基本的理解を図るとともに、講義全体の内容を通観し、受講生の課題意識を深める。また授業の進め方についての共通理解を図る。</p> <p>第2回：学校保健の基本と現状（1）目的・内容・行政 (担当：小林央美・三浦智子・古川郁生・小寺弘幸) 学校保健の目的と内容・児童生徒の健康課題と学校保健活動の歴史的変遷・学校保健の行政と制度について理解を深め、学校保健の動向について考察する。</p> <p>第3回：学校保健の基本と現状（2）学校保健の組織と役割 (担当：小林央美・三浦智子・古川郁生・小寺弘幸) 学校保健活動組織として、管理職、保健主事、養護教諭、学級担任、保健体育科教諭、栄養教諭等、常勤職員の構成と役割について理解するとともに、学校医、学校歯科医、学校薬剤師、管理栄養士等、地域の専門家との連携について理解を深め、円滑な活動をするための組織体制について考察する。</p> <p>第4回：学校保健計画の現状と課題 (担当：小林央美・三浦智子・古川郁生・小寺弘幸) 学校保健計画の立案の意義や策定の基本的な知識について理解し、自校の現状と先駆的取り組みの事例の分析をもとに現状と課題について検討することにより、学校保健計画の策定や実践におけるミドルリーダーとしての在り方について考察する。</p> <p>第5回：学校保健計画の策定（1）集団及び個別の健康課題把握 (担当：小林央美・三浦智子・古川郁生・小寺弘幸) 学校保健計画の策定に向けた集団及び個別の健康課題把握と健康評価を目的に、健康観察・健康診断・保健調査等の具体的な活動や保護者のニーズについて理解を深める。</p>		

第6回：学校保健計画の策定（2）目標設定

(担当：小林央美・三浦智子・古川郁生・小寺弘幸)

学校保健計画の策定に向け、集団及び個別の健康課題把握と健康評価結果に基づいた目標設定について、具体的な事例を通して考察する。

第7回：学校保健計画の実践に向けた具体的方策（1）保健学習

(担当：小林央美、古川郁生、小寺弘幸)

学校保健計画の実践に向けた保健学習について、自校の現状（学習指導要領と指導計画・保健学習展開の現状や指導の工夫等）と先駆的取り組みの事例の分析をもとに、ディスカッションを通じて具体的方策を検討する。

第8回：学校保健計画の実践に向けた具体的方策（2）保健指導

(担当：小林央美、古川郁生、小寺弘幸)

学校保健計画の実践に向けた保健指導について、自校の現状（保健指導の実施の機会・保健学習との有機的連携・地域資源の活用等）と先駆的取り組みの事例の分析をもとに、ディスカッションを通じて具体的方策を検討する。

第9回：学校保健計画の実践に向けた具体的方策（3）学校環境及び環境衛生検査

(担当：小林央美、古川郁生、小寺弘幸)

学校保健計画の実践に向けた学校環境及び環境衛生検査について、自校の現状（学校環境の整備・環境衛生検査の状況・学校薬剤師との連携等）と先駆的取り組みの事例の分析をもとに、ディスカッションを通じて具体的方策を検討する。

第10回：学校保健計画の実践に向けた具体的方策（4）学校保健委員会

(担当：小林央美・三浦智子・古川郁生・小寺弘幸)

学校保健計画の実践に向けた学校保健委員会の学校内での有効な活動や地域との連携による活動について、自校の現状からシミュレーションを行った後、ディスカッションを通じて具体的方策を検討する。

第11回：学校保健計画の実践に向けた具体的方策（5）食に関する指導と栄養教育

(担当：小林央美、古川郁生、小寺弘幸)

栄養教諭をゲストスピーカーとして招き、学校保健計画の実践に向けた食に関する指導や栄養教育について理解を深め、自校の現状と先駆的取り組みの事例の分析をもとに、ディスカッションを通じて食に関する指導と栄養教育の具体的方策を検討する。

第12回：学校保健計画の実践に向けた具体的方策（6）学校給食

(担当：小林央美、古川郁生、小寺弘幸)

管理栄養士をゲストスピーカーとして招き、学校保健計画の実践に向けた学校給食の意義や食育との関連について理解し、栄養教諭等との連携による学校給食指導の充実について考察する。

第13回：学校保健計画の実践に向けた具体的方策（7）学校感染症の予防

(担当：小林央美、古川郁生、小寺弘幸)

学校保健計画の実践に向けた学校感染症の予防とその活動について、先駆的取り組みの事例の分析をもとに現状と課題について整理し、ディスカッションを通じて具体的方策を検討する。

第14回：学校保健計画の実践における評価と改善

(担当：小林央美・三浦智子・古川郁生・小寺弘幸)

学校保健計画の実践による集団及び個人の健康状況の変容等、学校保健活動の評価について現状と課題について整理し、ミドルリーダーの在り方から学校保健のマネジメントについて考察する。

第15回：学校保健活動をマネジメントするミドルリーダーの展望

(担当：小林央美・三浦智子・古川郁生・小寺弘幸)

学校保健活動の計画立案・実施・評価・改善の現状と課題を見据えて、今後の学校保健活動や、ミドルリーダーとしての展望について考察する。

テキスト

- ・教員養成系大学保健協議会編(2007)『学校保健ハンドブック第6次改訂』ぎょうせい
- ・大澤清二他 (2006)『学校保健の世界』杏林書院
- ・金井壽宏, 楠見孝編 (2012)『学校保健安全法に対応した改訂学校保健』東山書房
- ・大谷尚子 (2009)『学校保健マニュアル改訂8版』南山堂
- ・日本教育保健学会編 (2007)『教師のための教育保健学』東山書房

参考書・参考資料等

- ・数見隆生 (1994)『教育保健学の構図—「教育としての学校保健」の進展のために』大修館書房
- ・北神正行, 高橋香代 (2007)『学校組織マネジメントとミドルリーダー』学文社
- ・その他各授業の学習テーマに応じて提示する。

学生に対する評価

【評価の基準】

- ①学校保健計画の立案並びに実践に向けた方策について理解し考察することができる。
- ②学校保健活動を円滑に行うための課題解決の手立てについて、理解し考察することができる。
- ③学校保健のマネジメント機能を高めるためのミドルリーダーの在り方について学校経営的側面及び実務的側面から考察することができる。

【評価の構成】

- ①最終レポート (60%)
- ②各テーマについての小レポート (2~15回) (20%)
- ③討論への参加状況など (20%)

授業科目区分	発展科目	開設コース	ミドルリーダー養成コース
授業科目名 (英文名)	【23】学校安全と事故防止 (School safety and Accident prevention)		
単位	2 単位	必修・選択区分	選択
授業方法	演習	開講年次・学期	1 年次・後期
担当教員	小林央美, 三戸延聖 田中完, 栗林理人	担当形態	共同
授業の到達目標	<p>重大な学校事故等の児童生徒の生命の危険にかかる現代的教育課題の特性を踏まえた、危機対応やその予防的対応の在り方について理論的・実践的に考察できる。さらに、学校安全と事故防止機能を高めるために、ミドルリーダーとして学校や専門機関、地域を巻き込んだ解決への取り組み、校内研修の在り方についても考察できる。</p>		
授業の概要	<p>食物アレルギーの問題・慢性疾患・薬物乱用・性の逸脱行為と妊娠やデートDV・自傷行為・自殺企図・重大な学校事故等の児童生徒の生命の危険にかかる現代的教育課題の状況とその背景や、その課題特性について理解を深め考察する。また、それらの課題特性を踏まえた危機対応やその予防的対応の在り方について、学校の教育機能と医学的対応の視点等について理論的・実践的に考察する。その上で、学校全体の学校安全と事故防止機能を高めるために、ミドルリーダーとしての学校や専門機関、地域を巻き込んだ解決への取り組み、校内研修の在り方について議論する。</p>		
授業計画	<p>第1回：オリエンテーション (担当：小林央美・三戸延聖) 「学校安全と事故防止」に関する基本的理解を図るとともに、講義全体の内容を通観し、受講生の課題意識を深める。また授業の進め方についての共通理解を図る。</p> <p>第2回：学校における死亡事故・重大事故の現状と課題 (担当：小林央美・三戸延聖) 学校における死亡事故・重大事故の状況と事例(判例)の両面から現状と今日的課題について理解し、事故防止機能を高めるためのミドルリーダーとしての在り方について考察する。</p> <p>第3回：学校における死亡事故・重大事故における心のケア (担当：小林央美・三戸延聖・栗林理人) 学校における重大事故に関する先駆的実践事例の分析をもとに、急性ストレス反応・PTSD等への学校教員の取り組みを理解し、心のケアに関するミドルリーダーとしての在り方について考察する。</p> <p>第4回：食物アレルギー・慢性疾患を持つ児童生徒への危機管理（1）～現状と課題～ (担当：小林央美・三戸延聖) 食物アレルギー・慢性疾患の罹患率とその内容の推移と事例の両面から、学校教育における現状と今日的課題について理解し、課題解決に向けた学校体制、学級と保健室における安全教育の在り方について検討することにより、ミドルリーダーとしての役割を考察する。</p> <p>第5回：食物アレルギー・慢性疾患を持つ児童生徒への危機管理（2）～事例分析と対応～ (担当：小林央美・三戸延聖・田中完) 食物アレルギーや慢性疾患を持つ児童生徒の事故事例の医学的な見地からの分析を通して、学校安全と事故防止体制の取り組みについて理解し、危機管理と対応について考察する。</p> <p>第6回：食物アレルギー・慢性疾患を持つ児童生徒への危機管理（3）～先駆的な実践事例の分析</p>		

～

(担当：小林央美・三戸延聖・田中完)

食物アレルギー・慢性疾患の課題解決に関する先駆的実践事例の分析を通して、学校が専門機関や地域と協働で行う危機管理と事故防止の取り組みについて考察する。

第7回：性に関する問題への危機管理（1）～現状と課題～

(担当：小林央美・三戸延聖)

児童生徒の性の問題について、心身の健康の側面から現状と課題を把握するとともに、ミドルリーダーとしての危機管理と事故防止の意識を高める。

第8回：性に関する問題への危機管理（2）～妊娠・デートDV等の事例検討～

(担当：小林央美・三戸延聖)

妊娠・デートDV等の事例分析を通して、学校における危機管理と予防的指導の取り組みや保健室における初期段階の予防と発見について理解し、危機管理とその対応について考察する。

第9回：薬物乱用への危機管理～現状と課題・対応～

(担当：小林央美・三戸延聖)

当該課題に関する高い見識をもつ地域の専門家をゲストスピーカーとして招き、青少年の薬物乱用の現状について実態を把握し、学校における危機管理と予防的指導について考察する。

第10回：自傷行為・自殺や自殺企図（1）～現状と課題・その対応～

(担当：小林央美・三戸延聖)

児童生徒の自傷行為や自殺・自殺企図の問題についての現状と今日的課題を理解し、ミドルリーダーとしての対応の在り方について考察する。

第11回：自傷行為・自殺や自殺企図（2）～事故防止に向けた保護者・医療機関との連携～

(担当：小林央美・三戸延聖・栗林理人)

児童生徒の自傷行為や自殺・自殺企図の事故防止に向けた保護者・医療機関との連携について理解を深め、学校安全と事故防止及び予防的指導の取り組みについて考察する。

第12回：自傷行為・自殺企図に対する事故防止機能を高める校内研修～危機介入の適時性～

(担当：小林央美・三戸延聖)

保健室での事例等とともに、自傷行為や自殺企図への危機介入が必要な状況の早期発見・対応について理解を深め、学校安全と事故防止機能を高めるための校内研修について考察する。

第13回：学校全体の事故防止と予防的機能を高める校内研修（1）～緊急時の初期対応～

(担当：小林央美・三戸延聖)

学校における重大事故・食物アレルギー・慢性疾患による急性症状等の事故の初期対応に必要な基礎的知識を習得するとともに、事故防止と予防的機能を高めるための校内研修の企画・運営について考察する。

第14回：学校全体の事故防止と予防的機能を高める校内研修（2）～法的解釈と説明責任～

(担当：小林央美・三戸延聖)

当該課題に関する高い見識をもつ地域の専門家をゲストスピーカーとして招き、学校における救急処置活動について、判例等をもとに学校における事故防止・救急処置活動の法的根拠や説明責任の意義について理解し、ミドルリーダーとしての対応の在り方について考察する。

第15回：学校安全におけるミドルリーダーの展望

(担当：小林央美・三戸延聖・田中完・栗林理人)

食物アレルギーの問題・慢性疾患・薬物乱用・性の逸脱行為と妊娠やデートDV・自傷行為・自殺企図・重大な学校事故等の特性を踏まえた課題解決に向け、学校安全におけるミドルリーダーとしての展望を考察する。

テキスト

- ・三木とみ子編(2014)『学校現場のアレルギー対応マニュアル』少年写真新聞社
- ・小俣貴嗣他 (2006)『発達科学－「発達」への学際的アプローチ』ブレーン書房
- ・養護教諭ヒヤリ・ハット研究会編 (2015)『事例から学ぶ養護教諭のヒヤリ・ハット』ぎょうせい
- ・菅原哲朗・入澤充 (2012~2015) 雑誌 健康教室『連載 養護教諭がかかわる裁判や判例／養護教諭の職務と法的責任』東山書房
- ・田原圭子編 (2015)『問わずにはいられない学校事故・事件の現場から』あうん社
- ・淵上克義, 佐藤博志 (2007)『ミドルリーダーの原点』金子書房

参考書・参考資料等

- ・河野龍太郎 (2014)『医療におけるヒューマンエラー』医学書院
- ・大谷尚子編 (2009)『新養護学概論』東山書房
- ・斎藤環 (2015)『承認をめぐる病』日本評論社
- ・松本俊彦編 (2012)『中高生のためのメンタル系サバイバルガイド』日本評論社
- ・北神正行, 高橋香代 (2007)『学校組織マネジメントとミドルリーダー』学文社
- ・その他各授業の学習テーマに応じて提示する。

学生に対する評価

【評価の基準】

- ①重大な学校事故等の児童生徒の生命の危険にかかわる現代的教育課題の解決について理解し考察することができる。
- ②それぞれの課題特性を踏まえた危機対応やその予防的対応の在り方について理論的・実践的に考察することができる。
- ③学校全体の学校安全と事故防止機能を高めるための健康・安全教育のミドルリーダーの在り方について考察することができる。

【評価の構成】

- ①最終レポート (60%)
- ②各テーマについての小レポート (2~15回) (20%)
- ③討論への参加状況など (20%)

授業科目区分	発展科目	開設コース	ミドルリーダー養成コース
授業科目名 (英文名)	【24】養護実践課題解決研究（発展） (Research on Yogo Practice／Advanced)		
単位	2 単位	必修・選択区分	選択
授業方法	演習	開講年次・学期	1 年次・後期
担当教員	小林央美, 三上雅生, 敦川真樹, 吉中淳, 栗林理人	担当形態	共同
授業の到達目標 心身の健康に関する現代的課題について、地域の専門家との連携の視点から自らの教職経験に基づいて深化させる中で、ミドルリーダーとして協働的対応の役割を具体的な事例を通して理解するとともに、多様な視点から理論及び実践的対応について考察することができる。			
授業の概要 「養護実践課題解決研究」での学習を踏まえ、心身の健康に関する現代的課題について、地域を巻き込んだ解決への取り組みの知見を自らの教職経験に基づいて深化させる。その際、当該課題について高い見識を有する地域の専門家との連携の視点から、ミドルリーダーとして協働的対応の役割を具体的な事例を通して実務的に学ぶ。また、学校の教育機能と児童生徒の社会性、発育発達の特性、医学的視点等、多様な視点から理論及び実践的対応について考察する。			
授業計画 第1回：オリエンテーション (担当：小林央美・三上雅生・敦川真樹) いじめ・不登校・児童虐待・性的マイノリティ等の心身の健康に関する現代的課題の解決に向けた、地域を巻き込んだ解決の在り方について、これまでの教職経験を、これから教職生活を見据えて振り返るとともに、本授業の進め方の共通理解を図る。			
第2回：学校におけるいじめの現状と課題 (担当：小林央美・三上雅生・敦川真樹) 当該課題に関する高い見識をもつ地域の専門家をゲストスピーカーとして招き、学校におけるいじめの現状と今日的課題(SNS含む)について理解し、その上で、課題解決に向けた実態把握や現状理解の視点と方法や取り組みの意義と方向性について、ミドルリーダーの役割の視点から考察する。			
第3回：学校の特性といじめの構造・身体的症状から見た課題解決の在り方 (担当：小林央美・三上雅生・敦川真樹・吉中淳・栗林理人) 学校におけるいじめの構造や学校における解決の困難性の要因、いじめによる身体的影響について医学的観点も踏まえて理解し、課題解決に向けたミドルリーダーの役割について考察する。			
第4回：いじめ問題における協働的対応についてのミドルリーダーの役割 (担当：小林央美・三上雅生・敦川真樹・吉中淳・栗林理人) 学校や地域・専門機関との連携・協働によりいじめの課題解決にあたった先駆的実践事例の分析をもとに、学校の教員の役割、教員以外の専門スタッフの役割、関連機関との連携について考察し、課題解決におけるミドルリーダーの役割を考察する。			
第5回：不登校・保健室登校の現状と課題 (担当：小林央美・三上雅生・敦川真樹・吉中淳) 学校における不登校・保健室登校の現状と課題について事例を通して理解し、その上で、課題			

解決に向けたミドルリーダーの役割について考察する。

第6回：不登校・保健室登校における協働的対応についてのミドルリーダーの役割
(担当：小林央美・三上雅生・敦川真樹・栗林理人)

学校や地域・専門機関との連携・協働により不登校・保健室登校の課題解決にあたった先駆的事例の分析をもとに、教員の役割、教員以外の専門スタッフの役割を理解し、その上で、校内連携や専門機関との連携を生かしたミドルリーダーの役割について考察する。

第7回：児童虐待の現状と課題

(担当：小林央美・三上雅生・敦川真樹)

当該課題に関する高い見識をもつ地域の専門家をゲストスピーカーとして招き、児童虐待の現状と課題について家族機能等をふまえて理解し、課題解決に向けた学校での実態把握や早期発見の機会と方法、取り組みの意義と方向性について、ミドルリーダーの役割の視点から考察する。

第8回：児童虐待による児童生徒の成長への影響から見た課題解決の在り方

(担当：小林央美・三上雅生・敦川真樹・吉中淳・栗林理人)

児童虐待による身体的影響や心理的影響、保護者や養育者との相談的アプローチの困難性等について教育学的・心理学的・医学的観点から理解し、その上で、保護者も含めた相談的対応について考察する。

第9回：児童虐待問題における協働的対応についてのミドルリーダーの役割

(担当：小林央美・三上雅生・敦川真樹・吉中淳・栗林理人)

当該課題に関する高い見識をもつ地域の専門家をゲストスピーカーとして招き、学校と地域・児童相談所等の専門機関との連携・協働により課題解決に至った先駆的事例の分析をもとに、教員・教員以外の専門スタッフの役割等について理解し、その上で、協働的対応による課題解決に向けたミドルリーダーの役割について考察する。

第10回：学校における性的マイノリティの現状と課題

(担当：小林央美・三上雅生・敦川真樹)

学校における性的マイノリティの実態と学校生活における困難感の現状について理解し、解決に向けた取り組みや方法について、ミドルリーダーの役割の視点から考察する。

第11回：学校における性的マイノリティへの協働的対応についてのミドルリーダーの役割

(担当：小林央美・三上雅生・敦川真樹・吉中淳・栗林理人)

学校における性的マイノリティの先駆的事例の分析をもとに、教員・教員以外の専門スタッフの役割について考察し、その上で、課題解決におけるミドルリーダーの役割を考察する。

第12回：学校の協働的対応機能を高める校内研修（1）～事例検討の持ち方～

(担当：小林央美・三上雅生・敦川真樹・吉中淳)

いじめ・不登校等の「事例検討会の運営・事例の提案方法等」について理解し、その上で、地域・専門機関との連携を含めた学校全体の協働的対応機能を高めるための校内研修の企画・運営について、ミドルリーダーの役割の視点から考察する。

第13回：学校の協働的対応機能を高める校内研修（2）～保護者対応の在り方～

(担当：小林央美・三上雅生・敦川真樹)

いじめ・不登校・児童虐待・性的マイノリティ等の課題解決に向け、保護者対応の在り方を中心とした校内研修の企画・運営について、ミドルリーダーの役割の視点から考察する。

第14回：学校の協働的対応機能を高める校内研修（3）～支援者支援と同僚性／専門機関との連携～

(担当：小林央美・三上雅生・敦川真樹・吉中淳)

いじめ・不登校・児童虐待・性的マイノリティ等の課題解決に向け、専門機関からの支援者支援や同僚性について理解し、学校全体の協働的対応機能を高めるための校内研修の企画・運営に

について、ミドルリーダーの役割の視点から考察する。

第15回：学校全体の協働的対応機能を高めるためのミドルリーダーの展望

(担当：小林央美・三上雅生・敦川真樹・吉中淳・栗林理人)

いじめ・不登校・児童虐待・性的マイノリティ等の特性を踏まえた課題解決に向け、地域・専門機関との連携を含めた学校全体の協働的対応機能を高めるためのミドルリーダーとしての展望を考察する。

テキスト

- ・森田洋司(2005)『「不登校」現象の社会学』学文社
- ・ヘネシー・澄子(2004)『子を愛せない母 母を拒否する子』学研
- ・子どもの虐待防止ネットワークあいち編(2001)『防げなかつた虐待死』ほんの森出版
- ・森田ゆり(2001)『多様性トレーニングガイド』解放出版社
- ・石隈利紀他(2005)『チーム援助で子どもとのかかわりがかかる』ほんの森出版
- ・早稲田大学総合教育研究所(2015)『LGBT問題と教育現場』学文社

参考書・参考資料等

- ・高橋和巳(2014)『消えたい 虐待された人の生き方から知る幸せ』筑摩書房
- ・三木とみ子編(2013)『養護教諭が行う健康相談・健康相談活動の理論と実際』ぎょうせい
- ・その他各授業の学習テーマに応じて提示する。

学生に対する評価

【評価の基準】

- ①心身の健康に関する現代的課題について、地域の専門家との連携の視点から自らの教職経験に基づいて考察することができる。
- ②ミドルリーダーとして協働的対応の役割を具体的な事例を通して理解することができる。
- ③学校の教育機能と児童生徒の社会性、発育発達の特性、医学的視点等の視点から理論及び実践的対応について考察することができる。

【評価の構成】

- ①最終レポート(60%)
- ②各テーマについての小レポート(2~15回)(20%)
- ③討論への参加状況など(20%)

授業科目区分	発展科目	開設コース	教育実践開発コース
授業科目名 (英文名)	【25】地域教育課題研究（授業づくり） (Research on Regional Tasks of Education (Planning a lesson))		
単位	2 単位	必修・選択区分	選択
授業方法	演習	開講年次・学期	2 年次・後期
担当教員	中野博之, 瀧本壽史, 三上雅生, 小寺弘幸, 篠塚明彦	担当形態	共同
授業の到達目 「あおもりの教育Ⅰ（環境）」及び「あおもりの教育Ⅱ（健康）」を踏まえ、地域課題の解決にむけた実際の授業づくりに取り組むとともに、実践及び省察を通して成果と課題を探ることができる。			
授業の概要 青森県の課題を扱った「あおもりの教育Ⅰ（環境）」及び「あおもりの教育Ⅱ（健康）」での学習を基に、青森県が抱える「健康教育」「環境教育」についての教育課題の解決の一助となる授業の在り方について、具体的な授業づくりや授業実践を通して考えていく。 具体的には、各校種毎のグループに分かれて学習指導案作成に取り組み、模擬授業を行う。その上で、附属学校での授業実践及び省察を行い、その教材及び授業の成果と課題を明らかにする。省察については、「教育実践研究法（教育実践研究Ⅰ）」での学習を生かして、子どもの活動の事実、授業での作成物を収集し、事実に基づいて省察を行うようとする。			
授業計画 第1回：オリエンテーション (担当：中野博之・瀧本壽史・三上雅生・小寺弘幸・篠塚明彦) 本講義の目的の確認と15回の授業内容の確認、授業の形式について確認をする。			
第2回：健康教育についての授業づくり～指導案づくり～ (担当：中野博之・三上雅生・小寺弘幸) 健康教育についての学びを復習し、校種毎のグループに分かれて指導案づくりを行う。			
第3回：健康教育についての授業づくり～模擬授業による検討～ (担当：中野博之・三上雅生・小寺弘幸) 校種毎のグループに分かれて指導案づくりを行う。また、模擬授業を行い、院生同士で授業について協議を行う。			
第4回：附属学校における「健康教育」実践授業（1）～附属小学校での授業実践と省察（上学年）～ (担当：中野博之・小寺弘幸) 附属小学校において授業実践を行い、授業についての省察を行う。			
第5回：附属学校における「健康教育」実践授業（2）～附属小学校での授業実践と省察（下学年）～ (担当：中野博之・小寺弘幸) 附属小学校において授業実践を行い、授業についての省察を行う。			
第6回：附属学校における「健康教育」実践授業（3）～附属中学校での授業実践と省察（上学年）～ (担当：中野博之・三上雅生) 附属中学校において授業実践を行い、授業についての省察を行う。			

第7回：附属学校における「健康教育」実践授業（4）～附属中学校での授業実践と省察(下学年)

～

(担当：中野博之・三上雅生)

附属中学校において授業実践を行い、授業についての省察を行う。

第8回：健康教育における授業づくりの総括

(担当：中野博之・三上雅生・小寺弘幸)

健康教育についての授業実践の総括を行い、今後の課題や成果を確認する。

第9回：環境教育についての授業づくり（1）～指導案づくり～

(担当：瀧本壽史・篠塚明彦)

環境教育についての学びを復習し、校種毎のグループに分かれて指導案づくりを行う。

第10回：環境教育についての授業づくり（2）～模擬授業と協議～

(担当：瀧本壽史・篠塚明彦)

校種毎のグループに分かれて指導案づくりを行う。また、模擬授業を行って、院生同士で授業について協議を行う。

第11回：附属学校における「環境教育」実践授業（1）～附属小学校での授業実践と省察(上學年)

～

(担当：瀧本壽史・篠塚明彦)

附属小学校において授業実践を行い、授業についての省察を行う。

第12回：附属学校における「環境教育」実践授業（2）～附属小学校での授業実践と省察(下学年)

～

(担当：瀧本壽史・篠塚明彦)

附属小学校において授業実践を行い、授業についての省察を行う。

第13回：附属学校における「環境教育」実践授業（3）～附属中学校での授業実践と省察(上學年)

～

(担当：三上雅生・篠塚明彦)

附属中学校において授業実践を行い、授業についての省察を行う。

第14回：附属学校における「環境教育」実践授業（4）～附属中学校での授業実践と省察(下学年)

～

(担当：三上雅生・篠塚明彦)

附属中学校において授業実践を行い、授業についての省察を行う。

第15回：環境教育における授業づくりの総括

(担当：瀧本壽史・三上雅生・篠塚明彦)

環境教育についての授業実践の総括を行い、今後の課題や成果を確認する。

テキスト

各授業の学習テーマに応じて提示する。

参考書・参考資料等

各授業の学習テーマに応じて提示する。

学生に対する評価

【評価の基準】

青森県が抱える教育課題について、その解決に向けて取り組むという視点から各院生がどのように関わればよいのかを理解することができる。

【評価の構成】

①最終レポート（40%）

- ②授業づくりでの学習指導案、作成した学級経営案、実践授業への取り組み（40%）
- ③授業での協議会や討論への参加状況など（20%）

授業科目区分	発展科目	開設コース	教育実践開発コース
授業科目名 (英文名)	【26】教科領域の理論と実践 (Theory of the subject area and practice)		
単位	2 単位	必修・選択区分	選択
授業方法	演習	開講年次・学期	平成30年度入学者 1年次・後期 平成29年度入学者 2年次・後期
担当教員	中野博之, 三上雅生, 成田頼昭	担当形態	共同
授業の到達目標	<p>学校フィールド実習で行う実践授業のための教材研究を協働で行い、指導案を作成したり、実習の進め方・実習結果の検証方法について理解することができる。また、作成した指導案及び教材開発をもとに模擬授業を実施し、そこでの事象に対して検討することができる。</p>		
授業の概要	<p>学校における教職経験を十分に持たない受講者を対象とし、学校フィールド実習で行う実践授業のための教材研究を協働で行ったり、授業方法について協働で検討したりすることを通して、実習の進め方・実習結果の検証方法等について、具体的な事例に基づき考察する。また、模擬授業とその授業に対する検証を行い、「授業づくり－実践－省察検証－フィードバック」のサイクルを今後よりよい授業づくりに生かすことができるようとする。</p> <p>研究者教員と実務家教員とのチーム・ティーチングにより、演習を進めることとする。</p>		
授業計画	<p>第1回：オリエンテーション (担当：中野博之・三上雅生・成田頼昭) 「教科領域の理論と実践」に関する基本的理解を図るとともに、講義全体の内容を通観し、受講生の課題意識を深める。また、授業の進め方についての共通理解を図る。</p> <p>第2回：教科領域の理論（1）～教材研究の仕方(教材の本質)～ (担当：中野博之・三上雅生・成田頼昭) 各自が「学校フィールド実習」で行う授業を想定し、教材の本質は何かを考察する。</p> <p>第3回：教科領域の理論（2）～教材研究の仕方(教材の系統性)～ (担当：中野博之・三上雅生・成田頼昭) 各自が「学校フィールド実習」で行う授業を想定し、教材の系統性について考察する。</p> <p>第4回：教科領域の理論（3）～教材研究の仕方(単元計画作成)～ (担当：中野博之・三上雅生・成田頼昭) 各自が「学校フィールド実習」で行う授業を想定し、単元の在り方を理解し、単元計画作成について考察する。</p> <p>第5回：学習指導案（1）～授業づくり(単元案に基づいて)～ (担当：中野博之・三上雅生・成田頼昭) 各自が「学校フィールド実習」で行う授業を想定し、単元計画を基に各授業の在り方について考察する。</p> <p>第6回：学習指導案（2）～本時案の作り方(教材観の捉え方)～ (担当：中野博之・三上雅生・成田頼昭) 各自が「学校フィールド実習」で行う授業を想定し、学習指導案の「教材観」の捉え方と書き方について理解し、実際に書いてみる。</p>		

第7回：学習指導案（3）～本時案の作り方（子供観の捉え方）～

(担当：中野博之・三上雅生・成田頼昭)

各自が「学校フィールド実習」で行う授業を想定し、学習指導案の「子供観」の捉え方と書き方について理解し、実際に書いてみる。

第8回：学習指導案（4）～本時案の作り方（目標と指導観の捉え方）～

(担当：中野博之・三上雅生・成田頼昭)

各自が「学校フィールド実習」で行う授業を想定し、学習指導案の「目標」と「指導観」の捉え方と書き方について理解し、実際に書いてみる。

第9回：学習指導案（5）～本時案の作り方（展開案の書き方）～

(担当：中野博之・三上雅生・成田頼昭)

各自が「学校フィールド実習」で行う授業を想定し、学習指導案の「展開案」の捉え方と書き方について理解し、実際に書いてみる。

第10回：学習指導案（6）～本時案の作り方（評価の書き方）～

(担当：中野博之・三上雅生・成田頼昭)

各自が「学校フィールド実習」で行う授業を想定し、学習指導案の「評価」の捉え方と書き方について理解し、実際に書いてみる。

第11回：授業の評価（1）～実践記録のとり方～

(担当：中野博之・三上雅生・成田頼昭)

各自が「学校フィールド実習」で行う授業を想定し、実践記録のとり方について、その意味と方法について理解する。

第12回：授業の評価（2）～実践授業の検証～

(担当：中野博之・三上雅生・成田頼昭)

各自が「学校フィールド実習」で行う授業を想定し、授業の目標が達成できたかどうかの検証の仕方について、その意味と方法について理解する。

第13回：教材の開発（1）～教材開発とは～

(担当：中野博之・三上雅生・成田頼昭)

各自が「学校フィールド実習」で行う授業を想定し、教材の開発の捉え方について理解し、各自を教材を考える。

第14回：教材の開発（2）～模擬授業とその省察～

(担当：中野博之・三上雅生・成田頼昭)

各自が「学校フィールド実習」で行う授業を想定し、各自が開発して教材を基に模擬授業の学習指導案を考え、実践し授業の省察を行う。

第15回：授業全体のまとめ

(担当：中野博之・三上雅生)

授業全体を通じて、「学校フィールド実習」充実のためになすべきことを、理論と実践との往還の視点から考察し、今後の学校現場での教育実践の在り方について展望する。

テキスト

各授業の学習テーマに応じて提示する。

参考書・参考資料等

各授業の学習テーマに応じて提示する。

学生に対する評価

【評価の基準】

①教育課程について、理論・構造・歴史などの基本的視座から理解することができる。

- ②実習結果の検証方法について、理解することができる。
- ③教材研究に関わるできる。

【評価の構成】

- ①最終レポート (60%)
- ②事前学習ワークシート (20%)
- ③討論への参加状況など (20%)

授業科目区分	発展科目	開設コース	教育実践開発コース			
授業科目名 (英文名)	【27】実践的教育相談の課題と展開 (educational counseling advanced: issues and practice)					
単位	2 単位	必修・選択区分	選択			
授業方法	演習	開講年次・学期	2 年次・後期			
担当教員	吉原寛, 敦川真樹	担当形態	共同			
授業の到達目標	学校における教育相談が具体的にどのように展開されるのか, 実践例を通じて理解を深めることができる。					
授業の概要	基礎科目「教育相談の理論と方法」での学びを発展させ, 効果的に活動を展開していく方法や, 教員の役割について考える。また, 今日的な教育問題の解決と, 児童生徒の適応促進に向けた具体的方法について議論し, 理解を深める。ここで学ぶ理論的視点が学校現場における視点とつながりあい, 学校全体における教育相談活動が効果的に行われるための実践的方法を, 受講者自らも探索・開拓する。なお, 全回とも研究者教員と実務家教員のチーム・ティーチングで運営する。					
授業計画	<p>第1回：オリエンテーション (担当：吉原寛・敦川真樹)</p> <p>講義全体の内容を通して, 受講生の課題意識を深める。授業目標の共有と事例提供に関する倫理, 事例情報守秘の徹底等の基本的理解を再確認する。</p> <p>第2回：児童生徒の学校適応 (担当：吉原寛・敦川真樹)</p> <p>適応促進のための活動としての教育相談の活用について, 自験例もしくは国内外の実践事例とともに, ディスカッションを通じて検討する。</p> <p>第3回：集団の実態把握の理論と方法 (担当：吉原寛・敦川真樹)</p> <p>人間関係の視点から, 集団の実態を把握するための技法と, それを裏打ちする理論について体験的に学ぶ。</p> <p>第4回：集団の風土と力動の理解 (担当：吉原寛・敦川真樹)</p> <p>人間関係の在り方を規定する集団の風土と, 構成員間の力動を理解し, 働きかけるための方法を学ぶ。</p> <p>第5回：関係づくりの理論と方法（1）～学級集団の把握～ (担当：吉原寛・敦川真樹)</p> <p>関係づくりの具体的技法について演習を通じて体験的に学ぶとともに, 学級集団の把握の仕方を理解する。</p> <p>第6回：関係づくりの理論と方法（2）～学級集団がよりよく機能するための要件の検討～ (担当：吉原寛・敦川真樹)</p> <p>学級集団が社会としてよりよく機能するものとなるための要件について, 演習を通じて体験的に学ぶ。</p> <p>第7回：保護者との連携（1）～自験例の省察～</p>					

(担当：吉原寛・敦川真樹)

児童生徒の適応支援を保護者と協働的に行うための具体的方法を、自験例の実践事例をもとに、ディスカッションを通じて検討する。

第8回：保護者との連携（2）～国内外の実践事例の省察～

(担当：吉原寛・敦川真樹)

児童生徒の適応支援を保護者と協働的に行うための具体的方法を、国内外の実践事例をもとに、ディスカッションを通じて検討する。

第9回：教育相談の技法（1）～積極的傾聴の方法～

(担当：吉原寛・敦川真樹)

カウンセリングの基本である積極的傾聴の方法について、演習を通じて体験的に学ぶ。

第10回：教育相談の技法（2）～共感的応答の方法～

(担当：吉原寛・敦川真樹)

カウンセリングの基本である共感的応答の方法について、演習を通じて体験的に学ぶ。

第11回：教育相談の技法（3）～非言動的行動の観察方法～

(担当：吉原寛・敦川真樹)

児童生徒間の人間関係や、児童生徒個人の内面を反映する非言語的行動を観察する方法について、演習を通じて体験的に学ぶ。

第12回：教育相談の技法（4）～組織的な教育相談の展開～

(担当：吉原寛・敦川真樹)

組織的な教育相談の展開について、自験例もしくは国内外の実践事例をもとに、ディスカッションを通じて検討する。

第13回：ピア・サポート（1）～児童生徒の適応支援について～

(担当：吉原寛・敦川真樹)

児童生徒の適応支援に、他の児童生徒のサポートを活用する方法について、自験例もしくは国内外の実践事例をもとに、ディスカッションを通じて検討する。

第14回：ピア・サポート（2）～ピア・サポートの育成について～

(担当：吉原寛・敦川真樹)

児童生徒をピア・サポートとして育成する方法について、自験例もしくは国内外の実践事例をもとに、ディスカッションを通じて検討する。

第15回：教育相談の今日的課題と展望

(担当：吉原寛・敦川真樹)

今日の教育相談をめぐる課題と到達点について検討し、教員としての自らの課題を明確化する。

テキスト

各授業の学習テーマに応じて提示する。

参考書・参考資料等

各授業の学習テーマに応じて提示する。

学生に対する評価

【評価の基準】

- ①適応促進という視点から学校における教育相談の基本的性格について、理解することができる。
- ②教育相談に関する理論的理解をもとに、今日の学校・教育をめぐる問題に対して教育相談の果たす積極的役割を考察することができる。

【評価の構成】

- ①最終レポート（60%）

②事前学習ワークシート (20%)

③討論への参加状況など (20%)

授業科目区分	発展科目	開設コース	教育実践開発コース
授業科目名 (英文名)	【28】教育実践課題解決研究 (Research on solving problems of education practice)		
単位	2 単位	必修・選択区分	選択
授業方法	演習	開講年次・学期	平成30年度入学者 1年次・後期 平成29年度入学者 2年次・後期
担当教員	中妻雅彦、小寺弘幸	担当形態	共同
授業の到達目標 学校教育に対する社会的要請や法令理解を踏まえつつ、学級・学年経営、生徒指導、学校行事の在り方について理解を深める。また、地域と連携した生徒指導の在り方について展望することができる。			
授業の概要 学級経営や生徒指導についての対応策を協議することを通して、学級経営の基礎的事項及び技術を事例とともに学習する。主として、教職に対する社会的要請と法令理解を踏まえ、学級・学年経営、生徒指導、学校行事、地域連携、子ども理解について取り上げる。学級経営・学年経営・学校行事等の在り方、指導について実際の場面を想定しつつ、学級開き（模擬授業）、学級・学年通信作成など体験的な学びも取り入れながら授業を進めていく。また、保護者や地域と協力・連携した学級づくり、学年運営、生徒指導などについても理解を深める。			
授業計画 第1回：オリエンテーション (担当：中妻雅彦・小寺弘幸) 今日求められる学級・学校経営の在り方についての基本的理解を図るとともに、講義全体の内容を通観し、受講生の課題意識を深める。また、授業の進め方についての共通理解を図る。			
第2回：児童・生徒の成長と学級の位置づけ (担当：中妻雅彦・小寺弘幸) 児童・生徒の成長にとって学級の果たす役割について、具体的な実践事例をもとにしながら受講者間の討議によって検討し、理解を深める。			
第3回 学級担任の役割と困難 (担当：中妻雅彦・小寺弘幸) 学級や児童・生徒の成長にとって、学級担任の果たすべき役割及び期待される役割について理解し、その課題について探求する。			
第4回：学級経営計画の在り方と実際 (担当：中妻雅彦・小寺弘幸) 学級経営計画の意義と役割について理解を深め、学級経営計画の作成を試みる。			
第5回 学級開きの意義と役割 (担当：中妻雅彦・小寺弘幸) 年間の学級経営における「学級開き」の意義と役割について理解を深め、望ましい学級開きの在り方について模索する。			
第6回 学級通信を通じた学級づくり (担当：中妻雅彦・小寺弘幸) 学級経営における学級通信の意義と役割について理解を深める。その上で、児童・生徒理解を意識した学級通信の作成を試みる。			

第7回：担任教師の協働による学年運営

(担当：中妻雅彦・小寺弘幸)

学年運営における課題や困難について実践事例をもとに検討し、担任間の協働による学年運営の在り方について協議する。

第8回：学年主任の役割と困難

(担当：中妻雅彦・小寺弘幸)

学年運営における学年主任の役割と困難について事例をもとに検討し、対応の在り方について協議する。

第9回：学年経営と学年通信

(担当：中妻雅彦・小寺弘幸)

学年経営における学級通信の意義と役割について理解を深める。その上で、学年通信の作成を試みる。

第10回：保護者と連携した学年・学級経営

(担当：中妻雅彦・小寺弘幸)

保護者会及び保護者面談等の場面を想定し、保護者と連携した学年経営・学級経営の在り方の意義と課題について検討する。

第11回：文化行事の指導・運営と課題

(担当：中妻雅彦・小寺弘幸)

児童・生徒の成長にとって望ましい文化行事（文化祭・合唱コンクール等）の在り方や安全面での配慮、課題への対応について事例の検討をもとに理解を深める。

第12回：体育行事の指導・運営と課題

(担当：中妻雅彦・小寺弘幸)

児童・生徒の成長にとって望ましい体育行事（体育祭等）の在り方や安全面での配慮、課題への対応について事例の検討をもとに理解を深める。

第13回：地域社会と連携した行事の指導と運営

(担当：中妻雅彦・小寺弘幸)

地域と共に児童・生徒と育てるという観点から、地域と協働した学校行事の在り方について協議・検討し、行事の運営指導計画を立案する。

第14回：委員会・クラブ指導の意義と課題

(担当：中妻雅彦・小寺弘幸)

委員会活動・クラブ活動における生徒指導上の意義と課題について、実例を踏まえて協議・検討する。

第15回保護者・地域と連携した生徒指導

(担当：中妻雅彦・小寺弘幸)

今日求められる生徒指導の在り方においては、保護者のみならず地域との連携が必要であることについての理解を深め、望ましい連携の在り方について協議・検討する。

テキスト

各授業の学習テーマに応じて提示する。

参考書・参考資料等

各授業の学習テーマに応じて提示する。

学生に対する評価

【評価の基準】

①学級・学年経営の意義と基本的事項について理解する。

- ②学校行事の意義と課題について、児童・生徒の成長という観点から理解する。
- ③学級・学年経営、行事などの運営指導方針を立案できる。

【評価の構成】

- ①最終レポート (60%)
- ②講義内で作成した成果物（学級経営計画など）(20%)
- ③討論への参加状況など (20%)

授業科目区分	発展科目	開設コース	教育実践開発コース
授業科目名 (英文名)	【29】教育における社会的包摶の課題研究 (Research on the issues for social inclusion in education)		
単位	2 単位	必修・選択区分	選択
授業方法	演習	開講年次・学期	2 年次・後期
担当教員	吉田美穂, 吉原寛, 敦川真樹	担当形態	共同
授業の到達目標	<p>通常学級における特別な教育的ニーズを抱える児童・生徒についての理解を踏まえた上で、実際の事例に則した学級実践計画及び学級改善計画を作成することができるようになる。さらに、社会的包摶の観点から考察し、今後の学校現場での教育実践の在り方について展望することができる。</p>		
授業の概要	<p>基礎科目「教育における社会的包摶」での学びを基に展開される科目であり、学級において社会的包摶を実現するために必要なことを考える科目である。この科目では、インクルーシブ教育を含む社会的な包摶についての課題について、1学級の中での課題解決に向けた展開を展望しながら学級経営実践計画を作成したり、障害や貧困などの特別な教育的ニーズを抱える子どもに主眼を置きながら学級改善計画を作成したりしていく。各回の授業は計画作成作業と、途中経過及び成果の発表、並びにこれに基づく検討とで構成される。</p>		
授業計画	<p>第1回：オリエンテーション (担当：吉田美穂・吉原寛・敦川真樹) 講義全体の内容を通観し、受講生の課題意識を深める。また、授業の進め方についての共通理解を図る。</p> <p>第2回：社会的包摶に向けた学級経営の課題 (担当：吉田美穂・吉原寛・敦川真樹) 現在の学級経営の実状を「教育における社会的包摶」の視点で考えた時、どのような課題があるのかを事例や各種の調査の結果から考える。</p> <p>第3回：社会的包摶に向けた学級環境のデザイン (担当：吉田美穂・吉原寛・敦川真樹) 児童生徒への個別・集団支援を支える学級環境のデザインの在り方を考えるとともに、物的環境、人的環境を視野に入れた学級環境の在り方を考える。</p> <p>第4回：社会的包摶を実現する学級経営を支える教師間協働のデザイン (担当：吉田美穂・吉原寛・敦川真樹) 社会的包摶を実現できる学級経営を支える教師間協働について、事例を基に考察し、学校という職場において社会的包摶をどのように協働して支えていくのかについて考える。</p> <p>第5回：保護者との連携を図った社会的包摶に向けた学級経営 (担当：吉田美穂・吉原寛・敦川真樹) 保護者との協働をどのようにデザインするのか、また、PTA活動や地域の活動との連動をどのようにしていくのかを考えていく。</p> <p>第6回 実践事例検討と対応の実際（1）～学校内での協議を中心に～ (担当：吉田美穂・吉原寛・敦川真樹) 学校内での協働を中心に社会的包摶の視点から取り組まれた学級経営の実際の事例について、</p>		

その検討と対応への評価を行う。

第7回 実践事例検討と対応の実際（2）～学校外との連携を中心に～

(担当：吉田美穂・吉原寛・敦川真樹)

学校外（ソーシャルワーカー、行政機関など）との連携を中心に取り組まれた学級経営の実際の事例について、その検討と対応への評価を行う。

第8回：実践事例検討と対応の実際（3）～学校内外との協働～

(担当：吉田美穂・吉原寛・敦川真樹)

学校内外との協働により取り組まれた学級経営の実際の事例について、その検討と対応への評価を行う。

第9回：学級における社会的包摂の実際について学ぶ

(担当：吉田美穂・吉原寛・敦川真樹)

ゲストスピーカー（ソーシャルワーカーなど）との意見交換に基づき、実践場面における理論の応用の在り方について理解を深める。

第10回：学級改善計画の作成（1）～改善計画の作成～

(担当：吉田美穂・吉原寛・敦川真樹)

実際の事例をもとに具体的な事例を想定し、その課題への対応と解決に向けての改善計画の作成を学校内外との協働を意識しつつ試みる。

第11回：学級改善計画の作成（2）～学級改善計画作成の経過報告～

(担当：吉田美穂・吉原寛・敦川真樹)

学級改善計画作成の途中経過報告を行う。

第12回：学級改善計画の作成（3）～学級改善計画の省察～

(担当：吉田美穂・吉原寛・敦川真樹)

受講者相互での批評、さらに研究者・実務家教員の指導をもとにさらに計画を深める。

第13回：学級改善計画の作成（4）～特徴と要点の発表～

(担当：吉田美穂・吉原寛・敦川真樹)

各自の作成した学級改善計画について、その特徴と要点を発表する。

第14回：学級改善計画の作成（5）～学級改善計画の省察～

(担当：吉田美穂・吉原寛・敦川真樹)

発表を踏まえ、それぞれの計画について受講者相互での批評を行う。さらに、研究者・実務家教員の指導を受けて、受講者自身がそれぞれの計画を振り返る。

第15回：まとめ

(担当：吉田美穂・吉原寛・敦川真樹)

学校教育と教員の在り方について、社会的包摂の観点から改めて考察し、今後の学校現場での教育実践の在り方について展望する。

テキスト

各授業の学習テーマに応じて提示する。

参考書・参考資料等

各授業の学習テーマに応じて提示する。

学生に対する評価

【評価の基準】

①「教育の社会的包摂」の実現という観点から、学級経営実践計画を作成することができる。

②課題への対応を踏まえ、的確な学級改善計画を作成することができる。

③「教育の社会的包摂」の実現という観点から、学校教育・教員の在り方について展望すること

ができる。

【評価の構成】

- ①最終レポート (50%)
- ②作成した学級改善計画 (30%)
- ③討論への参加状況など (20%)

授業科目区分	発展科目	開設コース	教育実践開発コース
授業科目名 (英文名)	【30】幼児児童教育の理解 (Cooperation between Preschool and Elementary School Education)		
単位	2 単位	必修・選択区分	選択
授業方法	演習	開講年次・学期	2 年次・前期
担当教員	成田頼昭、武内裕明	担当形態	共同
授業の到達目標	幼児期から児童期にかけての発達の連続性や、幼児教育の特性を理解することを通じて、幼児期から児童期にかけての一貫した教育実践を構想することができる。		
授業の概要	学校教育の今日的課題のひとつである幼稚園から小学校への教育実践の円滑な接続のために、接続期の教育の計画・指導について議論する。テキストや参考文献を活用して、幼児期及び児童期の発達と学びの連続性に関する理解を深め、それぞれの学校段階での教育の相違について学ぶとともに、幼児期の教育に関する理論を踏まえて実際のスタートカリキュラムを検討することで、学びの連続性を保障するカリキュラムと実践の在り方についても考察する。		
授業計画	<p>第1回：オリエンテーション (担当：成田頼昭・武内裕明) 授業内容を通して、基本的概念に関する共通理解を図る。</p> <p>第2回：接続期の発達の理解（1）～認知発達～ (担当：成田頼昭・武内裕明) 幼児後期から児童前期にかけての認知発達について考察する。</p> <p>第3回：接続期の発達の理解（2）～社会性の発達～ (担当：成田頼昭・武内裕明) 幼児後期から児童前期にかけての社会性の発達について考察する。</p> <p>第4回：幼保小の滑らかな接続（1）～心理学的観点から～ (担当：成田頼昭・武内裕明) 心理学的観点から幼保小の滑らかな接続について論じる。</p> <p>第5回：幼保小の滑らかな接続（2）～保育の観点から～ (担当：成田頼昭・武内裕明) 保育の観点から幼保小の滑らかな接続について論じる。</p> <p>第6回：幼児期と児童期の教育の連携が求められる背景 (担当：成田頼昭・武内裕明) 社会的背景や学校の課題を踏まえ、幼児期と児童期の教育の連携が求められる背景について確認し、連携の在り方について考察する。</p> <p>第7回：保幼小連携の課題 (担当：成田頼昭・武内裕明) 保幼小連携の課題を、実践や報告に基づいて幼児教育の在り方から展望する。</p>		

第8回：保幼小連携の方策

(担当：成田頼昭・武内裕明)

幼児と児童の交流活動、教員間の相互交流、カリキュラム連携などの方策を通じて、幼児期と児童期の教育の連携によって、何がねらいとされているかについて議論する。

第9回：交流活動における互恵性

(担当：成田頼昭・武内裕明)

具体的な交流活動の事例から、幼児・児童それぞれの学びについて検討し、交流活動における互恵性の担保の方策を考える。

第10回：教員間の相互交流

(担当：成田頼昭・武内裕明)

教員間の相互交流の体制や交流の実践から、相互交流における教員の相互理解を促す方略を議論する。

第11回：幼児教育と学校教育の相違

(担当：成田頼昭・武内裕明)

現状の幼児教育と学校教育の相違を確認したうえで、21世紀型の能力育成を軸にどのように教育の連続性を確保していくかについて考察する。

第12回：アプローチカリキュラムとスタートカリキュラム

(担当：成田頼昭・武内裕明)

カリキュラム連携の方策であるアプローチカリキュラムとスタートカリキュラムの実際を確認し、連携の目的に照らして問題点を整理する。

第13回：アプローチカリキュラムの検討

(担当：成田頼昭・武内裕明)

アプローチカリキュラムの内容を検討し、より目的に沿ったカリキュラムについていくための方策を提案し、議論する。

第14回：スタートカリキュラムの検討

(担当：成田頼昭・武内裕明)

スタートカリキュラムの内容を検討し、より目的に沿ったカリキュラムについていくための方策を提案し、議論する。

第15回：総括討議

(担当：成田頼昭・武内裕明)

本科目での学びを総括し、それぞれの教育の一貫性を軸に、望ましい幼児期と児童期の教育の在り方について議論する。

テキスト

篠原孝子、田村学（2009）『幼稚園・保育所と小学校の連携ポイント』ぎょうせい

参考書・参考資料等

- 木村吉彦、仙台市教育委員会（2010）『「スタートカリキュラム」のすべて—仙台市発信・幼小連携の新しい視点』ぎょうせい
- 佐々木宏子、鳴門教育大学学校教育学部附属幼稚園（2004）『なめらかな幼小の連携教育—その実践とモデルカリキュラム』チャイルド本社
- その他各授業の学習テーマに応じて提示する。

学生に対する評価

【評価の基準】

- ①幼児期から児童期にかけての発達の連続性を理解している。
- ②現状の幼児期及び児童期の教育について、理論を踏まえた考察ができる。

③知識基盤社会における教育の目的に照らして、接続期の教育実践を展望できる。

【評価の構成】

- ①分担部分の発表内容（40%）
- ②議論や活動への参加状況など（20%）
- ③最終レポート（40%）

授業科目区分	教育実践研究科目	開設コース	全コース
授業科目名 (英文名)	【31】教育実践研究法（教育実践研究Ⅰ） (Research Method on Educational Practice(Research on Educational Practice I))		
単位	1 単位	必修・選択区分	必修
授業方法	演習	開講年次・学期	1 年次・前期
担当教員	中野博之, 小林央美, 中妻雅彦, 福島裕敏, 三浦智子, 吉田美穂, 吉原寛	担当形態	共同
授業の到達目標			
【教職実践開発コースの到達目標】 教育実践研究のデザイン・データ収集・分析などに関する基礎的知識技能について、学部段階での教育研究や教育実践を通じて得た知見をもとに、自らのテーマとの関わりで理解することができる。			
【ミドルリーダー養成コースの到達目標】 教育実践研究のデザイン・データ収集・分析などに関する基礎的知識技能について、これまでの教職経験などを通じて得た知見をもとに、自らのテーマとの関わりで理解することができる。			
授業の概要			
教育研究の方法、特に課題発見、仮説形成、仮説検証、改善へと向かう一連のプロセスを理解する。特に、自らの教育実践の省察に基づく課題発見から仮説形成への道筋をつけていく。また、様々な教育研究・調査法について、そのデザイン・データ収集・分析などの基礎的知識・技能について、実習等で収集した具体例などを交えながら学ぶ。これらを通じて、最終的には各自の研究課題を自ら設定できる力を培うとともに、それに即した教育研究方法を選び取ることができる力を培う。 本授業は、研究者教員が主として行うこととする。			
授業計画			
第1回：オリエンテーション (担当：中野博之・小林央美・中妻雅彦・福島裕敏・三浦智子・吉田美穂・吉原寛) 「教育調査法」についての基本的理解をもとに、講義全体の内容を通して、受講生の課題意識を深める。また、授業の進め方について共通理解を図る。			
第2回：調査研究のデザイン (担当：三浦智子・吉田美穂・吉原寛) 仮説発見、仮説構成、仮説検証といった一連の調査研究の流れについて学ぶ。			
第3回：省察とその方法（1）～行為志向と意味志向の省察～ (担当：中妻雅彦・福島裕敏) 教育実践における省察の方法について、行為志向・意味志向の省察を中心に学ぶ。			
第4回：省察とその方法（2）～省察と課題発見～ (担当：中妻雅彦・福島裕敏・吉田美穂) 省察を課題発見へつなげていく方法について学ぶ。			
第5回：様々な調査方法とその認識論的前提 (担当：福島裕敏・三浦智子・吉田美穂) 定量調査及び定性調査に関する様々な調査方法とその認識論的前提について学ぶ。			

第6回：アンケート調査とその技法（1）～質問の設計方法～

(担当：三浦智子・吉原寛)

アンケート調査の流れと質問紙の設計の方法について学ぶ。

第7回：アンケート調査とその技法（2）～基礎的知識と技法～

(担当：三浦智子・吉原寛)

アンケート調査の集計と分析の基礎的知識と技法について学ぶ。

第8回：アンケート調査とその技法（3）～多変量解析の技法～

(担当：三浦智子・吉原寛)

アンケート調査における多変量解析の技法について学ぶ。

第9回：エスノグラフィーとその技法（1）～データ収集の方法～

(担当：三浦智子・吉田美穂)

エスノグラフィーの方法論的基礎とデータ収集の方法について学ぶ。

第10回：エスノグラフィーとその技法（2）～データ分析の技法～

(担当：三浦智子・吉田美穂)

エスノグラフィーにおけるデータ分析の技法について学ぶ。

第11回：授業研究とその技法（1）～授業研究の方法論的基礎～

(担当：中野博之・中妻雅彦)

授業研究の方法論的基礎とデータ収集の方法について学ぶ。

第12回：授業研究とその技法（2）～データ分析方法～

(担当：中野博之・中妻雅彦)

授業研究のデータ分析の方法について学ぶ。

第13回：事例研究とその技法（1）～実践記録の作成の仕方～

(担当：小林央美・吉原寛)

事例研究の方法論的基礎と実践記録の作成の仕方について学ぶ。

第14回：事例研究とその技法（2）～実践記録の分析・検討～

(担当：小林央美・吉原寛)

事例研究における実践記録の分析・検討の方法について学ぶ。

第15回：教育実践研究の課題と展望

(担当：中野博之・小林央美・中妻雅彦・福島裕敏・三浦智子・吉田美穂・吉原寛)

教育研究方法に関する課題を総括し、自らの教育実践研究上の到達点と課題について考察する。

テキスト

特になし

参考書・参考資料等

- ・大槻達也 他 (2012)『教育研究とエビデンス 国際的動向と日本の現状と課題』明石書店
- ・小塩真司 (2012)『研究事例で学ぶ SPSS と Amos による心理・調査データ解析（第2版）』東京書籍
- ・教育論文の書き方研究会 (1996)『教育論文・研究報告の書き方』教育出版
- ・柴山真琴 (2006)『子どもエスノグラフィー入門—技法の基礎から活用まで』新曜社
- ・関口靖広 (2013)『教育研究のための質的研究法講座』北大路書房
- ・立田慶裕 (2005)『教育研究ハンドブック』世界思想社
- ・ネットワーク編集委員会 (2013)『授業づくりネットワーク No.8—教師のリフレクション（省察入門）』学事出版
- ・野田敏孝 (2005)『はじめての教育論文—現場教師が研究論文を書くための 65 のポイント』北大

路書房

- ・平井明代 (2012)『教育・心理系研究のためのデータ分析入門』東京書籍
- ・藤田和也 (2008)『養護教諭が担う「教育」とは何か—実践の考え方と進め方』農山漁村文化協会
- ・メリアム, S.B. 他 (2010)『調査研究法ガイドブック—教育における調査のデザインと実施・報告』ミネルヴァ書房
- ・その他各授業の学習テーマに応じて提示する。

学生に対する評価

【評価の基準】

- ①教育実践に関する省察と研究的視点を基本的に理解している。
- ②教育実践研究の様々な方法・技法を基本的に理解している。
- ③自らの教育実践研究の目的に応じた方法・技法を適切に考えることができる。

【評価の構成】

- ①最終レポート (60%)
- ②事前学習ワークシート (20%)
- ③討論への参加状況など (20%)

授業科目区分	教育実践研究科目	開設コース	全コース
授業科目名 (英文名)	【32】教育実践研究Ⅱ (Research on Educational PracticeⅡ)		
単位	1 単位	必修・選択区分	必修
授業方法	演習	開講年次・学期	1 年次・後期
担当教員	中野博之, 上野秀人, 小林央美, 中妻雅彦, 福島裕敏, 三浦智子, 吉田美穂, 吉原寛, 森本洋介, 瀧本壽史, 三上雅生, 小寺弘幸, 古川郁生, 敦川真樹, 三戸延聖, 成田頼昭	担当形態	共同
授業の到達目標			
【教育実践開発コースの到達目標】 自らの実践についての事実の収集及び先行研究の調査を通し、研究課題解決のために「仮説形成→実践→省察→仮説の修正」というサイクルを繰り返し、仮説を基にした実践の在り方を理解していく。			
【ミドルリーダー養成コースの到達目標】 院生が参加した研修会や校内研修会での事実の収集及び先行研究の調査を通し、研究課題解決のための仮説の形成及び修正を行い、仮説を洗練させていく。最終的には、2年次の行う研究活動の仮説とその検証の視点を形成できるようにする。			
授業の概要			
本授業は、ゼミ形式で行う。授業では、各院生のレポート発表とそれに基づいた院生同士及び教員との議論を通して、各院生の課題解決に向けた研究仮説を洗練させていく。なお、レポートの内容は以下のようなものとする。			
<ul style="list-style-type: none"> ・「実習ⅡA（仮説形成）」, 「実習ⅡB（仮説形成）」での事実とその分析の記録や実践記録とその考察 ・自らの研究課題に関連した先行研究とその研究成果についての考察 <p>なお、授業は指導教員ごとにグループに分かれ、各グループ毎に行うが、原則、2つ程度のグループが合同で行うようにし、教育実践開発コースでは仮説を基にした実践の在り方を理解できるよう、ミドルリーダー養成コースでは研究課題解決のための仮説とその検証の視点を形成できるようにする。</p>			
授業計画			
第1回：オリエンテーション (担当：全担当教員) 本講義の目的を確認し先行研究の調べ方、レポートの仕方を理解する。			
第2回：院生によるレポート発表と協議(先行研究の収集について) (担当：全担当教員) 院生によるレポート発表を通して、議論を行い、どのような先行研究があるのか整理をする。			
第3回：院生によるレポート発表と協議(先行研究の成果の整理) (担当：全担当教員) 院生によるレポート発表を通して、議論を行い先行研究の成果を整理する。			
第4回：院生によるレポート発表と協議(先行研究の課題の整理)			

(担当：全担当教員)

院生によるレポート発表を通して、議論を行い、先行研究の課題を整理する。

第5回：院生によるレポート発表と協議(自らの実践経験の整理)

(担当：全担当教員)

院生によるレポート発表を通して、議論を行い、自らの実践経験の成果と課題を整理する。

第6回：院生によるレポート発表と協議(実習における実践の検討)

(担当：全担当教員)

院生によるレポート発表を通して、議論を行い、実習に向けての仮説を洗練していく。

第7回：院生によるレポート発表と協議(実習における実践の分析)

(担当：全担当教員)

院生によるレポート発表を通して、議論を行い、実習での実践を受けて仮説を洗練していく。

第8回：院生によるレポート発表と協議(実習全体の整理)

(担当：全担当教員)

院生によるレポート発表を通して、議論を行い、「実習ⅡA（仮説形成）」及び「実習ⅡB（仮説形成）」の総括とともに、課題解決に向けた仮説を洗練していく。

第2回～第8回：院生によるレポート発表と協議

(担当：全担当教員)

「実習ⅡA（仮説形成）」（ミドルリーダー養成コース）及び「実習ⅡB（仮説形成）」（教育実践開発コース）と連動して行う。院生によるレポート発表を通して、議論を行い、最終的には課題解決に向けた仮説を洗練していく。

テキスト

必要に応じて提示する。

参考書・参考資料等

必要に応じて提示する。

学生に対する評価

【評価の基準】

院生同士の議論や教員との議論及び先行研究の研究成果から課題解決に向けた仮説とその検証の視点を洗練できる。

【評価の構成】

①最終的につけられた研究仮説とその検証の視点 (40%)

②授業でのレポート (40%)

③授業の協議会での発言内容 (20%)

授業科目区分	教育実践研究科目	開設コース	全コース
授業科目名 (英文名)	【33】教育実践研究Ⅲ (Research on Educational PracticeⅢ)		
単位	1 単位	必修・選択区分	必修
授業方法	演習	開講年次・学期	2 年次・前期
担当教員	中野博之, 上野秀人, 小林央美, 中妻雅彦, 福島裕敏, 三浦智子, 吉田美穂, 吉原寛, 森本洋介, 瀧本壽史, 三上雅生, 小寺弘幸, 古川郁生, 敦川真樹, 三戸延聖, 成田頼昭	担当形態	共同
授業の到達目標	<p>【教育実践開発コースの到達目標】 自分で設定した仮説に基づいた実践を事実を基に省察し、改善策を考えるという研究的なサイクルを実践することができる。</p> <p>【ミドルリーダー養成コースの到達目標】 1年次に形成した仮説を基にした勤務校や地域での実践を省察することを通して、「仮説形成→実践→省察→仮説の修正と改善案の作成」といった探究的な研究活動を続けることができる。</p>		
授業の概要	<p>本授業は、ゼミ形式で行う。授業では、各院生のレポート発表とそれに基づいた院生同士及び教員との議論を通して、各院生の課題解決に向けた研究仮説を洗練させていく。なお、レポートの内容は以下のようなものとする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「実習ⅢA（課題検証）」、「実習ⅢB（課題検証）」での事実とその分析の記録や実践記録とその考察 ・実践に基づいた事実から明確になった課題の解決のため、または、研究仮説を修正するために必要となった先行研究の成果と課題の考察 <p>なお、授業は指導教員ごとにグループに分かれ、各グループ毎に行うが、原則、2つ程度のグループが合同で行うようにし、教育実践開発コースでは仮説に基づいた実践を事実を基に省察し改善策を考えるという研究的なサイクルを実践することができるよう、ミドルリーダー養成コースでは「仮説形成→実践→省察→仮説の修正と改善案の作成」といった探究的な研究活動を続けることができるようとする。</p>		
授業計画	<p>第1回：院生によるレポート発表と協議(先行研究の再整理) (担当：全担当教員) 院生によるレポート発表を通して、議論を行い、先行研究の再整理を行いながら仮説の修正や課題解決に向けた改善策の修正を行っていく。</p> <p>第2回：院生によるレポート発表と協議(これまでの実習での成果と課題の再整理) (担当：全担当教員) 院生によるレポート発表を通して、議論を行い、これまでの実習での成果と課題の再整理を行いながら仮説の修正や課題解決に向けた改善策の修正を行っていく。</p> <p>第3回：院生によるレポート発表と協議(実践に向けた準備…全体構想) (担当：全担当教員) 院生によるレポート発表を通して、議論を行い、仮説の修正や課題解決に向けた改善策の修正</p>		

を行いながら実践に向けた全体構想を洗練する。

第4回：院生によるレポート発表と協議(実践に向けた準備…研究目的と研究計画)
(担当：全担当教員)

院生によるレポート発表を通して、議論を行い、仮説の修正や課題解決に向けた改善策の修正を行なながら実践に向けた研究目的と研究計画を洗練する。

第5回：院生によるレポート発表と協議(実践の省察)
(担当：全担当教員)

院生によるレポート発表を通して、議論を行い、実践を省察し仮説の修正や課題解決に向けた改善策の修正を行っていく。

第6回：院生によるレポート発表と協議(実践の成果の分析)

(担当：全担当教員)

院生によるレポート発表を通して、議論を行い、実践の成果を分析し仮説の修正や課題解決に向けた改善策の修正を行っていく。

第7回：院生によるレポート発表と協議(実践の課題の分析)

(担当：全担当教員)

院生によるレポート発表を通して、議論を行い、実践の課題を分析し仮説の修正や課題解決に向けた改善策の修正を行っていく。

第8回：院生によるレポート発表と協議(実践の総括)

(担当：全担当教員)

院生によるレポート発表を通して、議論を行い、「実習ⅢA（課題検証）」及び「実習ⅢB（課題検証）」の総括をしながら、今後の研究について仮説の修正や課題解決に向けた改善策の修正を行う。

テキスト

必要に応じて提示する。

参考書・参考資料等

必要に応じて提示する。

学生に対する評価

【評価の基準】

院生同士の議論や教員との議論及び先行研究の研究成果から課題解決に向けた研究仮説や改善策を修正できる。

【評価の構成】

- ①最終的につくり出した研究仮説とその改善策 (40%)
- ②授業でのレポート (40%)
- ③授業の協議会での発言内容 (20%)

授業科目区分	教育実践研究科目	開設コース	全コース
授業科目名 (英文名)	【34】教育実践研究IV (Research on Educational PracticeIV)		
単位	1 単位	必修・選択区分	必修
授業方法	演習	開講年次・学期	2 年次・後期
担当教員	中野博之, 上野秀人, 小林央美, 中妻雅彦, 福島裕敏, 三浦智子, 吉田美穂, 吉原寛, 瀧本壽史, 三上雅生, 小寺弘幸, 古川郁生, 敦川真樹, 三戸延聖, 成田頼昭	担当形態	共同
授業の到達目標			
【教育実践開発コースの到達目標】 2年間の学校フィールド実習や集中実習での実践を収集した事実を基に考察し、どのような成果があったのか理論と融合させてまとめ、さらに今後の課題を明らかにした上で発表をすることができる。			
【ミドルリーダー養成コースの到達目標】 県、地域、学校が抱える教育課題の解決のために行った研修会等での収集した事実を基に考察し、どのような成果があったのか理論と融合させてまとめ、さらに今後の課題を明らかにした上で発表をすることができる。			
授業の概要			
本授業は、ゼミ形式で行う。授業では各院生のレポート発表とそれに基づいた院生同士及び教員との議論を通して、教育実践研究発表会での発表内容と報告書の記述内容を洗練させていく。なお、レポートの内容は以下のようなものとする。 <ul style="list-style-type: none">・「実習ⅢA（課題検証）」及び「実習IVB（課題解決検証）」での事実とその考察・2年間の学びの成果と今後の課題 なお、授業は指導教員ごとにグループに分かれ、各グループ毎に行うが、原則、2つ程度のグループが合同で行うようにし、教育実践開発コースでは、2年間でどのような成果があったのか理論と融合させてまとめ、さらに今後の課題を明らかにした上で「学習成果報告書」を作成し発表できるように、ミドルリーダー養成コースでは、現任校や勤務地域での研修会でどのような成果があったのか理論と融合させてまとめ、さらに今後の課題を明らかにした上で「学習成果報告書」を作成し発表できるようにする。			
また、本授業の最後に、「学習成果報告書」を基にした「教育実践研究発表会」を行い、各自の研究の成果と今後の課題を青森県内だけではなく、広く全国の教職大学院関係者に発表をする。			
授業計画			
第1回：教育実践研究発表会と「学習成果報告書」作成への見通し (担当：全担当教員) 各院生が報告書の大まかな内容と、発表会での大まかな発表内容を発表し、議論を行い、報告書の記述内容と発表内容の洗練を行う。			
第2回：「学習成果報告書」の作成(報告書の全体構成の整理) (担当：全担当教員) 院生によるレポート発表を通して、議論を行い、報告書の全体構成について洗練していく。			
第3回：「学習成果報告書」の作成(実践報告の分析の整理)			

(担当：全担当教員)

院生によるレポート発表を通して、議論を行い、報告書の実践報告とその分析についての記述内容を洗練していく。

第4回：「学習成果報告書」の作成(成果と課題の整理)

(担当：全担当教員)

院生によるレポート発表を通して、議論を行い、報告書の成果と課題の記述内容を洗練していく。

第5回：「教育実践研究発表会」にむけての準備(全体の構成の整理)

(担当：全担当教員)

院生によるレポート発表を通して、議論を行い、発表内容の全体構成を洗練する。

第6回：「教育実践研究発表会」にむけての準備(研究の目的と先行研究の整理)

(担当：全担当教員)

院生によるレポート発表を通して、議論を行い、研究の目的と先行研究についての発表内容を洗練していく。

第7回：「教育実践研究発表会」にむけての準備(実践の成果と課題)

(担当：全担当教員)

院生によるレポート発表を通して、議論を行い、これまでの実践の成果と課題についての発表内容を洗練していく。

第8回：教育実践研究発表会

(担当：全担当教員)

各自の研究の成果と今後の課題を青森県内だけではなく広く全国の教職大学院関係者に報告書とともに発表をする。

テキスト

必要に応じて提示する。

参考書・参考資料等

必要に応じて提示する。

学生に対する評価

【評価の基準】

院生同士の議論や教員との議論及び2年間の学びを収集した事実を基に考察し、成果と今後の課題としてまとめることができる。

【評価の構成】

- ①「学習成果報告書」(60%)
- ②授業でのレポート (20%)
- ③授業の協議会での発言内容 (20%)

授業科目区分	実習科目	開設コース	ミドルリーダー養成コース
授業科目名 (英文名)	【35】実習 I A-1 (課題把握) (practice I A-1 (Researching a subject for study))		
単位	4 単位	必修・選択区分	必修
授業方法	実習	開講年次・学期	1 年次・前期
担当教員	中野博之, 上野秀人, 小林央美, 中妻雅彦, 福島裕敏, 三浦智子, 吉田美穂, 吉原寛, 森本洋介, 瀧本壽史, 三上雅生, 小寺弘幸, 古川郁生, 敦川真樹, 三戸延聖, 成田頼昭	担当形態	共同
授業の到達目標	<p>附属学校や教育関連施設における事実の収集と分析の仕方を学ぶ実習や、附属学校での公開研究会への参加などを通して、各施設が抱える眞の教育課題を把握するとともに、各院生の研究課題について考えることができる。</p> <p>ミドルリーダーとして必要な視点を携え、教育課題に対して創造的に取り組む資質能力を高める。</p>		
授業の概要	<p>連携協力校や附属学校での事実の収集と分析の仕方を学ぶ実習や、公開研究会等への参加を通して、「教育実践研究法（教育実践研究Ⅰ）」と連動して自らの課題の把握の仕方を知る。また、教育関連施設での実習を通して、業務や研修会がどのような意図を持って企画・実施され、その成果がどのように省察されているのか、また、自らの課題解決に活用できる人材や地域材がどのような所に所属しているのかについて把握していくとともに、地域や学校についての眞の課題を捉える方法を知る。</p>		
授業計画	<p>【実習施設】 (連携協力校) ・附属学校（幼稚園、小学校、中学校、特別支援学校） ・県立高等学校</p> <p>(教育関連施設) ・青森県教育委員会教育庁 ・青森県総合学校教育センター ・青森県総合社会教育センター ・青森県立梵珠少年自然の家 ・弘前市教育委員会教育センター</p>		
【実習内容】	<ul style="list-style-type: none"> ・連携協力校における事実の収集と分析の仕方を学ぶ実習（8時間×5日：2,400分） ・教育関連施設における事実の収集と分析の仕方を学ぶ実習（8時間×5日：2,400分） ・連携協力校における公開研究会等への参加（8時間×5日：2,400分） 		
【受講のアドバイス】	<ul style="list-style-type: none"> ・連携協力校や教育関連施設の教育活動の特徴を理解し、自己の実践的研究課題との接点を明確にするために、積極的に事実を収集するとともに議論に参加すること。 ・実習後は、大学での授業の成果と課題を整理しておくこと。 ・実習を振り返り、様々な施設での眞の課題について分析・考察すること。 		

テキスト

必要に応じて提示する。

参考書・参考資料等

必要に応じて提示する。

学生に対する評価**【評価の基準】**

細部項目及び具体的な基準は、実習部会において策定する。

「収集した事実とその分析・参加の計画」項目

- ・自らの課題把握のための観察計画や参加計画が適切であるか。

「収集した事実とその分析・参加内容」項目

- ・事実(子供反応、インタビューの結果、教師の行動等)の収集をすることができたか。
- ・協議の場で収集した事実を基にさらに情報収集するための質問や自らの考えを深めるための意見交流ができたか。
- ・公開研の場において状況に応じて臨機応変に対応することができたか

「省察」項目

- ・記録に基づいて、自分の経験を省みることができているか。
- ・事実に基づいて、分析し各施設が抱える真の課題は何かについて見い出すことができたか。

【方法】

各施設での実習担当者の観察記録、各院生の実習後のレポートを基に、実習担当教員と実習部会が協議を行う。

【評価の構成】

- ①実習のレポート (60%)
- ②収集した事実の記述 (20%)
- ③協議会への参加状況など (20%)

授業科目区分	実習科目	開設コース	ミドルリーダー養成コース
授業科目名 (英文名)	【36】実習 I A-2 (課題把握) (practice I A-2 (Researching a subject for study))		
単位	1 単位	必修・選択区分	必修
授業方法	実習	開講年次・学期	1 年次・前期
担当教員	中野博之, 上野秀人, 小林央美, 中妻雅彦, 三浦智子, 吉田美穂, 吉原寛, 瀧本壽史, 三上雅生, 小寺弘幸, 古川郁生, 敦川真樹, 三戸延聖, 成田頼昭	担当形態	共同
授業の到達目標 連携協力校（附属学校）における授業実践省察実習や、連携協力校における教育実践開発コース院生のメンター実習などを通して、各院生の研究課題の把握について考える。 ミドルリーダーとして必要な視点を携え、教育課題に対して創造的に取り組む資質能力を高める。			
授業の概要 教育実践開発コースの院生が連携協力校で行っている実習に付き添いメンター実習を行い、同僚に対して促進的に関わる方法について学ぶとともに若手教員が抱える課題を把握する。また、現職院生同士による授業研究実習を行い（主に附属学校）、「教育実践研究法（教育実践研究Ⅰ）」と連動して、自己の教育実践についての課題を把握する。 なお、授業実践に当たっては、学習指導案で仮説と検証の視点を明確に、その検証の視点にそつて、授業での子どもの事実を基に仮説が検証されたのかどうかについて議論を行う。			
授業計画 【実習施設】 (連携協力校) <ul style="list-style-type: none"> ・附属学校（幼稚園、小学校、中学校、特別支援学校）、弘前市立大成小学校、弘前市立松原小学校、弘前市立文京小学校、弘前市立桔梗野小学校、弘前市立朝陽小学校、弘前市立第一中学校、弘前市立第三中学校、弘前市立第四中学校、青森県立弘前高等学校、青森県立弘前中央高等学校、青森県立弘前第一養護学校 			
【実習内容】 <ul style="list-style-type: none"> ・連携協力校（附属学校）における授業実践省察実習（5時間×3日：900分） ・連携協力校における教育実践開発コース院生のメンター実習（5時間×3日：900分） 			
【受講のアドバイス】 実習を振り返り、自分の授業や助言指導の効果について、分析・考察すること。			
テキスト 必要に応じて提示する。			
参考書・参考資料等 必要に応じて提示する。			
学生に対する評価 【評価の基準】 細部項目及び具体的な基準は、実習部会において策定する。 「実践の計画」項目 <ul style="list-style-type: none"> ・自らの課題把握のための実践計画(授業の目標と評価の視点等)が適切であるか。 ・メンターとして教育実践開発コースの院生がどのようなことに気づき対応できるようになれるか。 			

ばよいのかについて適切な目標をもつことができるか。

「実践的指導方法」項目

- ・子供及び教育実践開発コースの院生に対して、臨機応変に対応し、子供及び教職実践開発コースの院生の学びの機会を適切に与えることができたか。

「省察」項目

- ・事実に基づいて、自分の指導や助言についての成果と課題を適切に評価し、自らの研究課題の把握に役立たせているか。

【方法】

授業研究での協議会の協議の様子、各院生の実習後のレポートを基に、実習担当教員と実習部会が協議を行う。

【評価の構成】

- ①実習のレポート (60%)
- ②実践した授業や助言の様子 (20%)
- ③協議会への参加状況など (20%)

授業科目区分	実習科目	開設コース	ミドルリーダー養成コース
授業科目名 (英文名)	【37】実習ⅡA（仮説形成） (practice ⅡA (Making a hypothesis for study))		
単位	3 単位	必修・選択区分	必修
授業方法	実習	開講年次・学期	1 年次・後期
担当教員	中野博之, 上野秀人, 小林央美, 中妻雅彦, 福島裕敏, 三浦智子, 吉田美穂, 吉原寛, 森本洋介, 瀧本壽史, 三上雅生, 小寺弘幸, 古川郁生, 敦川真樹, 三戸延聖, 成田頼昭	担当形態	共同
授業の到達目標	<p>連携協力校における研修会の参加や、青森県総合学校教育センターにおける研修会の企画・運営、弘前市教育委員会教育センターでの長期研修参加などを通して、各院生の研究課題解決のための仮説を形成する。ミドルリーダーとして必要な視点携え、教育課題に対して創造的に取り組む資質能力を高める。</p>		
授業の概要	<p>自らの課題に沿って選択した研修会に参加する。連携協力校の校内研修会に参加する場合は、研修会の企画会議や学習指導案検討会に資料等を持って参加し研修会開催校の教員と意見交換を行う。また、研修会には本専攻の教員と参加し、研修会の課題と成果をまとめる。青森県総合学校教育センターの研修会に参加する場合は、本専攻の教員とともに研修会の企画から関わり、研修会当日は研修会の手伝いを行ながら研修会主催者の視点を持って研修会に参加する。また、教育相談等の研修会については、本専攻の教員の助言を得た上で、学校管理者、研修会参加教員、子ども、保護者の面談を見学する。</p> <p>なお、本実習も「教育実践研究Ⅱ」と連動させ、指導教員の指導のもと、課題の設定及び課題解決のための仮説の形成を行う。</p>		
授業計画	<p>【実習施設】 (連携協力校)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・弘前市立大成小学校、弘前市立松原小学校、弘前市立文京小学校、弘前市立桔梗野小学校、弘前市立朝陽小学校、弘前市立第一中学校、弘前市立第三中学校、弘前市立第四中学校、青森県立弘前高等学校、青森県立弘前中央高等学校、青森県立弘前第一養護学校 ・市立小学校及び中学校 ・青森県教育委員会指定校 <p>(教育関連施設)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・青森県総合学校教育センター ・弘前市教育委員会教育センター <p>【実習内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・連携協力校における研修会への参加（5時間×12日：3,600分） ・青森県総合学校教育センターにおける研修会の企画及び運営（6時間×2日：720分） ・弘前市教育委員会教育センターにおける研修会の企画及び運営（6時間×3日：1,080分） <p>【受講のアドバイス】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・連携協力校の教育活動の特徴を理解し、自己の実践的研究課題との接点を明確にするために、学校側との打合せを積極的に行うこと。 		

- ・連携協力校の校内研修に準備段階から関わり、企画・運営の手法を学びながら、課題解決の在り方を探る。
- ・青森県総合学校教育センターで実施される研修（ミドルリーダー研修など）において、主催者の立場で企画・運営を行い、研修に参加している教員と協働しながら教員研修の進め方などについても学ぶ。
- ・弘前市教育委員会教育センターにおいて開講されている「長期研修」に参加し、主催者の視点での研修会企画・運営の在り方を学ぶ。
- ・実習後は大学での授業の成果と課題を整理しておくこと。
- ・実習を振り返り、課題に対する対応策の効果について分析・考察すること。

テキスト

必要に応じて提示する。

参考書・参考資料等

必要に応じて提示する。

学生に対する評価

【評価の基準】

細部項目及び具体的な基準は、実習部会において策定する。

「実践の計画」項目

- ・課題解決のための仮説と検証の視点が適切に設定されているか。

「実践的指導方法」項目

- ・研修会が参加者にとって有用なものとなるように臨機応変に対応することができたか。

「省察」項目

- ・自己の実践の評価が、検証の視点に基づいて的確にかつ深くなされているか。

- ・実践の省察に基づいて、仮説の検証を行い、新たな仮説設定をできたか。

【方法】

各施設での実習担当者の観察記録、各院生の「教育実践研究Ⅱ」でのレポートを基に、実習担当教員と実習部会が協議を行う。

【評価の構成】

- ①各施設での実習の様子（60%）
- ②協議会への参加状況など（20%）
- ③設定した各院生の研究課題解決のための仮説（20%）

授業科目区分	実習科目	開設コース	ミドルリーダー養成コース
授業科目名 (英文名)	【38】実習ⅢA（課題検証） (practiceⅢA (Confirming a hypothesis))		
単位	2 単位	必修・選択区分	必修
授業方法	実習	開講年次・学期	2 年次・通年
担当教員	中野博之, 上野秀人, 小林央美, 中妻雅彦, 三浦智子, 吉田美穂, 吉原寛, 瀧本壽史, 三上雅生, 小寺弘幸, 古川郁生, 敦川真樹, 三戸延聖, 成田頼昭	担当形態	共同
授業の到達目標			
勤務校における研修会の企画・運営などを通して、研究課題解決のための仮説の検証を行う。ミドルリーダーとして必要な視点携え、教育課題に対して創造的に取り組む資質能力を高める。			
授業の概要			
1 年次に形成した仮説を基に、勤務校での課題を協働で解決するための方策（学校組織編成、研修会計画等）を実践する。実践にあたっては、学校や地域の教育課題をどのようにしてとらえたのか、その課題を解決するためにどのように仮説を設定したのかについて明確にするようとする。また、指導教員が勤務校に出向き、実習の評価を行い、それを基に「教育実践研究Ⅲ」及び「教育実践研究Ⅳ」での省察活動を指導する。さらに、研修会等に参加した参加者がどのようにすれば研修会等の成果と捉えられるのかを明らかにした仮説検証の視点も明確にさせ、その検証の視点を基に省察を行う。			
授業計画			
【実習施設】 勤務校			
【実習内容】			
・勤務校における実習（6 時間×10 日：3,600 分） ・勤務校及び指導教員と相談の上「実習計画書」を作成し、実習部会の点検を経て実施する。			
【受講のアドバイス】 83.			
・勤務校の教育活動の特徴を理解し、教育課題を協働で解決するための方策について研究する。 ・教育課題解決のために、学校組織編成案や研修会実施案を作成し、検討をした上で実施する。 ・実習後は、大学での授業の成果と課題を整理しておくこと。 ・実習を振り返り、課題に対する対応策の効果について分析・考察し、「教育実践研究発表会」に備えること。			
テキスト			
必要に応じて提示する。			
参考書・参考資料等			
必要に応じて提示する。			
学生に対する評価			
【評価の基準】			
細部項目及び具体的な基準は、実習部会において策定する。			
「実践の計画」項目			
・課題解決のための仮説と検証の視点が適切に設定されているか。			
「実践的指導方法」項目			

- ・研修会が参加者にとって有用なものとなるように臨機応変に対応することができたか。
- 「省察」項目
- ・事実を基に仮説の検証を行い、研修会の成果と課題を分析するとともに新たな課題把握と仮説設定をすることができたか。

【方法】

実習担当者の観察記録、各院生の「教育実践研究III」及び「教育実践研究IV」でのレポートを基に、実習担当教員と実習部会が協議を行う。

【評価の構成】

- ①設定した研修会の内容 (50%)
- ②研修会の成果と課題の分析 (50%)

授業科目区分	実習科目	開設コース	教育実践開発コース
授業科目名 (英文名)	【39】実習 I B-1（課題把握） (practice I B-1 (Researching a subject for study))		
単位	1 単位	必修・選択区分	必修
授業方法	実習	開講年次・学期	1 年次・前期
担当教員	中野博之, 上野秀人, 小林央美, 中妻雅彦, 福島裕敏, 三浦智子, 吉田美穂, 吉原寛, 森本洋介, 瀧本壽史, 三上雅生, 小寺弘幸, 古川郁生, 敦川真樹, 三戸延聖, 成田頼昭	担当形態	共同
授業の到達目標	連携協力校における事実の収集と分析の仕方を学ぶ実習を通して、2年間の実習における「課題把握の仕方」を学ぶ。教育課題に対応するための理論と事実に基づいた確かな実践力・省察力を備えた教員を目指す。		
授業の概要	連携協力校での実習を通して事実の収集の仕方や授業の分析の仕方を身に付け、自らの課題の把握の方法を学び、学校の実状を掌握するとともに自らの課題設定の資料とする。実習にあたっては、事実と解釈を分けて記録すること、まずは事実の収集に集中すること（解釈は収集後にできること）に心がけるようとする。また、省察については、一つの事実から多様な解釈ができること、解釈の客観性を高めるためには、さらにより多くの事実の収集が必要であることを理解した上で進めていく。		
授業計画	<p>【実習施設】 (連携協力校)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・附属学校（幼稚園、小学校、中学校、特別支援学校） ・県立高等学校 		
【実習内容】	連携協力校における事実の収集と分析の仕方を学ぶ実習（6時間×5日：1,800分）		
【受講のアドバイス】	<ul style="list-style-type: none"> ・連携協力校の教育活動の特徴を理解し、自己の実践的研究課題との接点を明確にするために、積極的に事実を収集するとともに議論に参加すること。 ・実習後は、大学での授業の成果と各自の研究課題及び課題を整理しておくこと。 		
テキスト	必要に応じて提示する。		
参考書・参考資料等	必要に応じて提示する。		
学生に対する評価	<p>【評価の基準】</p> <p>細部項目及び具体的な基準は、実習部会において策定する。</p> <p>「収集した事実とその分析・参加の計画」項目</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自らの課題把握のための観察計画や参加計画が適切であるか。 <p>「収集した事実とその分析・参加の内容」項目</p>		

- ・事実(子供反応、教師の行動等)の収集をすることができたか。
 - ・収集した事実を基に協議を行い、1つの事実について多様な解釈を出すことができたか。
- 「省察」項目
- ・1つの事実に複数の解釈があることを理解するとともに、眞の研究課題は事実の収集から見い出せることを理解できたか。
 - ・収集した事実と各自の教育実践の能力を比較し、各自の実践的な課題を把握することができたか。

【方法】

各施設での実習担当者の収集した事実と分析の記録、各院生の実習後のレポートを基に、実習担当教員と実習部会とで協議を行う。

【評価の構成】

- ①実習のレポート (60%)
- ②収集した事実の記述 (20%)
- ③協議会への参加状況など (20%)

授業科目区分	実習科目	開設コース	教育実践開発コース
授業科目名 (英文名)	【40】実習 I B-2（課題把握） (practice I B-2 (Researching a subject for study))		
単位	2 単位	必修・選択区分	必修
授業方法	実習	開講年次・学期	1 年次・前期
担当教員	中野博之, 上野秀人, 小林央美, 中妻雅彦, 三浦智子, 吉田美穂, 吉原寛, 瀧本壽史, 三上雅生, 小寺弘幸, 古川郁生, 敦川真樹, 三戸延聖, 成田頼昭	担当形態	共同
授業の到達目標 週 1 日, 連携協力校において, 教員と同じ様に教育活動を行う学校フィールド実習や, 5 日間連続で行う集中実習を通して, 2 年間の実習における「課題把握」を行う。教育課題に対応するための理論と事実に基づいた確かな実践力・省察力を備えた教員を目指す。			
授業の概要 週 1 日, 連携協力校において, 教員と同じ様に教育活動に取り組む学校フィールド実習を行う。また, 連携協力校において, 通常の授業期間外の 9 月に 5 日間連続（1 週間）で集中実習を行う。 こうした教育全般に関わる学校フィールド実習と集中実習を「教育実践研究法（教育実践研究 I）」と連動させ, 各自の教育実践的な課題及び研究的な課題を実践での事実を基に把握できるようにする。			
授業計画			
【実習施設】 (連携協力校) ・弘前市立大成小学校, 弘前市立松原小学校, 弘前市立文京小学校, 弘前市立桔梗野小学校, 弘前市立朝陽小学校, 弘前市立第一中学校, 弘前市立第三中学校, 弘前市立第四中学校, 青森県立弘前高等学校, 青森県立弘前中央高等学校, 青森県立弘前第一養護学校 ・市立小学校及び中学校, 県立高等学校及び特別支援学校			
【実習内容】 ・連携協力校における学校フィールド実習（6 時間×5 日 : 1,800 分） ・連携協力校における集中実習（6 時間×5 日 : 1,800 分） ※集中実習では, 4 時間以上（1 日あたり 1 授業以上）は, 単独で授業実践等を行うものとする。			
【受講のアドバイス】 ・連携協力校の教育活動の特徴を理解し, 自己の実践的研究課題との接点を明確にするために, 学校側との打合せを積極的に行うこと。 ・実習後は, 大学での授業の前に各自の教育実践の成果と課題を整理しておくこと。 ・実習を振り返り, 課題に対する対応策の効果について分析・考察すること。			
テキスト 必要に応じて提示する。			
参考書・参考資料等 必要に応じて提示する。			
学生に対する評価			
【評価の基準】 細部項目及び具体的な基準は, 実習部会において策定する。 「実践の計画」項目 ・自らの課題把握のための実践計画が適切であるか。			

- ・課題把握に向けた実践が有効になされる計画か。
- 「実践的指導方法」項目
- ・子供の反応を基に臨機応変に対応することができたか。
- 「省察」項目
- ・自己の実践の評価が、記録に基づいて的確にかつ深くなされているか。
 - ・実践の省察に基づいて、単元構成ないし課題把握の対応策が適切に再構成されているか。

【方法】

大学院専任教員と実習校の指導教員とが緊密に連携し、実習日誌や指導案、記録等を資料として活用し、評価項目・基準に照らし合わせて評価を行う。

【評価の構成】

- ①授業実践 (40%)
- ②実習日誌 (30%)
- ③実習の記録等 (30%)

授業科目区分	実習科目	開設コース	教育実践開発コース
授業科目名 (英文名)	【41】実習ⅡB（仮説形成） (practice ⅡB (Making a hypothesis for study))		
単位	2 単位	必修・選択区分	必修
授業方法	実習	開講年次・学期	1 年次・後期
担当教員	中野博之, 上野秀人, 小林央美, 中妻雅彦, 三浦智子, 吉田美穂, 吉原寛, 瀧本壽史, 三上雅生, 小寺弘幸, 古川郁生, 敦川真樹, 三戸延聖, 成田頼昭	担当形態	共同
授業の到達目標 連携協力校における、週1日教員と同じ様に教育活動を行う学校フィールド実習での教育実践を通して、2年間の実習における「仮説形成」を行う。教育課題に対応するための理論と事実に基づいた確かな実践力・省察力を備えた教員を目指す。			
授業の概要 実習ⅠB-1（課題把握）及び実習ⅠB-2（課題把握）の成果と課題をもとに、連携協力校において、週1日教員と同じ様に教育活動に取り組む学校フィールド実習を行う。こうした教育全般に関わる学校フィールド実習を「教育実践研究Ⅱ」と連動させ、各自の教育実践的な課題及び研究的な課題についてその解決のための仮説を設定し、仮説を基に、実践→省察を行い、仮説の洗練を行っていく。			
授業計画 【実習施設】 (連携協力校) ・弘前市立大成小学校、弘前市立松原小学校、弘前市立文京小学校、弘前市立桔梗野小学校、弘前市立朝陽小学校、弘前市立第一中学校、弘前市立第三中学校、弘前市立第四中学校、青森県立弘前高等学校、青森県立弘前中央高等学校、青森県立弘前第一養護学校 ・市立小学校及び中学校、県立高等学校及び特別支援学校			
【実習内容】 連携協力校における学校フィールド実習（5時間×12日：3,600分） ※学校フィールド実習では、6時間以上（2週間あたり1授業以上）は、単独で授業実践等を行うものとする。			
【受講のアドバイス】 ・連携協力校の教育活動の特徴を理解し、自己の実践的研究課題との接点を明確にするために、学校側との打合せを積極的に行うこと。 ・実習後は、大学での授業の前に各自の教育実践の成果と課題を整理しておくこと。 ・実習を振り返り、課題に対する対応策の効果について分析・考察すること。			
テキスト 必要に応じて提示する。			
参考書・参考資料等 必要に応じて提示する。			
学生に対する評価 【評価の基準】 細部項目及び具体的な基準は、実習部会において策定する。			

「実践の計画」項目

- ・自らの仮説形成のための実践計画が適切であるか。
- ・仮説形成に向けた実践が有効になされる計画か。

「実践的指導方法」項目

- ・子供の反応を基に臨機応変に対応することができたか。

「省察」項目

- ・自己の実践の評価が、記録に基づいて的確にかつ深くなされているか。
- ・実践の省察に基づいて、仮説形成がされているか。

【方法】

大学院専任教員と実習校の指導教員とが緊密に連携し、実習日誌や指導案、記録等を資料として活用し、評価項目・基準に照らし合わせて評価を行う。

【評価の構成】

- ①授業実践（40%）
- ②実習日誌（30%）
- ③実習の記録等（30%）

授業科目区分	実習科目	開設コース	教育実践開発コース
授業科目名 (英文名)	【42】実習ⅢB（課題解決研究） (practice ⅢB (Solving the subjects))		
単位	3 単位	必修・選択区分	必修
授業方法	実習	開講年次・学期	2 年次・前期
担当教員	中野博之, 上野秀人, 小林央美, 中妻雅彦, 三浦智子, 吉田美穂, 吉原寛, 瀧本壽史, 三上雅生, 小寺弘幸, 古川郁生, 敦川真樹, 三戸延聖, 成田頼昭	担当形態	共同
授業の到達目標	連携協力校における、週 1 日教員と同じ様に教育活動を行う学校フィールド実習及び 10 日間連続で行う集中実習での教育実践を通して、「課題解決方法の追究」を行う。教育課題に対応するための理論と事実に基づいた確かな実践力・省察力を備えた教員を目指す。		
授業の概要	<p>1 年次での実習を基盤にして、連携協力校における、週 1 日教員と同じ様に教育活動に取り組む学校フィールド実習や 10 日間連続で行う集中実習(8 月～9 月の期間)での教育実践を通して、自ら発見した課題の解決のための仮説を設定し、実践・省察を行う。その上で、改善策を考えるとともに新たな課題を見つけるという研究的な課題解決のサイクルを繰り返していく。</p> <p>なお、実践の省察については、連携協力校の担当教員の助言を基にして、「教育実践研究Ⅲ」と連動して行う。</p>		
授業計画	<p>【実習施設】 (連携協力校)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・弘前市立大成小学校、弘前市立松原小学校、弘前市立文京小学校、弘前市立桔梗野小学校、弘前市立朝陽小学校、弘前市立第一中学校、弘前市立第三中学校、弘前市立第四中学校、青森県立弘前高等学校、青森県立弘前中央高等学校、青森県立弘前第一養護学校 ・市立小学校及び中学校、県立高等学校及び特別支援学校 		
【実習内容】	<ul style="list-style-type: none"> ・連携協力校における学校フィールド実習（6 時間×7 日：2,520 分） ・連携協力校における集中実習（6 時間×10 日：3,600 分） <p>※学校フィールド実習では、4 時間以上（2 週間あたり 1 授業以上）は単独で授業実践等を行い、集中実習では 10 時間以上（1 日あたり 1 授業以上）は単独で授業実践等を行うものとする。</p>		
【受講のアドバイス】	<ul style="list-style-type: none"> ・連携協力校の教育活動の特徴を理解し、自己の実践的研究課題との接点を明確にするために、学校側との打合せを積極的に行うこと。 ・実習後は、大学での授業の前に各自の教育実践の成果と課題を整理しておくこと。 ・実習を振り返り、課題に対する対応策の効果について分析・考察すること。 		
テキスト	必要に応じて提示する。		
参考書・参考資料等	必要に応じて提示する。		

学生に対する評価

【評価の基準】

細部項目及び具体的な基準は、実習部会において策定する。

「実践の計画」項目

- ・自らの仮説に基づいた実践を行うための実践計画(検証の視点の設定等)が適切であるか。

「実践的指導方法」項目

- ・子供の反応を基に臨機応変に対応することができたか。

「省察」項目

- ・実践の事実と検証の視点に基づいて、仮説を検証し、課題の解決のために新たな仮説を設定することができたか。

【方法】

大学院専任教員と実習校の指導教員とが緊密に連携し、実習日誌や指導案、記録等を資料として活用し、評価項目・基準に照らし合わせて評価を行う。

【評価の構成】

- ①授業実践 (40%)
- ②実習日誌 (30%)
- ③実習の記録等 (30%)

授業科目区分	実習科目	開設コース	教育実践開発コース
授業科目名 (英文名)	【43】実習IVB（課題解決検証） (practice IVB (Solving subjects))		
単位	2 単位	必修・選択区分	必修
授業方法	実習	開講年次・学期	2 年次・後期
担当教員	中野博之, 上野秀人, 小林央美, 中妻雅彦, 三浦智子, 吉田美穂, 吉原寛, 瀧本壽史, 三上雅生, 小寺弘幸, 古川郁生, 敦川真樹, 三戸延聖, 成田頼昭	担当形態	共同
授業の到達目標			
連携協力校における、週 1 日教員と同じ様に教育活動を行う学校フィールド実習での教育実践を通して、「課題解決方法の検証」を行う。教育課題に対応するための理論と事実に基づいた確かな実践力・省察力を備えた教員を目指す。			
授業の概要			
連携協力校における、週 1 日教員と同じ様に教育活動に取り組む学校フィールド実習を通して、自分で設定した課題解決のための取り組みを省察し、検証しつつ改善を行い、最終的に成果をまとめる。			
なお、実践の省察については、連携協力校の担当教員の助言を基にして、「教育実践研究IV」と連動でして行う。そして、教育全般に関わる実践力習得のための理論と方法を理解する。			
授業計画			
【実習施設】 (連携協力校) ・弘前市立大成小学校、弘前市立松原小学校、弘前市立文京小学校、弘前市立桔梗野小学校、弘前市立朝陽小学校、弘前市立第一中学校、弘前市立第三中学校、弘前市立第四中学校、青森県立弘前高等学校、青森県立弘前中央高等学校、青森県立弘前第一養護学校 ・市立小学校及び中学校、県立高等学校及び特別支援学校			
【実習内容】			
連携協力校における学校フィールド実習（6 時間×12 日：4,320 分） ※学校フィールド実習では、6 時間以上（2 週間あたり 1 授業以上）は単独で授業実践等を行うものとする。			
【受講のアドバイス】			
・連携協力校の教育活動の特徴を理解し、自己の実践的研究課題との接点を明確にするために、学校側との打合せを積極的に行うこと。 ・実習後は、大学での授業の前に各自の教育実践の成果と課題を整理しておくこと。 ・実習を振り返り、課題に対する対応策の効果について分析・考察すること。			
テキスト			
必要に応じて提示する。			
参考書・参考資料等			
必要に応じて提示する。			
学生に対する評価			
【評価の基準】 細部項目及び具体的な基準は、実習部会において策定する。 「実践の計画」項目			

- ・自らの2年間のまとめに向かった実践を行うための実践計画が適切であるか。
- ・2年間のまとめに向かった実践が有効になされる計画か。

「実践的指導方法」項目

- ・子供の反応を基に臨機応変に対応することができたか。

「省察」項目

- ・自己の実践の評価が、仮説とその検証の視点に基づいて的確にかつ深くなされているか。
- ・2年間の教育実践力の向上や研究課題の解決に向けた取り組みについて省察し、各自の成長と今後の課題を把握することができたか。

【方法】

大学院専任教員と実習校の指導教員とが緊密に連携し、実習日誌や指導案、記録等を資料として活用し、評価項目・基準に照らし合わせて評価を行う。

【評価の構成】

- ①授業実践 (40%)
- ②実習日誌 (30%)
- ③実習の記録等 (30%)